法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

鳩間方言の住関係語彙

加治工，真市

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言 / 琉球の方言
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
51
(終了ページ / End Page)
106
(発行年 / Year)
1991-03-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012629

Hosei University Repository

鳩間方言の住関係語彙

加治工　真　市

アイ˥ク [ʔaiku]（名）「枂（おうこ）」の義か。物を荷う棒。タキアイク [tąkiaiku]（竹製の枂），ニーカタミアイ˥ク [ni:katami-ąiku]（荷をかつぐ棒）などがある。木製のアイクは，タルキ，キチなどを利用して作った。直径約６～７センチの若木を利用して，両端を尖らせて鉤状にし，紐がこの部分にかかるようにして，荷物を両端に吊し担ぐようにしたもの。例，アイ˥クシ　ミジ˥カタ˥ミ [ʔaikuʃi　midʒi　kątami]（棒で水を担げ）

アカガーラ [ʔakaga:ra]（名）赤瓦。沖縄産の赤瓦のこと。鳩間島の人は赤瓦を買うためにイガガラス [ʔigagarasu]（イカの塩漬），カツヌ・バタガラ˥ス [kątsunu·batagarasu]（鰹の腸の塩漬け）などを沖縄本島へ輸出した。水産物を売って毎年建築用材を購入したものである。例，アカガーラーン˥　ヤキヌ　ヨー˥ムノー　˥シディ　パリ˥ス [ʔakaga:ra:n　jakinu　jo:muno:　ʃidi　parisu]（赤瓦も焼成の弱いものは風解していく）

アカル [ʔakaru]（名）障子のこと。老人層の人が用いる。七十歳代以下の人は，ほとんど使用しない。ソージ [so:gʒi]（障子）を多用する。おそらく共通語の影響であろう。例，ムカ˥シプソー　ソージバ˥　アカル˥ティ　アゾーッタ˥ル　セー [mukaʃi-pu̯so:　so:m̩dʒiba　ʔakaruti　ʔadzo:ttaru　se:]（昔の人は障子を「あかり」とおっしゃったよ。そうそう思い出したよ）

アカル [ʔakaru]（名）「明り（アカリ）」の義か。明（あかり）障子のこと。老人層はアカル [ʔakaru] を多用するが，壮年以下ではあまり使用しない。ほとんど理解語の程度にとどまっている。例，ムカ˥シプソー　ヨー　ソージバ　アカル˥ティ　アゾーッ˥タヨー [mukaʃipu̯so:　jo:　so:dʒiba　ʔakaruti　ʔadzo:tta　jo:]（昔の人はねえ，障子を，アカルと言われたよ）

アキパタックン [ʔakipatakkuŋ]（他動）①「開けはたける」の意。すっかり開け広げる。家の戸を全部開け放つこと。②着物の裾などをすっかり開け広げてしまう。③見せてはならない所まで開放して公開してしまう。アキパタッカヌ [ʔakipątakkanu]（開け広げない），アキパタッキティ [ʔakipątakkiti]（開け広げて），アキパタッキ˥プサン [ʔakipatakki-pu̯saŋ]（開け広げたい）例，˥ヤドゥ　アキパタッキ˥ [jadu　ʔakipątakki]（戸を全部開け放しなさい）

アクン [ʔakuŋ]（他動）開ける。˥ヤドゥ　アクン˥ [jadu　ʔakuŋ]（戸を開ける）。アカヌ [ʔakanu]（開けない），アキティ [ʔakiti]（開けて），アキッフィーリ [ʔakiffi:ri]（開けてくれ），アキ˥プサン [ʔakipu̯saŋ]（開けたい）。例，シトゥム˥テー　ロク˥ジナー　˥ヤ

Hosei University Repository

ドゥ　アクン［ʃi̥tumute:　rokudʒina:　jadu　ʔakuŋ］（朝は六時に戸を開ける）。フチ˥アキ˥バ［Φu̥tʃi　ʔakiba］（口を開けなさいよ）

アサ˥ニビ［ʔasanibi］（名）ねぼう（寝坊）。「朝寝」の義。農家は朝が早いので，嫁が寝坊をすると舅や姑に嫌われた。鳩間島で歌われている『でんさ節』では「朝（アサ）にびしょうる女（ミドゥム）　朝引（アサビキ）きしょうる女（ミドゥム）　うりからどぅ　きはめて　むんどうや　くぬみょうるでんさ」と般われている。例，キナイヌ　ムンドー˥ヤ　アサ˥ニビラティ　ムカ˥シパナセー˥アル［kinainu　mundo:ja　ʔasanibirati　mukaʃi　panaʃe:　ʔaru］（家内の問答≪喧嘩≫は朝寝坊から始まると昔の人の教にある≪昔話にある≫）

アダナ˥シジナ［ʔadanaʃidʒina］（名）アダンの気根の繊維で綯った縄。「アダナシ綱」の義。アダンの気根（直径5～7センチ，長さ，60～80センチ）を切ってきて，皮を剝ぎ，約2ミリ程の厚さに裂いて乾燥し，それを細かく裂いて綯いあげた綱。直径3ミリ程の太さに綯う縄をユー˥ル［ju:ru］（「撚り」の義か）という。この縄は民具のアン˥スク［ʔansu̥ku］（弁当入れ。魚籠。物入れ）やアウ˥ダ［ʔauda］（もっこ）を作るのに重宝された。

また，このユー˥ルは正月の「凧揚げ」用の縄としても用いた。正月の二ケ月前から，子供たちはユールを綯うためにアダナ˥シを切って乾燥した。出来るだけ細かく裂くことが細いユール［ju:ru］（「小撚り」の義か）を綯う上で必要であった。例，アダナ˥シ　˥サキティ　アダナ˥シ・ジナトゥ　ピキダマ　トゥバシユー˥ル　ナーディ˥ー［ʔadanaʃi　sḁkiti　ʔadanaʃi-dʒinatu　pi̥kidama　tubaʃi-ju:ru　na:　di:］（アダンを裂いて，アダナシ綱と凧揚げ縄を綯おうよ）

アダン˥パー・ムス［ʔadampa:-musu］（名）「アダン葉筵」の義。アダンの葉の刺を除いて陰干しにし，1センチ幅の大きさに裂いて，ムスフミ˥・ヤマ［musuΦumi-jama］（筵編み機）で編んだもの。粗い筵であるから，座敷用には使わず，炊事場の床や，戸外の木陰などに敷いて子供を遊ばせたり，午睡の際に利用したりした。アダナ˥シの繊維で綯った小縄で編むので，ゴツゴツした肌触りであるが，かえってこれが涼をとるのに好都合であった。

アナ˥プリヤ［ʔanapurija:］（名）「穴掘屋」の義。掘っ建て小屋。普通，30～40センチ程の穴を掘って柱を立て，穴の囲りに砂利や小石を詰めて土を混ぜ，突き固める。土に埋まる部分を火で焼いておくと腐触しにくいと言われている。アナ˥プリヤーは，普通は炊事用小屋，農具保管用小屋，牛小屋，鶏小屋などを作るのに用いた建築法である。例，トー˥ラー　アナ˥プリヤー　ダー˥［to:ra:　ʔanapurija:　da:］（炊事小屋は穴掘り小屋だよ）

アフ［ʔaΦu］（名）「灰汁」のこと。灰を水に浸してそのうわ澄みを取ったもの。汚れ落しや染物に用いた。アク→アフと音韻変化して生成された形。ku→fu は法則的である。ッフォーン［ffo:ŋ］（黒い），ッフン［ffuŋ］（食う），マッファ［maffa］（枕）。例，パイヌ˥

Hosei University Repository

アフ˥シ　アラウ˥カー　ユグリモー˥　ウティ˥ルン［painu　ʔaΦuʃi　ʔarauka:　juguri-muno:　ʔutiruŋ］（灰の灰汁で洗うと汚れものは落ちるよ）

アマ˥ダラ［ʔamadara］（名）「雨垂れ」の義か。軒先のこと。アマダラン˥ッサーラ［ʔamadaranssa:ra］（「雨垂の下」の義，軒下のこと）。例，アマダラン˥ッサーンヌ　イシェー　ワー˥　アマダラミジ˥ヌ　˥ウティクー　˥ウビシ　˥アナ　ピッカ˥リ　ベ˥ー［ʔamadaranssa:nnu　ʔiʃe:　wa:　ʔamadara-midʒinu　ʔutiku:　ʔubiʃi　ʔana　pikkari　be:］（軒下の石は，まあ，あなた，雨垂れ水が落ちてくるだけで，穴があけられているよ）

アマドゥ［ʔamadu］（名）「雨戸」の義。ヌキヤー［nukija:］（貫き家）の戸のこと。板張りの外戸。幅3尺，長さ6尺に作ることが普通であった。窓の外側に，シキー［ʃi̥ki:］（敷居）とカムイ［kamui］（鴨居）をとりつけて，それにアマドゥ（雨戸）を立てて，引き戸（ヤドゥパシ˥ル）にするもの。例，˥ヨイ　ソー˥ル　˥ピンマー　アマドー˥　ムール　パンツァシタ˥［joi　so:ru　pimma:　ʔamado:　mu:ru　pantsaʃi̥ta］（祝い事をされるときはアマドは全部はずした）

イー˥ル［ʔi:ru］（名）錐。木材などに小さな穴をあけるための道具。直径約2センチ，長さ約20センチの円錐形の柄に，直径約5ミリ，長さ約10センチの鉄線を打ちこみ，先端部を三角錐状に研いで尖らせたもの。両手で揉みながら押して穴をあける。˥イダフニ（板舟，サバニ）は，これで穴をあけ，竹釘を打ちこんで接いでいく。例，イールシ　˥アナ　ピッ˥キバ［ʔi:ruʃi　ʔana　pikkiba］（錐で穴をあけなさいよ）

イーロー˥マ［ʔi:ro:ma］（名）小さな錐の意。イー˥ル［ʔi:ru］（錐）に，指小辞「-マ」が下接したもの。「マ」は沖縄本島方言の-グヮー［gwa:］，宮古方言の「-ガマ」［-gama］と同じ。鳩間方言の指小辞は，「ガマ」と共通する形態的特徴をもっている。例，イーロー˥マ　イー˥ネーラ　カリ˥クー［ʔi:ro:ma　ʔi:ne:ra　kariku:］（小さな錐を西隣の家から借りてきなさい）

イシジ［ʔiʃidʒi］（名）礎石。珊瑚石の一つ，菊目石（海花石）の死殻を取って来て，頭頂を削って，柱の土台となる礎石としたもの。イシジを置く際，その下の部分に砂利（ザラ［dzara］という）や砕石を穴につめて突き固める。そのための道具を˥ヤッセー［jasse:］（直径30センチ，長さ約1メートル程の丸大に，数本の把手をつけ，それを持って，数人一組で地面を打ちつけて地固めをするもの）という。歌をうたいながら村人が集まって地固めをした。

イス［ʔisu］（名）椅子。共通語よりの借用語。老人層は，ビリダイ［biridai］（座り台）という。背もたれの付いたもの。例，イス˥ナー　ヌーリ˥　パナン˥ギ　シーベーン˥ケンマー　˥ブリウティ　ナー˥ヌ［ʔisuna:　nu:ri　panaŋgi　ʃi:be:ŋkemma:　buriuti　na:nu］（椅子に乗って，いたずらしている中に，折れてしまった）

Hosei University Repository

イチバン˥ザ [ʔitʃibandza]（名）「一番座」の義。家の中で最上の部屋。東側に面し，採光もよく，大切な客を接待するのに用いる。通常，ザー˥トゥク [dzaːtʉku]（床の間）をしつらえて，掛軸などを飾り，香炉を置き，コン˥ジン [kondʒiŋ]（金神）を信仰している。金神に向って行くことを，コン˥ジン　カミ [kondʒiŋ　kami]（金神に向って）といい，タブーとされている。例，イチバン˥ザー　カンダカー˥ン [ʔitʃibandzaː　kandakaːŋ]（一番座は，神高い≪神霊が高い≫）

イツァ˥ークビ [ʔitsa-kubi]（名）板壁。板で茸いた壁のこと。普通は，サンブ˥・イツァ [sambuʔitsa]（三分板，杉板の最も薄いもの）を用いて壁を茸くのにした。杉板が導入される以前は，西表の山中より，フクイキー [Φʉkui-kiː]（ウラジロエノキ）を切り出して，それを˥バキティ [bakiti]（木挽きして）壁板を作ったという。茅壁は小屋を作る際に作った。例，イツァ˥クベー　カジヌ˥　フカ˥バン　ソーヤ　ナー˥ヌ [ʔitsakubeː　kadʒinu　Φʉkaban　soːja　naːnu]（板壁は風が吹いても心配はない）

イッス˥ビン [ʔissu-biŋ]（名）一升瓶。酒やソーユ [soːju]（醤油）などを入れるガラス製の容器。イッス˥クビン [ʔissu-kubiŋ] ともいう。パイ˥ター [paitaː]（「南方端」の義か。西表島上原から赤離までの北岸一帯。水田地帯）へ行く時や，イガメー [ʔigameː]（「イカ海」の義，イカ釣り漁で出漁すること）などへ出る際には，イッスクビンに水を詰めて，二本ほど持参した。西表では，ナマ˥ミジ [namamidʒi]（生水）を飲むと，プーキ [puːki]（「風気」の義。風土病，マラリヤのこと）にかゝるといわれていたので，水は島から持参した生水を夏場には飲んだ。イガメーに出漁する際にも，一晩の飲み水として一升瓶１本分。予備として１本を持参した。例，パイ˥ター　トーサ˥　トゥリン　ピームドゥル　シー˥パルピンマー　イッス˥ビンナー　ミジ　フミ˥　ムティパリ˥シタ [paitaː　toːsa　turim　piːmuduru　ʃiː　parupimmaː　ʔissu-binnaː　midʒi　Φumi　muti　pariʃʉta]（南方端≪西表≫へ田草取りに日帰りで行くときは，一升瓶に水を汲んでもっていった。

イツァ˥フン [ʔitsaΦuŋ]（名）「板釘」の義。板（三分板）は戸や壁に用いるが，それに打つための釘は短かい一寸釘か，七分釘を用いた。その短い，壁板，戸板用の釘を特にイツァ˥フンという。例，イツゥフン˥マー　イシゥカーマヌ　フンバ˥　シゥカイオール˥ヌ　ウリバ˥　イツァ˥フンティ　アズ˥ [ʔitsaΦummaː　ʔisʉkaːmanu　Φumba　sʉkaioːrunu　ʔuriba　ʔitsaΦunti　ʔadzu]（板釘は短い釘を使われるが，それを板釘という）

イラ˥カ [ʔiraka]（名）甍。家の上棟。棟瓦。ヤー˥ヌ・ティジ [jaːnu-tidʒi]（家の頂）ともいう。瓦茸きの場合は，頂上に土をのせて，その上に雄瓦を乗せてムチ [mutʃi]（漆喰）を塗り，形を整えて仕上げる。東の面と西の面も漆喰で化粧塗りをして仕上げる。例，カー˥ラ・ヤーヌ　イラ˥カナ　パトゥザヌ　トゥマリ　ベー [kaːra-jaːnu　ʔirakana　pʉtudzanu　tumari　beː]（瓦家の甍に鳩が止っている）

Hosei University Repository

˥イン［ʔiŋ］（名）縁，縁側。トゥーシ［tuːʃi］のこと。˥マンタヌ・イン［mantanu ʔiŋ］（前の縁。家の南面の縁），アンタヌ˥・イン［ʔantanu ʔiŋ］（東側の縁）のようにいう。例，˥マンタヌ・インラ　アンタヌ˥・イン　バー˥キ　ゾー˥キンシ　ッスリ˥［mantanu ʔinra ʔantanu ʔin baːki dzoːkinʃi ssuri］（前の縁から東の縁まで，雑巾でふきなさい）

˥イン［ʔiŋ］（名）縁側，「縁」の義。トゥーシ［tuːʃi］ともいう。アンタヌ˥・イン［ʔantanu-iŋ］（東側の縁），˥マンタヌ・イン［mantanu-iŋ］（前方の縁，南側の縁），インタヌ˥・イン［ʔintanu-iŋ］（西側の縁）などがある。一番座，二番座，三番座の囲りを縁側にして，板張りにした床面。普通は，幅３尺，長さ九尺程度に作るのが多い。例，˥マンタヌ・インナ　バー˥キ　マイダーラ˥　シミ˥シケー［mantanu inna baːki maidaːra ʃimi ʃi̥keː］（前の縁側にまで米俵を積んでおいてある）

インタ˥・ヤドゥ［ʔinta-jadu］（名）西側の戸，「西屋戸」の義か。普通は勝手口の戸をさす。マーシャドゥ［maːʃi-jadu］（「回わし屋戸」の義。ドア形式の戸のこと。回わして開閉するのでいう）になっていたり，ピキヤドゥ［pi̥kijadu］（引き戸）形式になっていたりする。例，インタ˥・ヤドゥ　アキティ˥　キボーシ˥　ンザ˥ン［ʔinta-jadu ʔakiti kiboːʃi ʔndzaʃi］（西の戸≪勝手口の戸≫を開けて煙を出しなさい）

ウーガー˥ラ［ʔuːgaːra］（名）雄瓦。ミーガー˥ラ［miːgaːra］（雌瓦）の接続部に粘土を盛り，その上に被せて連結するのに用いる瓦。内径約11センチ，長さ約25センチの半円柱状の瓦。片方の先端部に接ぎ手を作ってある。例，ウーガーラ˥ヌ　シギフチ˥ナー　ムチ　ヌーリ˥バ［ʔuːgaːranu ʃigiΦu̥tʃinaː mutʃi nuːriba］（雄瓦の接ぎ目に漆喰を塗りなさいよ）

ウールパイ［ʔuːrupai］（名）「珊瑚灰」の義か。石灰のこと。鳩間島では枝珊瑚の枯れたものを集めて，浜辺で焼き，それを土の中に埋めて作っていた。そのウールパイに稲藁を５～６センチ程に切ったものを混ぜ，水を加えて搗き，混合して漆喰に仕上げていた。漆喰を捏ねることをムチアー˥シ［mutʃi-ʔaːʃi］という。例，ウール˥　ヤキティ　ウールパイ˥　スク˥ラ　ディ˥ー［ʔuːru jakiti ʔuːrupai su̥kura diː］（珊瑚を焼いて石灰を作ろうよ）

ウキル［ʔukiru］（名）燠，消炭。鳩間島では，西表島北岸の田地の囲りから，マーキ［maːki］（「真木」の義か。樹木を燃料としたもの。薪）のタム˥ヌ［tamunu］（薪）が豊富にとれた。そのマーキを燃やして出来る燠のことをいう。ユシ˥キキー［juʃi̥ki-kiː］（すすき）の燃え残りは燠にならない。例，カマチェーラ˥　ウキル　プサイ˥　ピバ˥チナウティ˥クー［kamatʃeːra ʔukiru pu̥sai pibatʃinaː ʔutikuː］（竈から燠を拾い，火鉢に入れて移してもってきなさい）

ウシヌ˥・ヤー［ʔuʃinu-jaː］（名）「牛の家」の義。牛舎のこと。屋敷内に牛小屋を作った家はごく小数で，普通は原野の木陰に牛をつなぐか，村はずれの空き屋敷に牛小屋を建てて，

Hosei University Repository

雨や台風の時にその中に入れて，カキンᄀグ［kąkiŋgu］（保護）した。

例，ウシᄀナー　ᄀアガダンヌ　ブリブンダ　ヤーᄀヌ　カクᄀナー　ウシヌᄀ・ヤー　スクランᄀセン［ʔuʃina:　ʔagadannu　buribunda　ja:nu　kakuna:　ʔuʃinu-ja:　sụkaranseŋ］（牛には，だにがいるから，屋敷の中に牛小屋を作らなかった）

ウジル［ʔudʒiru］（名）燃料の一つ。マーキに対して，下等な燃料である。島の畑の周辺にある雑木の小枝を畑仕事の合間に刈り取って枯らせ，家に持ち帰って燃料とした。柴。小柴を燃料としたもの。バンᄀスル［bansuru］（バンザクロ，グワバ）の木の小枝や，ゴーナᄀキー［go:naki:］（桑の木の小枝）などが多くウジᄀルとして利用されていた。例，ウジᄀル　スリキー　モーシᄀバ［ʔudʒiru　suriki　mo:ʃiba］（小柴を刈りてきて燃やしなさいよ）

ᄀウズ［ʔudzu］（名）布団，綿を布地でくるんで寝る時にかけて使うもの。夜具。昔は一枚の布団に四方から足を入れて寝るのが普通であった。布団の中身は，網状に張った木綿糸に綿花を掛けて仕立ててあった。

例，ピーᄀヤカー　ᄀウズ　ウラᄀシ　ᄀカビ　ニビᄀバ［pi:jaka:　ʔudzu　ʔuraʃi　kabi　nibiba］（寒かったら布団をおろして被って寝なさい）

ウズᄀヌ・バタ［ʔudzunu-bata］（名）「布団の腹わた。中身」の義。布団の中身に入れる綿のこと。まわたや屑綿を布団の中身に入れて，重い布団を作っていた。例，ドゥクᄀヌ　ᄀウズ　ピキシキᄀナー　ウズᄀヌバター　キシナーᄀヌ［dukunu　ʔudzu　pi̥kiʃikina:　ʔudzunu-bata　ki̥ʃina:nu］（あんまり布団を引っぱるので，布団の中身の綿が切れてしまったよ）

ウズᄀヌ・カー［ʔudzunu-ka:］（名）「布団の皮」の義。布団の表。布団の中身の綿を包んだ布地。タカバᄀタ［tąkabata］（高機）やジバᄀタ［dʒibata］（地機）で織りあげ，藍染めにしたものが多かった。例，ᄀウズーン　ピッᄀキカーキ　シーナーンᄀバ　ウズᄀヌ・カーᄀパギティ　クーᄀシ［ʔudzu:m　pikki-ka:ki　ʃi:na:mba　ʔudzunu-ka:　pagiti　ku:ʃi］（布団もあっちこっち穴があいてしまったので，表を剝がして補修しなさい≪つぎあてをしなさい≫）。

ウダᄀティ［ʔudati］（名）「桁」の義か。梁の上に立てて，棟木を支える短い柱。四寸角の角材で，30～40センチ程度の長さの柱につくる。「梁上柱謂二之桁一　宇太知（うだち）」（『和名抄』）。「アーパーレー」歌に，「ヤーなんつぁがにば　うだてぃしー　やーばすくり　あんてぃす」（ああ，銀の建材を桁にして，家を造ってあるという）とある。例，ムニギタバᄀシャカイブーᄀ　シャカバラーバᄀル　ウダᄀティティ　アズᄀダー［munigitaba　sị̈kaibu:　sị̈kabara:baru　ʔudatiti　ʔadzuda:］（棟桁を支えている束柱のことを，桁というのだよ）。ウダᄀティティ　アズᄀカー　ᄀメー　シャカバラーᄀヌ　ピーᄀチ　ゲᄀラ　ナー［ʔudatiti　ʔadzuka:　me:　sïkabara:nu　pi:tʃi　gera　na:］（桁といえば，いわば，束柱の一種さねえ）

Hosei University Repository

ウブ˥パク [ʔubu-pąku]（名）大きな箱。大型の箱。「大箱（おおばこ）」の義。パコー˥マ [pąko:ma]（小箱）の対。例，パコー˥ ギューチン˥ アリ˥ブタヌ ウブ˥パコー モミパク˥ フターチル アッ˥タ [pąko: gju:tʃin ʔaributanu ʔubupako: momipaku Φɥta:tʃiru ʔatta]（箱はいくつもあったが，大きな箱は，籾箱二つがあった≪籾箱が二つしかなかった≫）。

ウブピバ˥チ [ʔubupibatʃi]（名）大火針。縦約50センチ，横約70センチの箱に，中央部分に約30センチ四方の灰入れの小箱を作って据え，両側に引き出しをつけて小物が収納できるようにした火針。老人のいる，限られた家にしか利用されなかったようである。例ウブピバチ˥ヌ ˥ピー ダキ˥ ヌクミ˥ ナライティ ˥スブットゥ ˥ナリ ベ˥ー [ʔubupibatʃinu pi: daki nukumi naraiti subuttu nari be:]（大火針の火を抱いて暖をとり慣れて，働かない怠け者になってしまっている）

ウブ˥ミチ [ʔubumitʃi]（名）大きな道。大通り。村中の道。例，ヤラ˥ビ シェーン˥ケンマ ムラナカヌ˥ ウブ˥ミチナール アサブタ˥ティ ウムーン˥ドゥ マナ˥マ ギー˥ミルカー クビッチン˥ヌ ミチェー˥マ ツォー [jarabi ʃe:ŋkemma muranakanu ʔubumitʃina:ru ʔasabutati ʔumu:ndu manama gi: miruka: kubittʃinnu mitʃe:ma tso:]（子供の頃は村中の大通りで遊んだと思っているが，今 島に行ってみると，これぽっちの小路なんですよ）

ウブ˥ヤー [ʔubuja:]（名）母屋，「大きな家」の義。屋敷の中で中心となる，主要な建物。トー˥ラ [to:ra]（炊事小屋）の対。明治末期頃から瓦葺きの家が建てられるようになった。家のシンマイ [ʃimmai]（間取り）は，南側にイチバン˥ザ [ʔitʃibandza]（一番座），ニーバン˥ザ [ni:bandza]（二番座），サンバン˥ザ [sambandza]（三番座）があり，北側には，ユコー [juko:]（裏座）がある。ウラ˥ザ [ʔuradza]（裏座）ともいう。イチバンウラ˥ザ [ʔitʃibanuradza]（一番裏座），ニーバンウラ˥ザ [ni:banuradza]（二番裏座）などがある。ウラ˥ザは青年に達した息子や娘たちの寝室に当てられるのが普通であった。子供が幼小の頃は，裏座は物置きに利用するか，米倉に利用した。西側は，ナカ˥ザ [nakadza]（土間）にして，壁側に粘土でカマチ [kamatʃi]（竈）を作った。東側と南側には，˥イン [ʔiŋ]（縁側），トゥーシ [tu:ʃi]（縁）があった。

エントゥツ [ʔentutsu]（名）煙突。共通語からの借用語。鰹節工場が鳩間島に建てられるようになって，煙突が作られるようになった。戦前，鉄筋コンクリートの納屋が建てられ，コンクリート造りの煙突も建てられたが，戦災で破壊された。例，アンタヌ˥ カツシンヌ シーゾー˥ヤーナー エントツン˥ アリ˥ブタ [ʔantanu kątsuʃinnu ʃi:dzo:ja:na: ʔentotsun ʔaributa]（東の鰹船の製造屋には煙突もあっていた≪あった≫）

オー˥ヌ・ヤ [ʔo:nu-ja:]（名）①「豚の家」の義。豚舎。˥オンケー [ʔoŋke:]（豚舎）ともいい，オー˥ヌ マキ [ʔo:nu maki]（「豚の牧」の義か。豚舎）ともいう。②豚小屋のよ

Hosei University Repository

うに汚れて，掃除をしていない家に対する蔑称としても用いられる。「汚い家」の意。

石積みの豚舎は，屋敷の北西の角を利用して作るのが普通であった。石垣を，円字形に積み，二室（二牧（マキ））に二頭飼育したり，多頭飼育したりした。豚舎の中は石畳を敷き，汚水を流せるようにした。茅を投入して敷き，豚に踏せて堆肥として利用した。昔は人糞を与えていたが衛生上の問題から禁止された。豚舎には，ヤダン˥ブレ［jadambure］（ソデガイの仲間）を吊して，ヌキ˥ムヌ［nukimunu］（魔除け）とした。豚舎の神は魔除けの力が大きいと信じられていた。夜，外で魔物におそわれたりした時は豚舎に行って豚を起こすことにより，憑き物が落ちると信じられていた。

オシ˥イレ［ʔoʃiire］（名）押入れ。布団などを収納，保管しておく所。標準語からの借用語であろう。二番座のトゥクニ［tu̯kuni］（仏壇）の西側に幅半間，高さ1間を上，下二段に仕切って作った上半分の部分。下半分はトゥダ˥ナ［tudana］（戸棚）といい，酒器類を収納しておくのに用いた。例，オシ˥イレナー　˥ウズ　タク˥ミ　イリリ˥ヨー［ʔoʃiire na: ʔudzu ta̯kumi ʔiririjo:］（押入れに布団を畳んでいれなさいね）

オン˥ギ［ʔoŋgi］（名）「扇」の義。総称。あおいで涼をとる道具。クバオンギ［kuba-oŋgi］（くば扇），セン˥スル［sensuru］（せんす），ブドゥル・オンギ［buduru-oŋgi］（踊り用扇），ミルクヌ・オン˥ギ［mirukunu-oŋgi］（弥勒神の持つ扇）などがある。団扇に対してもオンギという。例，˥ドゥク　˥アツァティ　オン˥ギシ　アウ˥リティル　ヤットゥ˥シ　ニバシタ［duku ʔatsati ʔoŋgiʃi ʔauritiru jattuʃi nibaʃita］（あんまり暑いので，扇であおって，やっとのことで寝かせた）

オンギ˥ドゥル［ʔoŋgiduru］（名）「扇とり」の義か。親が子供を寝かせるために，クバ扇をあおいで風を起こしてやること。夏の暑い時期は，子供のために，母親も横になりながらパタパタ扇をあおいで，とうとう自分も寝てしまって，時たま無意識のうちに手を動かして扇を煽いで寝かせていた。そういう動作をオンギ˥ドゥル　スン［ʔoŋgiduru suŋ］（扇どりをする）といった。オンギ˥ドゥル　シー˥　ニバシタ［ʔoŋgiduru ʃi: nibaʃita］（扇どりをして寝かせた）

オンギ˥ヌ　カジ［ʔoŋginu kadʒi］（連語）「扇の風」の義。昔から扇を煽って起こす風は薬だといわれていた。子供に対しても適度に涼風を送ることができるし，病人に対しても，病状に応じて扇を煽って，涼しい風を送り看病することができたからである。例，オンギ˥ヌ　カゼー　フチ˥ル　ヤリバ˥　アツァ　˥ピンマー　オン˥ギ　ッフィーリ˥バ［ʔoŋginu kadze: Φu̯tʃiru jariba ʔatsa pimma: ʔoŋgi ffi:riba］（扇の風は薬だから暑いときは煽いでやりなさいよ）

オンケー［ʔoŋke:］（名）「豚の家」の義か。豚舎。便所のこと。˥フル［Φuru］ともいう。屋敷内では，フルの神は最も霊力が高いと信じられている。外出していて，何か「憑き物」にとりつかれた場合，帰宅して豚舎の豚を起こすと，「憑き物」は落ちるといわれて

Hosei University Repository

いる。口碑によると，フル˥ヌカン［Φurunukaŋ］（フル神）は，日頃は頭を地面につけて，尻を立てて寝ているという。豚舎の軒には，ヤダンブレ［jadambure］（さそりがい）を吊して魔除けとした。昔は便所と豚舎が一つになっていて人糞を与えていたが，戦後，衛生上の問題から禁止され，豚舎から切り離された。例，ユー˥ル　ミチ˥ナーティ　˥ムヌン　ウソーリ˥カー　ヤー˥キー　˥オンケー˥パルカー　ウティ˥ルン　˥ツォー［ju:ru mitʃina:ti munun ʔuso:rika: ja:ki: ʔoŋke: ˥paruka: ʔuti˥run tso:］（夜，道でモノ≪悪霊≫におそわれると≪とりつかれると≫，家に来て便所に入ると落ちるそうだ）。

オー˥ヌ・マキ［ʔo:nu-maki］（名）「豚の牧」の義か。豚舎のこと。オーヌ・ヤー［ʔo:nu-ja:］（豚の家）ともいう。屋敷の北西部に石垣を円字形に積み，テーブルサンゴでカタピサ˥・ヤー［kątapi̥sa-ja:］（片平屋根）をかけたり，木で屋根を作り，茅で葺いたりして豚を飼育するために作った所。普通の農家では，一戸に3～4頭の豚を飼育していた。豚舎の床は石畳みを敷き，トーニ［to:ni］（「田舟」の義か。60～70センチの長さの木材を刳りぬいて舟形に作った「飼い葉桶」）を置いて飼料を与え，飼育した。畑の帰りにイモカズラや茅を刈りてきて投入した。豚はイモガラスもよく食べるし，煮イモや生イモもよく食べる。夏はカツオの頭を煮てそのだし汁とイモを混ぜて与えた。冬場はタク˥ヌ　フル［takunu　Φuru］（蛸の墨袋）などをだし汁にして飼料を作って与えた。例，ムカ˥セーマーン˥ナーン　オー˥ヌマケー　アリ˥ブタ［mukase: ma:nna:n ʔo:nu-make: ʔaributa］（昔はどこにも≪どの家にも≫豚舎はあった）

カー［ka:］（名）井戸。「カワ」の転か。「川」は，「カーラ」といい，「井戸」と区別されている。村井戸として，シンタ・カー［ʃinta-ka:］（「後の井戸」の義，西村の井戸），ウイヌ・カー［ʔuinu-ka:］（「上の井戸」の義，中岡の北側にある井戸），アンヌ・カー［ʔannu-ka:］（「東の井戸」の義，東村の井戸），パチンガ・カー［pḁtʃiŋga-ka:］（「初井戸」）の義か。ウイヌ・カーの側にある）。サクラ˥・カー［sḁkura-ka:］（「塩辛井戸」の義か。タチバル［tatʃibaru］の海岸近くの˥ウブシケー［ʔubuʃi̥ke:］≪大城家≫の畑の側にある井戸。現在は埋まりかけている）などの井戸がある。主として，インヌ・カー，アンヌ・カー，ウイヌ・カーの水を生活用水として用いた。アンヌ・カーは，ウリ˥カー［ʔurika:］（自然の鐘乳洞が地表から約30メートル地下に，斜坑状に形成され，最庭部に湧水が溜まるのを利用した井戸）になっており，水量も多かった。ウイヌカーの水は最も甘くおいしいといわれていた。村井戸から水を汲み，タン˥グ［taŋgu］（水担桶）に入れて家へ運ぶ仕事は主として娘たちが担当した。夏の旱天が続くと，順番で水を汲み，水の湧くのを待って夜を徹することもあった。例，˥シンタ・カー˥ラ　ミジ˥　カタ˥ミクー［ʃinta-ka:re midʒi katamiku:］（後の井戸≪西村の井戸≫から水を汲んで担いできなさい）

カー˥ラ［ka:ra］（名）瓦。粘土を一定の形に成型し，焼成した屋根葺き用材。ウーガー˥ラ

Hosei University Repository

[ʔuːgaːra]（雄瓦），ミーガー˥ラ［miːgaːra］（雌瓦）の二種がある。屋根のユチル［jutʃiru］（えつり）に粘土をこねて乗せ，雌瓦を二枚ずつ重ねて並べていき，その継ぎ目に粘土を乗せて，さらにその上に雄瓦を被せ，連結して葺きあげていく。最終的には，継ぎ目に漆喰を塗って固定させ，屋根葺きを完成させる。例，˥ミツァ　クナシティ˥　ユチル˥ナ　ヌーシティ　ウン˥ナ　ミーガー˥ラ　ニンマイ˥ナー　カサビ˥　ナラビティ　ウヌ˥　シギフチ˥ナ　˥ミツァ　ムリティ　ウーガー˥ラ　カバ˥セーティ　カー˥ラヤーヤフコーッ˥タ［mitsa kunaʃi̥ti jutʃiruna nuːʃiti ʔunna miːgaːra nimmainaː kasabi narabiti ʔunu ʃigiΦu̥tʃina mitsa muriti ʔuːgaːra kabaseːti kaːrajaːja Φu̥koːtta］（粘土をこねてエツリに乗せて，それに雌瓦を二枚ずつ重ね並べてその継ぎ目に粘土を盛って被せ，瓦屋根を葺いたものだ）

カーラ˥シキ［kaːraʃi̥ki］（名）瓦しき。瓦で屋根を葺く際に，軒の先端部分に幅約５寸の鋭三角形状の板を打ちつけたもの。瓦がずり落ちないように，瓦どめの機能をもたせた板。通常は角材を対角線に製材したものを使った。フクンキー［Φu̥kuŋ-kiː］（福木）などを多く利用していた。例，タルキ˥ヌ　ウイ˥ナ　カーラ˥シキ　˥ウキティ　フン˥ウティ［tarukinu ʔuina kdːraʃi̥ki ʔuki̥ti Φun ʔuti］（垂木の上に瓦しきを置いて釘を打ちつけなさい）

カイ［kai］筒（け）。「筒ハ，盛レ食器也」（『和名抄』）とある。鳩間島では木製の衣装箱をいった。「長持」のこと。衣類や調度品などを入れるに用いる。箪笥が家庭に出まわる以前は，このカイ［kai］が嫁入り道具の一つとして重宝された。例，˥アボー　タンシ˥トゥ　カイヤー˥　マナーマー˥キン　ヤー˥ナー　˥アン［ʔaboː tanʃitu kaijaː manamaːkin jaːna ʔaŋ］（お母さんの箪笥と衣装入れの笥<カイ>は，今まである）

カイ［kai］（名）「笥」の義。衣類を入れる箱。衣類を入れておく長方形の蓋のある箱。長持ち。大正頃までの嫁入り道具の一つとされていた。例，ワッ˥テヌ　˥アボー　˥ニービキヌ　˥バス　ムティオーッ˥タ　カイヤー˥　マナー˥キ　アン˥［wattenu ʔaboː niːbikinu basu muti ʔoːtta kaijaː manaːki ʔaŋ］（あなたの家のお母さんが嫁入りのときにもってこられた笥は今まで<今も>ありますか）。

カイダン［kaidaŋ］（名）階段。借用であろう。長い段。ナカン˥ブレ・ーミチ［nakambureː-mitʃi］（中岡へ通ずる道）や，ウイヌ˥・ウガン［ʔuinu-ugaŋ］（友利御願）にはコーセー˥マ・イシ［koːseːma-iʃi］（砂岩）を削って作った階段の道がある。例，ウイヌ・ウガン˥ヌ　ペーリ˥・フチェー　カイダン˥　ナリ　ブー˥ダー［ʔuinu-ugannu peːri-Φu̥tʃeː kaidan nari buːdaː］（友利御願の入り口は階段になっているよ）

カキ［k'ą̊ki］（名）「垣（カキ）」のこと。垣根。竹やススキで作った垣根のこと。鳩間島では石を積んで作った屋敷の「石垣」を特にグス˥ク［gusu̥ku］というが，海の「魚垣」として積む石垣は，「カキ」［kąki］という。田の猪垣は，ター˥ヌ　カキ［taːnu kąki］（田の垣）

Hosei University Repository

といい，ター˥ヌ　カキ˥　フムン［ta:nu　kąki　Φumuŋ］（猪垣を編む）という。カキウク˥スン［kąki　ʔukusuŋ］（魚垣を積む）のようにいう。西表島の北岸，伊武田の海岸に積まれた魚垣は，深い所で，約80センチ程度に積まれていた。干潮時には，魚垣の一部分の石積を崩してサバニ（　˥イダフニ［ʔidaΦuni］「板舟」の義か）を出し入れしなければならなかった。舟の出し入れが済むと，石垣をもとにもどしておいた。猪垣を積むことを，シー　ウク˥スン［ʃi:　ʔukusuŋ］ともいう。猪垣を積んで囲った所を，シーヌウチ［ʃi:nu-utʃi］といい，伊武田地域をそう呼んでいる。

˥カキソージ［kąkiso:dʒi］（名）掃除。「掻き掃除」の義か。庭の塵を掻き取ったり，掃いたりしてきれいにすること。例，ヤー˥ヌ　˥カキソージン　サリティ˥　イッケナ˥　アザ˥ケーン　ダー˥［ja:nu　kąkiso:dʒi:n　sariti　ʔikkena　ʔadzake:n　da:］（家の中の掃除もなされており，大変清潔だよ）。ソージ［so:dʒi］（掃除）の強調表現。

カキ˥ナー［kąkina:］（名）「掛け縄」の義か。茅葺きの家の甍を作る際，シダル［ʃidaru］（竹簾）を被せて，その上からフー˥カラジナ［Φu:kara-dʒina］（棕櫚の繊維で綯った縄）を掛けわたして，ヨー˥［jo:tʃi］（棟に両側から差しこんだティブク≪手矛≫で，甍を固定するもの）に掛け，引き締めて甍を固定するに用いる縄。風雨に晒されても腐敗しにくい，棕櫚の繊維で綯うのが一般である。

カクガニ［kąkugani］（名）「角鉄」の義か。角鉄材のこと。鋼材の意。比喩表現の一つで，鋼材のように強い建築用材木の意。古謡「アーパーレー」の中に謡われている。「かくがにば　ぱらーばし　やーばすくりあんです（以下略）」（鋼材のように強い材木で家を作ってあるという）の意。五寸角，六寸角の角材で家を建築することができるということは最高の喜びであり，そのような角材を「カクガニ」と表現した。

˥カサ［kąsa］（名）「傘」の義か。˥ランプヌカサ［rampunu-kąsa］（ランプの傘）ともいう。ランプにつける傘状の反射板。ガラス状の厚さ約３ミリ程度の円形をしており，中心部は火屋が通過できるよう，直径約６センチほどの穴がある。ランプの　˥ヤマ［jama］（針金でできた枠）にはめる。例，˥ランプヌ　˥カサ　ウタ˥シ　バリナー˥ヌ［rampunu　kąsa　ʔutaʃi　barina:nu］（ランプの傘を落して割ってしまった）

カザリ・クビン［kadzari-kubiŋ］（名）「飾瓶」の義か。白磁製の大型燗瓶。錫製のものもある。カンニン˥ガイ［kanniŋgai］（名）「神願い」，神行事の際に用いる。紅白の紙を重ねて折り，山型の三角錐状に折って，瓶の栓とした。正月や祝儀の際にも酒を入れて床の間の神前に供えた。重箱にパナングミ［panaŋgumi］（初米）を盛ったものの左右にカザリクビンを置いて神前に供えた。紅白の紙で˥ザウ［dzau］（栓）をさして飾った。

カジバナ［kadʒibana］（名）風のよくあたる所。台風などが直に当たる所。強風が吹きつける所。普通は海岸ばたの，防風林（フクン［Φąkuŋ］（福木）やガジ˥マル［gadʒimaru］（カジマル・榕樹）がなくて，海風や台風などが直接吹きつけるような所をいう。例，˥

Hosei University Repository

クマー　カジバナ　ヤルンダ　カジボーン˥　パジ゛ダー˥ [kuma:　kadʒibana　jarunda　kadʒibo:m　padʒi　da:] (ここは風のよく当たる所だから，風が強いはずだよ)

カシンガイ [kąʃiŋgai] (名)「鎹」の義。かすがい (鎹)。「録　加須加比」(『新撰字鏡』)「拳鎹　阿介賀須加比」(『和名抄』)。木材や板などの接合部分をつなぎとめる⊏⊐型の釘。イダフニ (板舟) をパウ [pau] (接ぐ) 時に，板の接合部分に軽く打って，ずれないように固定し，タキフン (竹釘) やフンドゥを入れるために用いる工具。梁と桁の間に打つこともある。例，フー˥タイナー　カシン˥ガイ　ウティ [Φu:taina:　kaʃiŋgai　ʔuti] (梁に鎹を打ちこめ)

カタジキ˥ルン [kątadʒikiruŋ] (動) かたづける。カタジキラヌ [katadʒikiranu] (片づけない)，カタジ˥キティ [kątadʒikiti] (片づけて)，カタジキ˥プサン [kątadʒikipusaŋ] (片づけたい)，カタジキ˥ルカー [kątadʒikiruka:] (片づけたら)。例，クヌ　シグトゥ　カタジ˥キティ　マーズン˥　パラ [kunu　ʃigutu　kątadʒikiti　ma:dzum　para] (この仕事を片付けて一緒に行こう)

カチリカザ [kątʃirikadza] (名) 豚の飼料などが腐敗しかけたときに放つ臭気。鰹節工場などの鰹の煮汁が腐敗しかけたときの臭気に対してもいう。例，シーゾーヤ˥ヌ　イズネーシジルヌ˥　ッサリティ　カチリカザ　シー˥　ンカーラヌ [ʃi:dzo:janu　ʔidzu　ne:ʃidʒirunu　ssariti　kątʃirikadza　ʃi:　ʔŋka:ranu] (製造屋≪製造工場≫の魚を煮る煮汁が腐敗して，カチリカザがしてとても側に寄れない)

カツァ [katsa] (名) 蚊屋，蚊張。夏季になると蚊が発生するので，それを防ぐために寝床に吊す網状のとばり。麻糸で編んだ細目の網状のとばり。六畳用，四畳半用，八畳用の蚊屋があった。蚊屋の四隅，また六箇所に，カツァヌ˥・ミン [kątsanu-miŋ] (「蚊屋の耳」の義。蚊屋吊り) をとりつけて，それを部屋の四隅につけた吊り具にかけて吊した。ガザン˥ヌ　ブンダ˥　カツァ　ピキ [gadzannu　bunda　kątsa　pi̥ki] (蚊がいるので蚊屋を引け≪吊りなさい≫)

カツァヌ˥・ミン [kątsanu-miŋ] (名)「(蚊屋) 蚊張の耳」の義。蚊屋の四隅または六箇所につけてある吊り具。蚊屋吊りのこと。吊り手の先に金属製の輪っか (直径約5センチほどのもの) をとりつけてあった。これを部屋の四隅または六箇所から吊した，吊り糸に結んで蚊張を吊ったものである。例，ニビスクチナー˥ティ　カツァヌ˥ミン　ピキ・キシナー˥ヌ [nibisu̥kuttʃina:ti　kątsanu-mim　pi̥kikiʃi　na:nu] (寝相が悪くて蚊屋の耳を引き切ってしまった)。

カトン˥クン [kątoŋkuŋ] (動) ①傾く。②横になる。カトンカ˥ヌ [katoŋkanu] (傾かない。横にならない)，カトン˥キティ [kątoŋkiti] (傾いて，横になって)，カトンキン˥ギサン [kątoŋkiŋgisaŋ] (傾きそう，横になりそう)，カトン˥クカー [kątoŋkuka:] (傾いたら，横になったら)。例，ンメー˥マナー　カトン˥キティ　カーリ˥バ [ʔmme:mana　kątoŋkiti

Hosei University Repository

ka:riba]（少しずつ横になってから，交替しなさいよ）

カナ [kana]（名）鉋。木材の面を削って平滑にするための工具。幅約9センチ，長さ約25センチ，厚さ約4センチの˥カシンキー [kaʃiŋki:]（オキナワウラジロガシ）の台木に刃を斜めに勾配をつけて仕こんだもの。例，クヌ　キー˥ヤ　アラキジ　シー˥　シケーバ　カナ˥　シキ˥　ヨー [kunu　ki:ja　ʔarakidʒi　ʃi:　ʃi̥ke:ba　kana　ʃi̥kijo:]（この木は荒削り≪粗削り≫してあるので，鉋をつきなさい≪鉋をかけなさい≫ね）。

カナッ˥クル [kanakkuru]（名）「鉋殻」の義か。鉋をかけるときに，削り殻が紙をくるくると巻きとるように出てくるもの。よくきれる鉋で，腕のたつ職人が鉋をかけると，2メートルも，3メートルも切れずに連続して出てくるものだった。これを乾燥させると，焚きつけ用に利用され，重宝された。例，カナッ˥クル　アツァ˥ミ　˥キー　ピー　タシキ˥リ [kanakkuru　ʔatsami　ki:　pi:　taʃi̥kiri]（鉋くずを集めてきて火を焚きつけなさい）

カナックル [kanakkuru]（名）鉋屑のこと。「鉋殻」の義か。木材や板に鉋をかけるとき，紙のように薄い削り屑が出てくる。島の人々は，これを集めて焚き付けに用いた。例，ヤースクリヤー˥ヌ　˥トンラ　カナッ˥クル　イー˥リキー　ピー　タシキ˥ムー　シー˥バ [ja:sukurija:nu　tonra　kanakkuru　ʔi:riki:　pi:　taʃi̥kimu:　ʃi̥:ba]（家造り家≪建築現場，家を造っている家≫の所から鉋屑を拾ってきて焚き付けにしなさいよ）

カナダライ [kanadarai]（名）「金盥」の義。金属製の盥。戦後，ジュラルミンや亜鉛などで作られたものが出まわった。木製の盥は重く，乾燥すると水もれしたが，金属製のはそれがなく普及するのが早かった。例，カナダライヤ˥　ティダナ　プス˥タンティン　サリル　ソーヤ　ナーン˥セン [kanadaraija　tidana　pu̥sutantin　sariru　so:ja　na:nseŋ]（金盥は太陽に干しても乾燥する心配もなかった）。

カニフン [kaniΦuŋ]（名）「金釘（カネクギ）」の義。鉄製の釘。イッスン˥クギ [ʔissuŋkugi]（一寸釘），サンズン˥クキ [sandzuŋkugi]（三寸釘），ゴッスンクギ [gossuŋkugi]（五寸釘）などがある。壁板には，イッスン˥クギ（一寸釘）か，シチブ˥・クギ [ʃi̥tʃibu-kugi]（七分釘）などを使った。「釘　久岐（くぎ），鉄杙也」（『和名抄』）とある。例，カニフン˥シ　イツァ˥クビ　˥ウティ　[kaniΦunʃi　ʔitsakubi　ʔuti]（鉄釘で板壁をうちなさい）

カビ˥・ウズ [kabiudzu]（名）「被り布団」の義。掛け布団のこと。kaburi→kabiuudzu のように音韻変化して形成された語。鳩間方言では，布団は，˥カブン [kabuŋ]（被る）という。子供らは，布団を頭から被って寝たので，冬期には唇がカラバル [karabaru]（あかぎれ状に唇が切れること）する子が多かった。例，オシ˥イレラー　カビ˥ウズ　ウラ˥シ [ʔoʃiirera:　kabiudzu　ʔuraʃi]（押し入れから掛け布団を降しなさい）

カビオンギ [kabioŋgi]（名）「紙扇」の義。団扇のこと。幅約2センチ，長さ約30センチの竹を，柄の部分に10センチほど残し，他を細く割って骨とし，それに紙を張って円形の団

Hosei University Repository

扇にしたもの。沖縄や石垣あたりから輸入してきたもので，豊年祭などのお祭りのときに使っていた。紙製のため，長もちしなかった。例，カビオンゲー　カイ˥ヤー　アル˥ヌ　ナガムテー　サヌ［kabioŋge:　kaija:　ʔarunu　nagamute:　sanu］（紙扇はきれいではあるが長もちはしない）

カマイ˥・ヌ・カキ［kamai-nu-kąki］（連語）。「猪の垣」の義。猪害を防ぐために作った垣。直径3センチ～4センチの若木や木の枝で，高さ約6尺の垣を編み田を囲ってあるもの。約3センチ間隔に若木や枝木を土に刺し込んで，上，中，下段に横木をわたして，それにクー˥ジ［ku:dʒi］（とうずるもどき）で強く結び，編みわたしたもの。例，カマイ˥ヌ　カキ˥　フミ　スーラ˥スン［kamainu　kąki　Φumi　su:rasuŋ］（猪垣を編んで強化する）

カマチフチ［kamatʃiΦu̯tʃi］（名）「竈口」の義か。台所のこと。シム［ʃimu］（下）ともいう。カマチフチ・マール［kamatʃiΦu̯tʃi-ma:ru］（台所まわりをすること，台所漁りをすること）は，男の場合，恥かしいこととされていた。マーキ［ma:ki］（薪，木を割って乾燥させた薪）のない時は，ススキの枯れたのを燃料としたので，竈の前は枯れ葉が散乱して火事になりやすいとして特に気を配った。

カムイ［kamui］（名）鴨居。障子や襖，戸などをたてるために，上部にかけわたす溝のある横木。普通二条の溝を掘って用いる。「鴨柄　功程式云鴨柄賀毛江　今案本文未詳」（『倭名類聚鈔』）とある。雨戸の場合にも，上部の溝付きの横木をカムイという。例，カムイヌ˥ミー　プリヨー˥ヌ　ダーッ˥サ　ナー˥ヌ［kamuinu　mi:　purijo:nu　da:ssa:　na:nu］（鴨居の溝の掘り方が，あまりよくない）

ガヤー［gaja:］（名）茅。˥ガー［ga:］ともいう。マーガヤ［ma:gaja］（「真茅」の義か。鍋蓋などを編むのに用いる長い茅。約150センチほどの長さがある）。ガヤー˥・ヌー［gaja:-nu］（茅の生えた原野），ガヤー˥・スリ［gaja:-suri］（茅刈り）。例，˥ガヤー　˥スリキー　˥ヤー　フキ˥　ヨー［gaja:　suri　ki:　ja:　Φu̯ki　jo:］（茅を刈りてきて，屋根を葺きなさいね）

ガヤー˥クビ［gaja:-kubi］（名）「茅壁」の義。茅で葺いた壁のこと。現在は，小屋などの壁を葺く際に用いるが，昔は母屋の壁も茅で葺いた家が多かったという。「新室の壁草刈りにいまし給はね」（『万葉』-2351）はそれを忍ばせる。壁にする部分に桟を入れ，柱と柱を連結して，ユチル［jutʃiru］（えつり）を編む。その上に，下から順に茅を並べてティブ˥ク［tibuku］（木矛）で押さえ，締め縄で締めて上へと葺きあげていく。

ガヤー˥・ヌー［gaja:-nu:］（名）「茅野」の義。ガー˥・ヌ［ga:nu:］ともいう。原野一般をさす。畑が放置されて茅が生えるような状態に荒れている様にもいう。例，ウシクラシムノー˥　パタキ˥ヌ　˥ッサーンツァン　ソーラムティ˥　ガヤー˥・ヌー　˥ナシ　˥シケー［ʔuʃikuraʃimuno:　pątakinu　ssa:ntsan　so:ramuti　gaja:nu:　naʃi　ʃi̯ke:］（怠け者めが，畑の草も取らずに≪除草もせずに≫，茅野にしてあるよ≪畑を荒れさせて放置してあ

Hosei University Repository

る≫)

ガル [garu] (名) あかり (明) の義。灯。灯火。トゥールヿヌ　ガル [tu:runu garu] (ランプの明り)。例, パトゥヿマナ　デンキヿヌ　シカリヿター　パトゥマヌヿ　ヤーヿヌ　ガロー　ウイバローヿラーン　フノーヿララーン　ミラリヿス　ダーヿ [pątumana daŋkinu ʃi̥karita: pątumanu ja:nu garo: ʔuibaro:ra:n Φuno:rara:m mirarisu da:] (鳩間に電気がついたので, 鳩間の家の明りは上原村からも, 船浦部落からも見られるよ)

カンダンヿ・イシ [kandan-iʃi] (名) 家の軒下の部分を庭先の地面より約1尺ほど盛土して上げ, 山石などを削って縁どり用に並べてある石。例, ヤドゥヿフチェーラ　クルビヿ　ウティティ　カンダンヿイシナー　スブヿル　バリヿ　シケー　ツォー [jadu Φu̥tʃe:ra kurubi ʔutiti kandnʔiʃina: suburu bari ʃi̥ke:] (戸口より転んで落ちて, かんだん石に頭を打って怪我してある)

カンヿビン [kambiŋ] (名)「燗瓶」の義か。神事の際に酒を入れて供えるのに用いる。細長くて口のせまい, 酒を入れるための陶製の容器。例, カンヿビン　フタックヿナー　サキサイティヿ　ッスヿカビシ　ヿザウ　スクヿリティ　ヿッシ　ヿシケーモー　ウヤプスヿヌ　ヿマイ　シ　キ　ヿ　バ [kambin Φu̥takkuna: sąki saiti ssukabiʃi dzau su̥kuriti ʃʃi ʃi̥ke:mo: ʔujapusunu mai ʃi̥kiba] (燗瓶二個に酒を注いで, 白紙で栓を作ってさしてあるものは先祖の前に供えなさい)

キー・アイヿク [ki:aiku] (名)「木枡」の義。木製の枡。水桶で水を運び際に, この木製の枡を用いた。天秤棒。両端に荷をかけて担ぐ木製の天秤棒。ヿカシンキー (オキナワウラジロガシ) や, シターヿマキー (エゴノキ) 等の若木を利用して枡を作った。例, キーアイヿクシ　ミジタングヿ　カタヿミ　ミジ　フミクー [ki:aikuʃi midʒitaŋgu kątami midʒi Φumiku:] 木枡で水桶をかついで, 水を汲んできなさい)

キーッヿカラ [ki:kkara] (名) 木屑。材木をはつったときに出る削り殻のこと。「木殻」の義か。木材をはつって角材に仕上げていく際に, 削り屑として出てくる木屑。木っ端。木片。例, ヿキー　キジオーヿル　ヿトンナー　キッカラーマヿヌ　イッパヿイ　ヿアリ　ベーヿティ　プ　サ　イ　ヿ　クー [ki: kidʒio:ru tonna: kikkara:manu ʔippai ʔari be:ti pu̥saiku:] (木を削っておられるところには木っ端がたくさんあるので拾ってきなさい)

キーバキ・ヌキヿル [ki:baki-nukiru] (名) 木材を切る鋸。これで薪などを切った。山鋸では薪炭用の木を切ることは許さなかった。家庭で薪炭用の木を切るに用いる鋸は, 山鋸を廃棄したものである場合が多かった。例, キーバキ・ヌキヿルセー　ヤマヿワザー　シララヌ [ki:baki-nukiruse: jamawadza: ʃiraranu] (材木用の鋸では, 山仕事はできない)

キーヿパク [ki:-pąku] (名) 木箱。杉で作った箱。ヿガンガンパク [gaŋgampąku] (鉄板で作った箱) やカニパク [kanipaku] (鉄箱) の対となるもの。例, ヿガンガンパコー　サビフイヿスバ　キーヿパクナ　イリリヿヨー [gaŋgam-pąko: sabiΦuisuba ki:pąkunaʔiririjo:]

Hosei University Repository

（鉄板製の箱は錆びるから，木製の箱に入れなさいね）。サー˥ヤ　キー˥パクナ　イリリ˥［saːja　kiːpa̧kuna　ʔiriri］（茶は木箱に入れなさい）

キー˥フタ［kiːΦu̧ta］（名）木製の蓋。普通は松や杉の五分板を利用して作った。汁物を煮る鍋の蓋はキー˥フタ（木蓋）が一般的に用いられた。イモを煮るシンマイ˥ナビ［ʃimmainabi］（四枚鍋，大鍋）の蓋は，茅を乾燥させて編んだ円錐状の蓋を用いた。鍋蓋といえば一般的にそれをさし，木製の蓋をキー˥フタと特称した。例，スーナビ˥ヌ　キー˥フタシ　フタ　フイ˥バ［suːnabinu　kiːΦu̧taʃi　Φu̧ta　Φuiba］（汁鍋の木蓋で蓋をしめなさいよ）

キー˥・フン［kiː-Φuŋ］（名）「木釘」の義。「栓　岐久岐（キクギ）　木釘也」（『和名抄』）とある。柱や桁材に直径約２センチほどの穴をあけて，それにカシンキー［kaʃiŋkiː］（オキナワウラジロガシ）で作った棒状の木釘を打ちこんでジョイント部分を強化するもの。大形ドリルで予め穴をあけ，それに木釘を打ち込む。

キー˥ボーン［kiːboːŋ］（形）煙たい。キーボーナー˥ヌ［kiːboːnaːnu］（煙たくない），キー˥ボーナルン［kiːboːnaruŋ］（煙たくなる），キー˥ボーカー［kiːboːkaː］（煙たかったら）。例，˥アイ　スン˥ケン　キー˥ボーカー　ワー˥　カマチフチェー　クーン˥ブリバ［ʔai　suŋkeŋ　kiːboːkaː　waː　kamatʃiΦu̧tʃeː　kuːna］（あれほど煙たいのなら，君は　竈ぐち≪へっついのまわりに≫へは来ないでおりなさいよ≪来るなよ≫）。

キーマッ˥ファ［kiː-maffa］（名）「木枕」の義。芳香のある木を利用して枕に作ったもの。台湾産の樟（楠の木）は，樟脳の芳香が頭痛やのぼせ（逆せ）の持病に効くといって枕の材料に重用された。例，キーマッ˥ファ　サン˥カー　ヌビ˥カジ　コー˥リティ　˥バーニバラヌ˥［kiːmaffa　saŋkaː　nubikadʒi　koːriti　baː　nibaranu］（木枕をして寝ないと，首筋が凝って，私は寝ることができない）。「しきたへの吾が木枕」（『万』-2630）

キールン［kiːruŋ］（動，自）消える。火が消える。キーラヌ［kiːranu］（消えない），キーティ［kiːti］（消えて），キール˥カー［kiːrukaː］（消えたら），キーン˥ギサン［kiːŋgisaŋ］（消えそう）。例，ピー˥ヌ　キールン［piːnu　kiːruŋ］（火が消える），ギューサ　ミジ˥カキ　ケーシタンティン　キーラン˥　ツォー［gjuːsa　midʒi　ka̧ki　keːʃitantiŋ　kiːran　tsoː］（いくら水をかけて消しても消えないそうだ）

˥キタ［ki̧ta］（名）桁。桁材。梁。屋根を支えるために柱の上に横にわたす材木の総称。ンニギタ［ʔnnigita］（「棟木桁」の義か）は「棟木」のこと。例，カー˥ラヤーヌ　˥キター˥イゾイキー　シゥカーン˥カー　ムタ˥ヌ［kaːrajaːnu　ki̧taː　ʔidzoikiː　si̧kaːŋkaː　mutanu］（瓦家の桁材は，イゾイ≪モクコク≫の木を使用しないと，もたない≪瓦の重さに耐え難い≫）

˥キチ［ki̧tʃi］（名）垂木のこと。棟から軒へかけわたした材木。よく利用される樹種に，シター˥マ［ʃi̧taːma］（エゴノキ）がある。˥キチ［ki̧tʃi］は，普通12～13センチ角のものを

Hosei University Repository

いい，タル˥キ［táruki］は，直径８～９センチの丸太である。例，ヤー˥ヌ　˥キチ　キシ˥プス　タナマ˥リ　フィーララヌ［ja:nu kᵢtʃi kᵢʃi-pᵤsu tanamari ffi:raranu］（家のキチ材を伐る人として頼まれてくれないか）

-キブル［-kiburu］（助数詞）「けぶり」の義。軒。戸数を数えるときの単位。プスキブ˥ル［pᵤsukiburu］（一軒），フタキブル［Φᵤtakiburu］（二軒），ミーキブル［mi:kiburu］（三軒），ユーキブル［ju:kiburu］（四軒），イチキ˥ブル［ʔitʃikiburu］（五軒），ムーキブル［mu:kiburu］（六軒），ナナキブ˥ル［nanakiburu］（七軒），ヤーキブル［ja:kiburu］（八軒），クヌキブル［kunukiburu］（九軒），トゥーキブル［tu:kiburu］（十軒）

キボーシ［kibo:ʃi］（名）煙。「烟　介布利（けぶり）」（『最勝王経音義』）。キボーシ˥　フチ˥マルン［ki:bo:ʃi　Φᵤtʃimaruŋ］（煙がくすぶる）。タム˥ノー　アミ˥ヌ　フー˥ター　シミッケー˥リティ　ムイラヌ˥　キボーシ˥　フチ˥マリティ　キーボー˥ヌ　ナラ˥ヌ［tamuno: ʔaminu Φu:ta ʃimikke:riti muiranu kibo:ʃi Φᵤtʃimariti ki:bo:nu naranu］（薪は雨が降ったので湿って燃えない。煙がくすぶって煙たくてしかたがない）

キンプシ˥・サウ［kimpᵤʃi-sau］（名）「着物干し竿」の義。物干竿のこと。竹竿や木の竿があった。庭に二本の股木を立て，それらに竹竿や木の竿をわたして，洗濯物を干すのに用いるもの。例，キン˥マー　アライ˥　ブナシティティ˥　キンプ・シ˥サウナー　ヌキティ˥　プシバ　ヨー˥［kimma: ʔarai bunaʃititi kimpᵤʃi-sauna: nukiti pᵤʃiba jo:］（着物は洗って，ゆすいで物干竿に貫き通して干しなさいねえ）

キンプシ˥・トン［kimpᵤʃi-toŋ］（名）「着物干し所」の義。洗濯物干し場。普通はナカグス˥ク［nakagusᵤku］（目かくし。ひんぷん）の内側や，トー˥ラ［to:ra］（炊事小屋）の南側あたりに干し場を作った。着物干竿にかけて干したが，昔は洗濯物をグス˥ク［gusᵤku］（石垣）やナカグス˥クなとにもかけて干していた。例，キンプシ˥・トンマー˥マナー　アル˥ワ［kimpᵤʃitomma: mana: ʔaruwa］（洗濯物干場はどこにありますか）

クー˥スン［ku:suŋ］（動）こわす。クーサ˥ヌ［ku:sanu］（こわさない），クー˥シティ［ku:ʃᵢti］（こわして），クーシン˥ギサン［ku:ʃiŋgisaŋ］（こわしそうだ），クー˥スカー［ku:sᵤka:］（こわしたら）。例，˥ヤー　クー˥シティ　ミーヤー˥　スク˥ロール　ツォー［ja: ku:ʃiti mi:ja: sᵤkuro:ru tso:］（家をこわして新しい家を作られるそうです）

˥クー　スン［ku: suŋ］（動句）つくろう。つぎをあてる。衣類の乏しかった頃，服の尻や，膝，肘のあたりに穴があくと，布地をあてて，継ぎあてをした。つくろうこと。例，キン˥ヌ　˥クー　スン˥［kinnu ku:suŋ］（服の継ぎを当てる）。ナビ˥ヌ　˥クー　スン［nabinu ku: suŋ］（鍋の底に穴があいたのを鉄板を切って継ぎを当て，バーナーで焼いて接着する）

˥クール［ku:ru］（名）「庫裡」の義か。籾俵などを積んで保管しておく所。裏座や，トー˥ラ［to:ra］（炊事小屋）の一角に保管場所を作って積んでおくのが一般であった。老年層

Hosei University Repository

（80歳以上）の人の使用する語で若年層では死語となっている語である。例，ベーヿヌヿクーロー　ウブヤーヿヌ　サンヿヌパー　ヿシヌナー　アッヿタ［beːnu kuːroː ʔubujaːnu sannu-paː ʃinuna ʔatta］（我が家の倉裡は母屋の申の方の角にあった）

グスヿク［gusɥku］（名）石垣。石を積み上げて屋敷を囲ってあるもの。屋敷の前方の，マイグスヿク［maigusɥku］（前方の石垣）は二重に積み，ナカフクヿル［nakaΦɥkuru］（「中袋」の義か。中間部）にバタヿイシ［bataiʃi］（腹石）と呼ばれる小石を詰めて崩れないように積みあげてあったが，後方，及び両側の石垣には，バタヿイシは詰めないで二重積みにしたものが多かった。例，マイグスヿクナーヤ　バタヿイシ　ヿシミティ　シムンダ　ガンヿゾータン　ヤシーヤシ　クーリヿル　ヿクトゥーン　ナーンヿシェン［maigusɥkunaːja bataiʃi ʃimiti ʃimunda gandzoːtaŋ jaʃiː-jaʃi kuːriru kɥtuːn naːnʃeŋ］（前石垣には，腹石などを詰めて積むから頑丈で強かった。やすやすと崩れることもなかった）

グトゥヿク［gutuku］（名）「五徳」の義。ヿシチリン［ʃitʃiriŋ］（七輪）やウブピバヿチ［ʔubupibatʃi］（大火鉢）の中に脚の附いた輪型を据えて，ヿヤコン［jakoŋ］（薬罐）や鉄瓶などをかけて湯を沸かしたりするのに用いる道具。例，ピバヿチナ　グトゥヿク　ビシティ　ヿヤコン　ヿカキ　シキヿルカー　ナンククヿル　ヿユー　フクン［pibatʃina gutuku biʃiti jakoŋ kaki ʃikiruka: naŋkukuru juː Φɥkuŋ］（火鉢に五徳を据えて薬罐をかけておくと自然に≪ひとりでに≫湯は沸く）

クバオンギ［kubaoŋgi］（名）「クバ扇」の義。ビロウの葉で作った団扇。クバ［kuba］（ビロウ）の葉を切って陰干しにし，押し板で押して広げ，半円型に成形して仕あげたもの。軽くて，よく風を送るので最高の団扇である。長もちするし，背中や腹部をこれで軽く撫でながら扇いでやると気持ちがよい。夏の夜，縁側で子供を寝かせながら，サーッ，サーッと扇いでくれる母親の側で，子供は平和な，幸福な眠りにつくのが常であった。

クビ［kubi］（名）「壁」の義。イツァヿクビ［ʔitsakubi］（板壁），ガヤーヿクビ［gajaːkubi］（茅壁）などがある。板壁に用いるサンブヿイツァ［sambuitsa］（三分板）は本土産の杉板を購入していたが，それ以前は，フクイキー［Φɥkui-kiː］（ウラジロエノキ）などのような軟い材質の木を製材して用いた。小屋などは茅で壁を葺き，竹やススキで「あじろ」に編んで仕上げた。あじろに編んだ壁を，ティブクで押さえ，締め縄でしっかりと締めて固定した。

ケースン［kuːsuŋ］（動）消す。火を消す。字を消す。ケーサヌ［kuːsanu］（消さない）ケーシティ［keːʃiti］（消して），ケーシヿプサン［keːʃipusaŋ］（消したい），ケースヿカー［keːsukaː］（消すなら）。ケッツァースン［kettsaːsuŋ］（ゴシャゴシャと消す）。例，ウキローヿ　カマチェーラヿ　カキンザヿシティ　ミジヿ　ウティティ　ケーシヿヨー［ʔukiroː kamatʃeːra kɥkindzaʃɥti midʒi ʔutiti keːʃijoː］（燠は竈から掻き出して，水をうって消しなさいねえ）

Hosei University Repository

コーリ [ko:ri]（名）「行季」の義。竹や柳を編んで箱形を造り，蓋付の荷物入れとしたもの。日清戦争や日露戦争で兵役について帰ってきた人が内地よりもたらしたのが始まりだといわれている。その時，兵役から帰った人が半年や１年で鳩間方言を忘れたと言って，標準語で島人に語ったという笑い話が伝わっている。ヤナギゴー˥リ [janagigo:ri]（柳行季）ともいう。内地旅行や台湾旅行の際に荷物を入れるのに利用したという。

˥ゴザ [godza]（名）莫蓙。藺草の茎で編んだ筵。輸入品の高級な筵をゴザといった。普通は畳の上に，直接に座って，寝る時にゴザを敷いて寝た。起床すると筵をとり，箒で座敷を掃くのが生活習慣であった。ハナ˥ゴザ [hana-godza]（「花莫蓙」の義か。花模様のついた上質の莫蓙）は来客用に用いた。例，トゥーシ˥ナ　˥ゴザ　シキティ˥　ニビ˥バ [tu:ʃina　godza　ʃi̥kiti　nibiba]（縁側に莫蓙を敷いて寝なさい）

ゴッスンクギ [gossuŋ-kugi]（名）「五寸釘」の義。屋根のタル˥キ [taruki]（垂木」を桁材に打ちつける際に用いる大きな釘のこと。五寸釘で打ちつけることは，頑強に固定することを意味する。例，ヤー˥ヌ　ヤドゥパシ˥ロー　ゴッスンクギ˥シ　˥ウティシケーバ　タイフー˥ヌ　クー˥タンティン　ソーヤ　ナー˥ヌ [ja:nu　jadupą̥ʃiro:　gossuŋkugiʃi　ʔutiʃi̥ke:ba　tai Φu:nu　ku:tantin　so:ja　na:nu]（家の戸は五寸釘で打ちつけてあるので台風が来ても心配はない）

コーブ˥ク [ko:buku]（名）香箱。カン˥プス [kampu̥su]（「神人」の義，サカサ，ティジリビをさす）が˥ウガン [ʔugaŋ]（「お願」の義，お嶽のこと）へ持参する線香類を入れる木製の小箱。幅約10センチ，長さ約30センチ，深さ約10センチの，蓋付きの箱。例，カン˥プスンケーヤ　ナーメーメーヌ　コーブ˥クナ　˥ウガンラヌ　˥ウサンダイ　イリ˥　ムトーッ˥タン [kampu̥suŋke:ja　na:me:me:nu　ko:bukuna　ʔuganranu　ʔusandai　ʔiri　muto:ttaŋ]（神人たちは各自の香箱に，お嶽での供物を入れて持ち帰られた）。

ザートゥク [dza:tu̥ku]（名）床の間，家の中で一番の上座である，イチバンザ（一番座）に設けられるのが一般である。幅約一間，奥行き約２尺５寸。そこに家主のコン˥ジン [kondʒiŋ]（「根神」の義か。戸主の信仰する神）を祭るコー˥ロ [ko:ro]（香炉）や，妻や姉妹たちのコーロも設けておいた。姉妹たちが嫁入りする際は，ここのコーロを廃して，嫁入り先の家や分家した家の床の間にコーロを設けてコンジンを拝んだ。コン˥ジン　タティ˥ルン [kondʒin　tḁtiruŋ]（根神をたてる）とか，コン˥ジン　トースン（ピクン）[kondʒin　to:suŋ（pi̥kuŋ）]（神神を倒す≪引く≫）といって，分家の床の間に香炉を設けたり，里の家や本家の床の間から本人たちの香炉を取り下げたりした。それにも一定の儀式を伴なっていた。

床の間には，「福禄寿」の掛け軸や，松竹梅に鶴亀と白髪の老夫婦の絵と描いた掛け軸をかけて長寿を祈願する習慣があった。また，虎の絵の掛け軸も珍重された。島では専門の絵師がいないので，絵心のある若者が古い掛軸を模写して親戚や友人に与えていた。コー

Hosei University Repository

ブ˥ク［ko:buku］（香箱）なども床の間に置かれていた。四角の花活には，トゥラヌ・ズー［turanu-dzu:］（虎の尾，チャセンシダ科の常緑シダ）を好んで活けた。例，ザートゥク˥ヌ　˥パナ　イキ˥リ［dza:tukunu　pana　ʔikiri］（床の間の花を活けなさい）

サーラ［sa:ra］（名）藺草の一種。シチトウイ。西表島の水田地帯や湿地帯に植えていた。地上約１～1.5メートルぐらいに伸びる。これを刈りて乾燥させ，アダナ˥シ［ʔadanaʃi］（あだんの気根の繊維）で綯った縄で筵に編んだ。例，サーラ˥　スリティ　カン˥ソーシティ　˥ムス　フモーッ˥タ［sa:ra　suriti　kanso:　ʃi̥ti　musu　Φumo:tta］（サーラを刈りて，乾燥して　筵を編んだ）

サイクヌキ˥ル［saikunukiru］（名）大工用の鋸，細工用の鋸の総称。一般的に鋸の歯が小さく，板やサンガマチ［saŋgamatʃi］（戸や障子の骨）などをひき切るのに用いる。両方に歯のついたものと，片方にのみ歯のついたものがある。例，サイクヌキ˥ルシ　タム˥ヌンドーレー　キス˥ナ［saikunukiruʃi　tamunundo:re:　ki̥suna］（大工用の鋸で薪なんぞを切るな）

サカシキ［sąkaʃi̥ki］（名）「酒盃」の義か。杯，盃のこと。ちょこ（猪口）。酒類を注ぎ入れて飲むのに用いる陶製の容器。神事の際の酒を供える時にも用いるし，酒の座でも用いた。例，サカシキ˥ナー　サキ　サイティ˥　オッティ˥　カミティ　オーシ˥バ［sąkaʃikina:　sąki　saiti　ʔotti　kamiti　ʔo:ʃiba］（杯に酒を注いで，頭の上に捧げて，お返ししなさい≪返杯しなさい≫）

サキ・クビン［sąki-kubiŋ］（名）酒瓶。酒を入れる容器。瓶。普通はガラス製の容器が用いられた。ニンゴー˥・ビン［niŋgo:-biŋ］（二合瓶），サンゴー˥・ビン［saŋgo:-biŋ］（三合瓶），グンゴー˥・ビン［guŋgo:-biŋ］（五合瓶），イッス˥・ビン［ʔissu-biŋ］（一升瓶）などがある。例，カイ˥リティ　サキクビン˥　ウタ˥シ　バリナー˥ヌ［kairiti　sąkikubin　ʔutaʃi　barina:nu］（つまずいて酒瓶を落して割ってしまった）

サキスッカー［sąkisukka:］（名）「酒急須」の義。酒を入れるための急須。土瓶状の，小型の急須。陶製のものが多い。例，イッス˥クビンラ　サキスッカー˥ナ　サキ　サイ˥　ウツァ˥シ［ʔissu-kubinra　sąkisukka:na　sąki　sai　ʔutsaʃi］（一升瓶から　酒急須に　酒を注いで移しなさい）。サキスッカー˥マ［sąki-sukka:ma］は，小型の酒急須のこと。

サクラ˥・カー［sąkura-ka:］（名）「塩辛井戸」の義。例，タチバル˥ヌ　˥ウブシケヌ　パタキ˥ヌ　˥アザナー　サクラ˥カー　アルダー˥［tątʃibarunu　ʔubuʃi̥kenu　pątakinu　ʔadzana:　sąkuraka:　ʔaruda:］（立原の大城家の畑の畔に　サクラカーはあるんだよ）

˥サジ［sadʒi］（名），てぬぐい（手拭）。日本タオルや西洋タオルも同様にいう。女性はサジを広げて「姉さん被り」にし，その上に˥シケー［ʃi̥ke:］（頭上運搬用のクッション）を置いて，イモの入った笊を頭に乗せたり，米俵を乗せたりして運んだ。男は頭に巻いたり，腰帯にぬきさしたりして用いた。例，˥サジ　スブ˥リティ　˥ドゥー　ツスリ˥バ

Hosei University Repository

[sadʒi suburiti du: ssuriba]（手拭を絞って体を拭きなさいよ）

ザシ˥キ [dzaʃi̥ki]（名）「座敷」の義。部屋のこと。上座の部屋。一番座，二番座のように来客をもてなす所，部屋。例，˥シザ・ウヤンケーヤ　ウイヌ　ザシ˥ケー　シカシ　オーラ˥シ [ʃidza-ujaŋke:ja ʔuinu dzaʃi̥ke: si̥kaʃi ʔu:raʃi]（長老の方々は，上の座敷へ御案内しなさい）

サシムヌヤー [sḁʃimunu-ja:]（名）「指物屋」の義か。指物細工のこと。鳩間島にはいなかった。大工の心得のある者が必要に応じて作っていた。本格的なものは，石垣島から購入してきた。石垣島には，サシ˥ムヌヤー（指物屋），ギリギリ˥ヤー [girigiri-ja:]（木を刳って椀や皿などを作る家）があった。例，サシ˥ムヌ・ヤーナ　ジブク˥トゥ　ジン˥アチ˥ライシケー [saʃimunuja:na: dʒibukutu dʒin ʔatʃiraiʃi̥ke:]（指物屋に重箱とお膳を誂えておいてある）

˥サッフン [saΦΦuŋ]（名）「シャボン」の転訛したもの。石鹸のこと。外来語。石鹸のなかった昔は，ウンヌ˥・カザ [ʔunnu-kadza]（イモかずら。葛）などを揉んで，その青汁で頭髪を洗ったり，アガミツァ˥ [ʔagamitsa]（「赤にた」の義か。赤土のこと）で女性は長い頭髪を洗ったりしていた。80歳以上の人しか使用しないことばで，若い人たちは，その語を知らない。ほとんどの人は，˥セッケン [sekkeŋ]（石鹸）しか知らない。若年層では死語化しつつある。例，ムカ˥シ・プソー　˥セッケンバ　˥サッフンティ　アゾーッ˥タ・ヨー [mukaʃi̥-pu̥so: sekkemba saΦΦunti ʔadzo:tta-jo:]（昔の人は石鹸をばサッフンと言われたよ）。

˥ザラ [dzara]（名）砂利。枝珊瑚が死んで，その死骸が砂利状になったものにもいう。鳩間島と西表上原の中間の海中に枝珊瑚の砂利が集積して出来た砂利の島がある。終戦直後までは周囲200メートル程の島状をなしていた。これを鳩間では，ユニ [juni]（「寄丹」，「寄土」の義か）という。例，˥ザラ　アツァ˥ミ　ヌーシ˥クー [dzara ʔatsami nu:ʃiku:]（砂利を集めて，積んでもってきなさい）

サンゴー˥・ビン [saŋgo:-biŋ]（名）三合瓶。サンゴー˥・クビン [saŋgo:kubiŋ]（三合瓶）ともいう。ヨイヌ˥・ムヌ [joinu-munu]（祝儀の贈り物，供え物）や，ソッコー˥・ムヌ [sokko:munu]（「焼香物」の義か。法事などの際に親戚筋には，˥グシ・パナ [guʃi-pana]≪酒と初米（パナングミ）とカウ [kau]≪線香≫を贈るもの）を供えるが，その際，酒をサンゴー˥クビン [saŋgo:-kubiŋ]（三合瓶）に入れて供える風習がある。また，ユミ˥　クイン˥パル [jumi kuim paru]（嫁を乞いに行く）際，サキムイ [sḁkimui]（「酒盛」の義か。結納の前段階の儀式に相当するもの）と称して，男の側から二，三人でサンゴービンに酒を持参して相手側の家に行き，嫁とりの話を内々にまとめたりした。サンゴー˥ビンを持っていくというと，その目的が何であるか，察知できたものである。

˥サンジャクマドゥ [sandʒaku-madu]（名）「三尺窓」の義。タカ˥マドゥ [tḁkamadu]（高

Hosei University Repository

窓）ともいう。この種の窓は，鰹工場が建てられるようになって，ナヤ［naja］（納屋）などにつけられたことから始まったようである。例，˥サンジャク・マドー　カツシンヌ˥ナヤ˥ナール　アッ˥タ　ナー［sandʒaku-mado:　kạtsuʃinnu　najana:ru　ʔatta　na:］（三尺窓は，鰹漁船の納屋に（ぞ）あったなあ）

サンバン˥ザ［sambandza］（名）「三番座」の義。ナカ˥ザ［nakadza］（台所の土間）に面した座敷で，日常生活では，ここで食事をとる。親戚や隣人たちは，ここに上がりこんで雑談する。この部屋の北側の隅にはミー˥スカミ［mi:sukami］（味噌瓶）やマー˥スカミ［ma:sukami］（塩瓶），˥ミンスブ［minsubu］（「耳壺」の義か。調味料入れの壺）などが置かれていた。

シー˥シ［ʃi:ʃi］（名）煤。煙が塵や埃といっしょになって固まったもの。天井裏や床下などに入ると頭や体いっぱいにシー˥シがくっついた。例，ティン˥ゾー　ヌーリ　ソー˥ジシタ˥クトー　ガマ˥ジナー　イッ˥パイ　シー˥シ　˥カビ　ベ˥ー［tindzo:　nu:ri　so:dʒi　ʃi̥takuto:　gamadʒina:　ʔippai　ʃi:ʃi　kabi　be:］（天井に登って掃除したところ，髪にいっぱい煤をかぶっている）

シゥカイ・キー［sï̥kai-ki:］（名）支え柱のこと。支柱。夏の台風シーズンになると，しばしば大型台風に襲われるので，母屋をはじめ炊事小屋などの四隅に，シゥカイ［sï̥kai］（支え，支柱）を入れる。これに用いる材木をシゥカイキーという。シゥカウン［sï̥kauŋ］（支える）は動詞。例，ウブヤー˥ヌ　ユーシヌ˥ナー　シゥカイキー˥　イリリ˥［ʔubuja:nu　ju:ʃinuna:　sï̥kaiki:　ʔiriri］（母屋の四隅に支柱を入れなさい）

シゥカ˥バラー［sï̥kabara:］（名）「束柱」の義か。桁材の上に立てる短い垂直の柱。これで屋根の勾配を作る。桁材の上に，30～40センチの長さの4寸角の角材を用いることが多い。ウダ˥ティ［ʔudati］に似た柱である。例，ザイギ˥ヌ　パシパセー˥　シティラン　ドー˥シ　シゥカ˥バラー　スク˥リ［dzaiginu　paʃipase:　ʃi̥tiran　do:ʃi　sïkabara:　sụkuri］（材木の切れっぱしは捨てないで，束柱を作りなさい）

シキー［ʃi̥ki:］（名）敷居。閾。引き戸や障子，襖などをたてるために，その下に溝の掘った横木をわたして，すべらせて開閉できるようにしたもの。「閾，門限也，閾，一名閫，之岐美（しきみ），俗云二度之岐美一」（『和名抄』）とある。例，アマ˥ヌ　ヤドゥ˥フジ　シー˥ナーシキーン˥　キジ　ファーリ　ナー˥ヌ［ʔamanu　jadu Φ udʒi　ʃi:na:　ʃi̥ki:ŋ　kidʒiffa:ri　na:nu］（あんまり戸を開けしめするので，敷居がすれてしまった）

シキウズ［ʃi̥kiudzu］（名）敷き布団。「敷きうず」の義。鳩間島では特定の家以外では敷き布団はなかった。冬期においてもそれを必要とするほどの寒さはなかったし，それを作る余裕もなかった。例，バトゥ˥マ・プソー　シキウズ˥ティ　スーモー˥　シゥカイオーラン˥セン［pạtuma-pụso:　ʃi̥kiudzuti　su:mo:　si̥kaio:ranseŋ］（鳩間の人は，敷き布団なんていうものは使われなかった）。

Hosei University Repository

シキダイ [ʃi̥kidai]（名）突き台。漁船の舳先に，魚を釣ったり，突いたりするために作ってある台。ツキセン [tsu̥kiseŋ]（突き船，カジキを突き，漁をする船）の舳先きには，そのための台が前方に突き出ている。カツシンヌ゠ イチバンゾー゠ヤ シキダイ゠ナー ビリティ ホー゠ス [kḁtsuʃinnu ʔitʃibandzo:ja ʃi̥kidaina: biriti ho:su]（鰹船の一番竿≪一番釣手≫は突き台の上に座って鰹を釣る）

シキダイビリ [ʃi̥kidaibiri]（名）あぐら。男の坐り方。両足を正面で組みあわせて坐る坐り方。姿勢が堂々とした坐り方になるので，目上の人の前でこの坐り方をすると横柄な態度だと注意されたものである。例，ヤラ゠ビ ゠アタル ゠ムヌヌ プスヌ゠ マンタナー シキダイビリバ セー゠ティ アー゠ク [jarabi ʔataru mununu pu̥sunu mantana: ʃi̥kidaibiri se:ti ʔa:ku]（子供のくせに人の前であぐらをかいているよ）

シキダ゠キ [ʃi̥kidaki]（名），まっち（隣寸）。「付け竹」の義か。火をおこして，焚きつけに用いることから命名されたものであろう。鳩間島にマッチが導入されたのは，日露戦争に出征して帰島した通事家の先祖がもたらされたのが最初だという。竹串の先から火が出る不思議な物として，部落中の者がそれを見に集まったという（加治工伊佐談）。例，シキダ゠キ ゠ッシ ゠ピー シキ゠リ [ʃi̥kidaki ʃʃi pi: ʃi̥kiri]（マッチをすって火をつけなさい）

シキ゠タン [ʃi̥kitaŋ]（名）石炭。西表島北岸の下離（゠シザバナリ [ʃidzabanari] という）には大正期に炭坑が掘られ，昭和期には上原地区，ウラン゠ザキ [ʔurandzaki]（宇奈利崎）に炭坑が開かれ，石炭が採掘された。例，ウボー゠ダーラ ニシミジ゠ヌ ウンタヌ゠ ヌーナ ゠タンコーヌ ゠アリティ シキ゠タン プローッ゠タ [ʔubo:da:ra niʃimidʒinu ʔuntanu nu:na taŋko:nu ʔariti ʃi̥kitam puro:tta]（ウボーダからニシミジの上の野に炭坑があって石炭を掘られた）

シキタン゠ユー [ʃi̥kitanju:]（名）「石炭油」の義。油。現在では，ほとんどの人が石油を，シキ゠ユー [ʃi̥kiju:]（石油）という。シキタン゠ユー [ʃi̥kitanju:] は昭和初期頃まで（『八重山語彙』）は生活語彙であったが，今日では八十歳以上の人の理解語彙となっている。六十歳以下ではほとんど理解されないものと思われる。

シダ゠ル [ʃidaru]（名）簾。タキ・シダル [tḁkiʃidaru]（竹簾），ユシ゠キ・シダル [juʃi̥ki-ʃidaru]（ススキ簾）があるが，甍をおそって被せるのに用いるのは，タキ・シダルである。ダディ゠ク・ダキ [dadiku-daki]（ダディク山からとれる竹）を利用して編んだもの。例，シダ゠ロー イラ゠カナ カバ゠シティ シミ゠ナー ゠カキティ シミ゠リ [ʃidaro: ʔirakana kabaʃi̥ti ʃimina: kḁkiti ʃimiri]（簾を甍にかぶせて締縄を掛けて締めなさい）

シチブ゠・クギ [ʃi̥tʃibu-kugi]（名）「七分釘」の義。壁板を打つに用いる釘で，小型の釘。一般的に，家庭で用いられる釘はこの型のものが多い。長さが一寸に足りない，七分の釘

Hosei University Repository

の意。例，シチブ┐クギ　┐サンギンブカラ　カイ┐クーカー　クビウティ┐モー　タラウン┐カヤー［ʃi̥tʃibukugi　saŋgimbukara　kaikuːkaː　kubiutimoː　tarauŋkajaː］（七分釘を三斤ほど買って来たら，壁打ち用の釘は足りるでしょうか）

┐シチリン［ʃi̥tʃiriŋ］（名）「七輪」の義。炭火用の素焼きの焜炉（コンロ）。戦後の一時期輸入されたことがある。農家では炭火を使って炊飯するほど生活は悠長でないためか，ほとんど流行しないうちに，石油コンロやガスコンロの時代へと流れていった。例，┐シチリンマーパトゥ┐マナテー　シゥカイミチェー　ナーンセン［ʃi̥tʃirimmaː　pa̯tumanateː　si̥kaimitʃeː　naːnseŋ］（七輪は鳩間島では使いみちがなかった）

シティハギ［ʃi̥tihagi］（名）ハギ柱の外側にさらに軒を出して，それを支えるために立てた柱のこと。シティハギを出すことで，軒下を利用して漁具や農具類を置くのに使った。例，シティハギ　スイザシティ　ナーラ┐シスク┐リ　スコー┐レー［ʃi̥tihagi　suidzaʃiti　naːraʃi　su̯kuri　su̯koːreː］（シティハギを添え出して，衣類掛け場を作っておかれてある）

シナカキ┐ヤマ［ʃinakakijama］（名）「綱掛やま」の義か。「-ヤマ」は「機械」とか「仕掛け」の意である。縄を三本縒り合わせて一本の太い綱に仕上げる器具。一枚の厚い板に3個の穴をあけ，回転式ハンドルを附けて地面にたてたポールに固定する。他方の板には1個の穴をあけ，同じ回転式ハンドルを附けておく。三本の縄の片端をそれぞれのハンドルにつけ，もう一方のハンドルには3本の縄を結び，それぞれのハンドルを逆方向に回わして縄を縒る。適当に縒ったところで三つ又を当て，3本の縄を結んだハンドルを他方と逆方向に回転すると，太い縄が縒りあがっていく。鳩間島では，フー┐カラジナを，このようにして太いロープに綯いあげ，船のロープを作っていた。例，キュー┐ヤ　┐シナ　カキ┐ラティ　┐ウムイ　ベー┐ティ　ワー　テー┐ナイ　シーツフィーリ［kjuːja　ʃina　kakirati　ʔumui　beːti　waː　teːnai　ʃiː　ffiːri］（今日は綱を掛けようと思っているので，君，手伝ってくれ）

┐シナフクビ［ʃinaΦu̯kubi］（名）「綱きき帯」の義か。「きき帯」は，「くくり帯」の音韻転訛したものであろう。農家の人は，畑や田仕事に出る際は，藁縄で作業衣を強くしめて出かけたものである。力仕事にはワラ縄の帯をしめ，山刀や鋸，鎌などを腰にさして行った。例，ターパタキ┐ヌ　シグトゥ　スー┐　ピンマー　┐シナフクビ　フンサマリティル　ソーッ┐タ［taː-pa̯takinu　ʃigutu　suː　pimmaː　ʃinaΦu̯kubi　Φunsamaritiru　soːtta］（田畑の仕事をするときは，綱帯をひきしめてなさった）。

シビナージナ［ʃibinaːdʒina］（名）「注連縄綱」の義か。悪霊の浸入を防ぐために張りめぐらす左綯いの綱。藁の尻を長く出して左綯いにして綯いあげる。これを張りめぐらせば悪霊は浸入しないと信じられているので，┐シラ［ʃira］（産褥）に張りめぐらしたり，村の出入口や屋敷の門などにも張った。例，シマッサル┐ヌ　┐ピンマー　ムラヌ┐ウリダ┐チ

Hosei University Repository

ナー シビナージナ パローッタ [ʃimassarunu pimma: muranu ʔuridatʃina: ʃibina:dʒina paro:tta]（島くさらしのときには村の出入口にシビナージナを張られた）

シミ˥ナ [ʃimina]（名）墨縄，大工用の工具の一つ、シン˥スブ（墨縄）についている縄。木綿の小糸や麻の糸が用いられる。材木に直線をひくために，墨壺の墨をつけて墨壺の先の穴から引き出し，材木の端に刺し，墨壺を他の端につけて，縄を弾いて直線をひく。シミ˥ナー パン˥クン [ʃimina: paŋkuŋ]（墨縄を弾く）とか，シミ˥ナー ˥ウトゥン [ʃimina: ʔutuŋ]（墨縄を打つ）のようにいう。「あたらしき猪名部の工匠（タクミ）撃し須弥儺（すみなは）幡」（『雄略紀』十三年），「墨縄をはへたる如く」（『万葉』-894），「かにかくに物は思はず飛騨人の打つ墨縄のただ一道に」（『万葉』-2648）。「縄墨，端直不レ曲，喩如二縄墨一，須美（すみ）奈波（なは）』（『和名抄』）などとある。

˥ジルー [dʒiru:]（名）「地炉」の義。床を切ってこしらえた炉。産婦が産褥に入る際にジルーを作った。普通は二番裏座か、三番裏座に作られた。床を一部切り落して、シンマイナビ [ʃimmainabi]（「四枚鍋」の義か。大鍋のこと）の破損したものをすえ、砂を入れ、その上に薪を燃した。産褥は四周をシビナージナ [ʃibina:dʒina]（注連縄）で張りめぐらし、悪霊の侵入を防いだ。島で出産する人がいなくなって、地炉も消えた。

シルヌ・ウチ [ʃirunu-utʃi]（名）屋敷内。古謡語。「アーパーレー」（新室寿歌）の中で「しるうちぬ めーぬうち」のように用いられる。「代内」の義。田、田地、一定の区域、部分の意。転じて、屋敷の意となる。例、ヤー˥シルティン カイ˥ アラ˥シ マイフナー˥ ドー [ja:ʃirutiŋ kai ʔaraʃi maiɸuna: do:]（家代（いえしろ）≪屋敷≫ても買い求めることができて、（君は）立派だよ≪働き者だよ≫）

ジンギ [dʒiŋgi]（名）、缶詰罐。ブリキ製の罐。 ジン˥ギリ [dʒiŋgiri] ともいう。ジンギレー˥マ [dʒiŋgire:ma]（小さな罐）などがある。例、カンゴフ˥ヌメーヤ ギュタールン オーリ˥ブリ ナーメーメヌ˥ ジンギレー˥マナ フチ˥ル イリ˥ ムティオーッタ˥ヌ イッケン˥ スクタン˥サー [kaŋgoΦunume:ja gjuta:run ʔo:riburi na:me:me:nu dʒiŋgire:mana Φɥtʃiru ʔiri mutio:ttanu ʔikken sɥkutansa:]（看護婦の方々は何人もいらっしゃって、銘銘の小罐に薬品を入れて持っておられたが、大変よく効いたよ）

シン˥スブ [ʃinsubu]（名）墨壷、大工用の工具。舟型をした木製の墨壷。片方に巻取り用の輪があり、これに木綿の糸をとりつけ、墨壷の小穴へ通して墨をつけ、舟型の先端部の小穴からくぐらせて引き出し、針に結びつける。材木に直線を打つとき、針をつまんで糸を引き出し、木材の一方に刺して立て、墨壷を材木の他方の一点につけて、縄を弾くと材木の表面に直線の墨痕がひかれる。

墨壺

竹筆

Hosei University Repository

シン┐ダ [ʃinda]（名）針金。金属を細長く糸状に延ばして、建築用、または船具用に用いるもの。その太さによって用途が異なる。直径１ミリ程度の針金は、釣り具に利用されたり、竹箒などを作る際に利用された。例、シン┐ダシ　タキポーキ┐　シミ　フバル┐カーウーカ┐ヌ [ʃindaʃi　tąkipo:ki　Φubaruka:　ʔu:kanu]（針金で竹箒を締め括ると、動かないよ）

シンダー┐マ [ʃinda:ma]（名）小さな針金。「～マ」は指小辞。垣根を作る際に縄の代りに締めつけるのに用いる。鰹節製造工場のセイロー [seiro:]（蒸籠、カツオを焙乾する籠）の竹を編むのにも多くシンダーマを使った。例、シーゾーヤー┐ヌ　セイローヌ┐　スコー┐　シンダー┐マシ　タキ┐　フモーッ┐タ [ʃi:dzo:ja:nu　seiro:nu　suko:　ʃinda:maʃi　taki　Φumo:tta]（製造家の蒸籠の底は小さな針金で竹を編まれた）

ジン┐パク [dʒimpąku]（名）銭箱。お金を入れる箱。お店などでお金を入れておくのに用いる箱。例、ハ┐ー　ウン┐ネヌ　ジン┐マー　ジン┐パクナー　アバッカイルン┐ケン　┐アン　ティ　ダー┐ [hā:　ʔunnenu　dʒimma:　dʒimpąkuna:　ʔabakkairuŋkeŋ　ʔanti　da:]（はあ、もう、その家のお金は、銭箱にあふれるほどあるそうだよ）

シンマイ [ʃimmai]（名）間どり。部屋のとり方。部屋の作り。シンマイ　トゥリ┐ヨー [ʃimmai　turijo:]（部屋の作り方。間どりの仕方）、シンマイヌ┐　カナイティ　ミサンダー [ʃimmainu　kanaiti　misan　da:]（部屋の作りが、適っていていいですよ）。クヌヤー┐ヤ　シンマイヌ　ナン┐ゾー　ダーッサナー┐ヌ [kunu　ja:ja　ʃimmainu　nandzo:　da:ssana:nu]（この家は、間どりが、それほどよくない）普通は、イチバン┐・ザー [ʔitʃiban-dza:]（一番座）、ニーバン┐・ザー [ni:ban-dza:]（二番座）、サンバン・ザー [samban-dza:]（三番座）、イチバン・ウラ┐ザ [ʔitʃiban-uradza]（一番裏座）、ニーバン・ウラ┐ザ [ni:ban-uradza]（二番裏座）、サンバン・ウラ┐ザ [samban-ura┐dza]（三番裏座）、ナカ┐ザ [nakadza]（土間）のように間取りをとるのが伝統的な農家のあり方であった。

シンタ・カク [ʃinta-kąku]（名）後の家の屋敷。ベー┐ヌ　シンタ・カク┐ナ　イビ┐シケータ　┐バサー　イッケナ┐　ナレーン　ダー [be:nu　ʃinta　kąkuna　ʔibiʃi̥ke:ta　┐basa:　ʔikkena　nare:n　da:]（我が家の後の屋敷に植えておいた芭蕉は、よくみのったよ。≪たくさん実をつけたよ≫）

┐スクイ [sukui]（名）麻笥。紡いだ麻糸や芭蕉の糸を入れておくのに用いる木製の箱。縦30センチ、横30センチ、深さ15センチほどの箱。戦前までは、女性は夜業をしながら麻糸や芭蕉糸を紡いで┐スクイに入れた。「処女らが麻笥（をけ）に垂れたるうみ麻（を）なす」（万－3243）。例、┐ブー　ウー┐ムカー　┐スクイナー　イリティ┐　タモーッ┐タ [bu:　ʔu:mu-ka:　sukuina:　ʔiriti　tamo:tta]（麻糸を紡ぐと麻笥（をけ）に入れてためられた）

スブ┐チダマ [subutʃi-dama]（名）海花石。菊目石。ピー [pi:]（干瀬）やイノー [ʔino:]

Hosei University Repository

（礁内湖）の海底に棲息する石珊瑚の死殻。直径約30センチ～40センチ程度の球塊状をなしているものを取って来て、頭頂を削り、礎石に利用した。これをイシジ［ʔʃidʒi］（礎石）という。スブチダマは古謡語である。「すぶちだま　いしじばしー　やーばすくりあんてぃす、以下略」のように謡われている。

˥セメンガーラ［semeŋgaːra］（名）セメン瓦の義。セメントで作った瓦のこと。鳩間島には全く使用されなかった。石垣島ではセメンガーラで葺いてある家がよく見かけられた。灰色のセメント瓦は、赤瓦を見慣れた島人にとっては、あまり喜ばれなかったもののようである。例、˥セメンガーラー　パトゥ˥マナーテー　ターン˥　シゥカイオーラン˥シェン［semeŋgaːraː　patumanaːteː　taːn　sɨkaioːranʃeŋ］（セメン瓦は、鳩間島では、誰も使われなかった）

セン˥スル［sensuru］（名）「扇子」の義。竹や木で骨格部を作り、末広になるよう要をとじ、紙を張って折りたためるようにしたもの。舞踊や儀式の際に用いた。舞踊に用いる扇子を、特にブドゥルオンギ［buduru-oŋgi］（踊り扇）という。日の丸を入れたのをヒノマルオンギ［çinomaru-oŋgi］（日の丸扇）といい、舞踊などによく用いられた。センスルは、センス（扇子）が訛った形。

˥ゾー［dzoː］（名）門の外側の道路。沖縄本島では、「門」を「ジョー」というが、鳩間方言では、門の外側の通路一般をいう。バン˥テヌ　ゾー［bantenu　dzoː］（私の家の門の外側の道）、ワッ˥テヌ　ゾー［wattenu　dzoː］（君の家の門の外側の道）。例、エ˥ー　ンガマサ˥ヌ　˥ゾーナ　ギー˥　アサビ˥バ［ʔeː　ʔŋgamasanu　dzoːna　giː　ʔasabiba］（おい！　うるさいから、門の外の道へ行って遊びなさいよ）。

ゾー˥キン［dzoːkiŋ］（名）雑巾。共通語からの借用語。昔はヤリ˥カコー［jarikakoː］（ぼろ≪襤褸≫）を利用して雑巾としたり、濡れた所を拭いたり、足拭きにしたりしたものである。ひどい汚れを落すには、藁を束ねたり、藁縄を用いたりして、水をかけながら拭き洗いして落した。例、ゾー˥キン　スブ˥リキー　トゥーシ˥　フカン˥ノーレー［dzoːkin　suburi-kiː　tuːʃi　Φɥkannoːreː］（雑巾をしぼってきて縁側を拭いてくれないか）

ソージヌ˥・サン［soːdʒinu-saŋ］（名）「障子の桟」の義。共通語の転訛したものであろう。島では、障子のある家はごく限られた数しかなかった。例、˥ソンガチマイ　ヤリバ　ソージヌ˥　サン　スナカ˥ナ　ムティギー˥　アライ˥　クー［soŋgatʃimai　jariba　soːdʒinu　san　sunakana　mutigiː　ʔarai　kuː］（正月前だから障子の桟を海に持って行って洗ってきなさい）

˥ゾーンタ・ヤー［dzoːnta-jaː］（名）「門の家」の義か。石垣島の士族の家の門には、屋根をかけ、瓦で葺いたものがあった。鳩間島の人々は、それをゾーンタヤーといった。

ゾーンタヤーで雨宿りをしていて、その家の人から親切を受けたことがよくあったという。例、イサナキヌ˥　ユカラプス˥ヌ　˥ヤーナール　˥ゾーンタヤーヤ　アッタ˥ダー

Hosei University Repository

[ʔisanakinu jukarapu̯sunu ja:na:ru dzo:ntaja:ja ʔatta da:]（石垣島の士族の家にゾーンタヤーはあったよ）

˥ダイ [dai]（名）台。机、テーブル等にもいう。物を載せたり、飾ったりする際に用いる器具。普通は背もたれのないものにいう。例、ナカザ˥ナー ˥ダイ スク˥リ ビス˥カー イッケナ˥ シゥカイミチェー˥ アリブヌ [nakadza-na: dai su̯kuri bisuka: ʔikkena si̯kaimitʃe: ʔaribunu]（土間に台を作って置くと、非常に使い道≪用途≫が多い）。

タカ˥マドゥ [takamadu]（名）「高窓」の義。ハン˥マドゥ [hammadu]（半窓）ともいう。壁の上半分を窓にし、下半分（3尺）を壁にした窓。本来の島の建築様式ではなく、鰹節製造工場が建てられるようになって導入された窓の様式。例、タカ˥マドゥ スク˥リシケーンドゥ カジン ペーラ˥ヌ キクツァ˥ヌ ナラ˥ヌ [takamadu su̯kuriʃi̯keːndu kadʒim peːranu ki̯kutsanu naranu]（高窓を作ってあるが風も入らない。むし暑くてたまらない）。

タキアイク [tą̯kiaiku]（名）「竹杁」の義。直径7センチほどの、鰹釣り用の釣り竿を利用して作った。この竹竿は九州あたりから輸入されていた。沖縄ではこの種の竹は産しないようである。例、タキアイコー カロー˥ンアリ スー˥ワン アンダー シゥカイヤッ˥サン [tą̯kiaikoː karoːn ʔariː suːwan ʔandaː si̯kaijassaŋ]（竹杁は軽くもあり、強くもあるので、使いやすい）。

タキフン [tą̯kiΦuŋ]（名）「竹釘」の義。カツホーシ˥・サウ [ką̯tsuhoːʃi-sau]（鰹釣り竿）の竹を利用し、箸の大きさに削って、先端を尖らせ、錐で穴をあけた所に打ちこむのに用いる釘。イダフニ [ʔidaΦuni]（板舟、サバニ）には鉄釘は使えないので、このタキフン（竹釘）を用いた。錆つかないからである。板と板の合わせ目には、フンドゥ [Φundu] という⋈型の、イヌ槇で作った一種のカスガイを打ちこんで、補強した。

タキポーキ [tą̯kipoːki]（名）竹箒。竹製の箒。ポー˥キ・ダキ [poːkidaki]（箒竹）を伐ってきて、五、六本結えて作った簡単な箒。筆状の形態をしており、誰にでも手軽に作れた。広い屋敷はこの種の箒を用いるのが便利である。例、˥ドゥーシ スク˥レー タキポーキ˥ アラン˥カー ナガムテー サヌ [duːʃi su̯kureː tą̯kipoːki ʔaraŋkaː nagamuteː sanu]（自分で作った竹箒でないと、長もちはしないよ）。

タタミ [tą̯tami]（名）畳、藁を糸でさしかためた床に、ビー [biː]（藺）で編んだ表をつけたもの。イツァフン˥ツァ（板床）やタキフンツァ（竹編みの床）に敷く。縦1間、幅半間の長方形に作る。˥サンジャク・タタミ [sandʒaku-tą̯tami]（3尺畳）は、その半分の大きさの畳。例、タタミヌ˥ ウム˥ティ カウター ミーム˥ ナリベ˥ー [tataminu ʔumuti kautaː miːmu naribeː]（畳の表を替えたので新品にかわっている）。

タタミヌ˥・ピル [tą̯taminu-piru]（名）畳のへり。畳の縁取りとして、絹布や上質の布で飾ったもの。亀甲模様の布や黒色の布などを幅約3.5センチ、長さ6尺または3尺にして、

Hosei University Repository

畳の両側を縁取ったもの。例、ムカ˥シ・プソー　タタミヌ˥・ピロー　フンクナ˥ヨーッティ　シー　ナ　ラー˥　ソーッ　タ　[mukaʃipu̯so:　ta̯taminu-piro:　Φ　uŋkunajo:tti　ʃi:　nara:so:tta]（昔の人は、畳の縁は踏むなよといって教えられた）。

タナ　[tana]（名）「棚」のこと。タム˥ヌ・タナ　[tamunu-tana]（薪を乾燥させる棚）、ミジン˥ダナ　[midʒindana]（食器や鍋類を乾燥させる棚）などがある。また、˥イダフニ　[ʔidaΦuni]（サバニ）にとりつける、タナ　[tana]（幅約25センチ、長さ約6尺の板）もある。例、ヤー˥ヌ　ナカ˥ナー　タナヌ　ナーン˥カー　シゥカイグリ˥サン　[ja:nu　nakana:　tananu　na:ŋka:　si̯kaigurisaŋ]（家の中に棚がないと使いにくい）。

タナ　[tana]（名）「船棚」の義。˥イダフニ　[ʔidaΦuni]（「板舟」の義、サバニ）に荷を積むと、˥アシ　ビルン˥　[ʔaʃi　biruŋ]（喫水が坐る≪喫水が深くなる≫）ので、両舷にタナ　[tana]（棚板。幅約25センチ、長さ約6尺の板。継ぎ足しができるよう、工夫されている）を掛けて、海水が船に入らぬようにしたもの。キュー˥ヤ　ムサヌ˥　ンジブンダ˥　タナ˥　カキ˥リ　[kju:ja　musanu　ʔndʒibunda　tana　kakiri]（今日は白波が立っているので、タナを掛けなさい）。

タマガラ˥ス　[tamagarasu]（名）「玉ガラス」の義か。ガラスのこと。もともと、ガラスを「タマ」と言ったものと思われる。タマウー˥キ　[tamau:ki]（「玉桶」の義、桶の底をガラスで張ったもの。漁師がサバニを操船しながら、それで水中をのぞき、魚や貝類を探すのに用いるもの）の「タマ」はガラスをさしている。タマガラ˥ス　バリティ　ミーカン˥ガン　スク˥リ　[tamagarasu　bariti　mi:kaŋgan　su̯kuri]（ガラスを割って水中めがねを作りなさい）。

タム˥ヌ・タナ　[tamunu-tana]（名）「薪棚」の義。各家には竈の上に「つり棚」をかけておいて、その上にバリダムヌ　[baridamunu]（割った薪）を積んでおき、乾燥させて用いるようにしたもの。その棚のこと。家にタム˥ヌが切れないように絶えず補給するのが男の仕事の一つで、主婦はそれを誇りにしたものである。例、タム˥ヌ・タナナ　タム˥ヌ　キサス˥ナ　[tamunu-tanana　tamunu　ki̯sasuna]（薪棚に薪を切らすな）。

タライ　[tarai]（名）「盥」のこと。「手洗い」の義か。衣類を洗濯するのに用いる板製の容器。カナダライ　[kanadarai]（亜鉛やジェラルミン等の金属板で作った洗濯盥のこと）は、戦後出まわるようになった。例、ユグリ・キンマー　˥タライナー　イリティ˥　ミジ˥ナー　フクラシ˥　シキ˥リヨー　[juguri-kimma:　taraina:　ʔiriti　midʒina:　Φu̯kuraʃi　ʃi̯kirijo:]（汚れた着物は盥に入れて水につけておきなさいねえ）。

タル˥キ　[taruki]（名）「垂木」の義。屋根のユチル　[jutʃiru]　を支えるために棟から軒にわたす材。直径11～12センチ、長さ約4メートルの丸太。西表島の山中より、シター˥マ　[ʃi̯ta:ma]（「えごのき」の一種か）、アゴ˥チ　[ʔagotʃi]（「もくたちばな」の一種か）などの若木を伐って使っていた。例、タル˥ケー　ゴーラ˥ヤ　シターマ˥バ　シゥカイブタ

Hosei University Repository

[taruke: go:raja ʃi̥ta:maba si̥kai-buta]（垂木は、多くはシターマを使っていた）。

タン [taŋ]（名）炭。昭和30年代初め頃まで、冬場になるとよく炭焼きをしたものである。西表島の北岸から雑木を伐り、鳩間島に運んで、砂浜で炭焼竈を造って炭焼きをしたものである。生木を約40センチの長さに切り、砂浜を掘って作った竈に並べて積みあげ、その上に茅をかぶせて砂を盛り排煙口をつけて入り口の方から燃やし続ける。1～2時間焚きつけて生木が燃えると入口を塞ぎ一晩中燃した後、排煙口を塞いで消火する。二、三日放置した後、盛り砂を除くと、真黒の木炭が出てきた。自家用の木炭はこのようにして童児たちが製造した。販売用の木炭は西表島の山中で焼いた。それをタング [taŋgu]（ススキ≪薄≫を編んで作った木炭入れ）に詰めて石垣島へ輸出した。例、ガジマル˥ヌ　ユダ˥キシティ　タン˥　ヤクタン˥ [gadʒimarunu juda ki̥ʃiti tan jakutaŋ]（ガジマル≪榕樹≫の枝を切って炭をやいた）。

˥ダン [daŋ]（名）段、階段。カイダン [kai-daŋ]（階段）ともいう。「階段」は借用語であろう。˥ドゥダン [dudaŋ]（土段）が多用される。ドゥダンは、普通は「盛土」して平らし、コーセー˥マイシ [ko:se:ma-iʃi]（砂岩）などで縁どりし、その上に家を建築したものである。例、ペーラ˥フチェー　ウブ˥・イシ　キジティ˥　ダン　スク˥リシケー [pe:ra-Φu̥tʃe: ʔubuiʃi kidʒiti dan su̥kuri ʃi̥ke:]（入口≪門≫は大きな石を削って段を作ってある）。

タング [taŋgu]（名）「炭籠」の義か。ススキを約50センチの長さに切って編み器で編み、直径約25センチの円筒形の容器に編みあげ、それに木炭を詰めて運ぶのに用いた。タングはイッピュー [ʔippju:]（一俵）˥ニヒュー [niçu:]（二俵）、˥サンビュー [sambju:]（三俵）のように数えた。例、タング　˥フミティ　タン　イリラ [taŋgu Φumiti tan ʔirira]（タングを編んで炭を入れよう）。

˥タンコー [taŋko:]（名）炭坑。西表島には大正期に、ナミノ˥ウエタンコー [naminoue-taŋko:]（波之上炭坑、船浦の対岸、サーラ˥ミジ [sa:ramidʒi]≪ひない滝≫の所で採炭し、下離から積み出した）、があり、昭和期になって˥ノダタンコー [noda-taŋko:]（野田炭坑）が浦内地区で開かれた。ウランザ˥キ [ʔurandzaki]（宇奈利崎）あたりの炭坑で掘った石炭を浦内から白浜港へ運び、そこで台湾航路の定期船（ゾーキ [dzo:ki]≪蒸気船≫）に積みこまれた。

タン˥シ [tanʃi]（名）箪笥。˥ニービキ・タンシ [ni:biki-tanʃi]（結婚箪笥。娘が嫁入りする際に持参させる箪笥）。昔は、娘が誕生すると、シン˥ダン・キー [ʃindaŋki:]（桐檀）を植え、20年後の嫁入りの時にその桐檀を伐って箪笥の材料にしたという。例、パトゥ˥マ・プソー　シン˥ダン・キーバ　キシ˥ル　タン˥シ　スクラ˥ソーッタ [pḁtuma-puso: ʃindaŋki:ba ki̥ʃiru tanʃi su̥kuraso:tta]（鳩間の人は、桐檀を伐って箪笥を作らされた）。

Hosei University Repository

ダン˥トゥク [danu̯uku]（名）仏壇の裏側の空間を利用して、押入れ風の物置きに作った所。通常は二番裏座と二番座の間に作られるが、二番裏座側に引き戸を作って開閉できるようにし、ジン [dʒiŋ]（膳）や、ジブ˥ク [dʒibuku] などの漆器類を収納しておいたり、ピル [piru]（大蒜）の漬物や、味噌（マイヌ・ミー˥ス [mainu-mi:su] ≪米味噌≫）を詰めた甕などを保管しておくのに利用された。

トー˥ラ [to:ra]（名）炊事小屋、普通は母家の西側に建てられた。アナ˥プリヤー [ʔana-purija:]（「穴掘家」の義、掘っ建て小屋）で茅葺き（˥ガヤヤー [gajaja:]）であった。炊事場と農貝置き場を兼ね、シブル [ʃiburu]（冬瓜）やカブッチ [kabuttʃi]（カボチャ、南瓜）を保存しておくのに利用した。例、トーラ˥ヌ　ウブ˥ナビナー　オー˥ヌ　˥イーバカシ˥ [to:ranu　ʔubunabina:　ʔo:nu　ʔi:　bakaʃi]（トーラの大鍋で豚の飯≪飼料≫を炊きなさい）。

チパル [tʃi̯paru]（名）「突張り」の義か。つっかい棒。支柱のこと。˥ムヤーバラ [muja:-bara:]（母屋柱）と˥ムヤーバラーの間に、X字状の貫きを入れて、更に横二段に貫きをわたして、耐震構造を強化したもの。チパルやヌキには、ッサビ（楔）を両側から打ちこんで固定するので、釘は使用しない。例、˥ヤーナ　チパル　イリティ　スーラ˥シ [ja:na　tʃi̯paru　ʔiriti　su:raʃi]（家にチパルを入れて、柱を強化しなさい）。

チャブ˥ダイ [tʃabudai]（名）「卓袱台」の中国語音の転訛したものといわれている。鳩間方言へは共通語から借用されたものであろう。円形のものが戦前から使用されていた。短い脚の食台の一種で、脚の部は折り畳み式で収納できる、新式のハイカラな食台であった。例、ワッ˥テヌ　プソー˥　イチル˥　チャブ˥ダイ　カイオーッ˥タ [wattenu　pu̯so:　ʔitʃiru　tʃabudai　kaio:tta]（あなたの家の人は、いつチャブダイをお買いになりましたか）。

チョー˥チン [tʃo:tʃiŋ]（名）提灯、共通語からの借用語か。主として、七月のお盆に仏壇につるして祖霊を迎え、もてなすのに用いた。日常生活で提灯を用いることはほとんどなかった。仏壇を飾るものとして、石垣島から購入してきたものである。例、チョーチン˥マー　ソー˥ランナール　トゥクニ˥　カザルンティ˥　カイオーッ˥タ [tʃo:tʃimma:　so:ran-na:ru　tu̯kuni　kadzarunti　kaio:tta]（提灯はお盆に仏壇を飾るために購入された）。

ッサビ [ssabi]（名）「楔」の義。枘穴に貫き材を通して、その間に枘穴の両側から楔を打ち込んで柱の骨格を固定し、強化したもの。◁形の、長さ約20センチ程の楔。建築用材の切端を利用して作った。kusabi→ssabi　のように融合変化したもの（逆行同化）。例、クマン˥トンマー　ツサビ　ホーサン˥タンティン　˥ミサン [kumantomma:　ssabi　ho:santantim　misaŋ]（ここの所は楔を喰わせなくても≪打たなくても≫よい）。

ツスルン [ssuruŋ]（動）拭く。「擦る（コスル）」の転訛したものか。kosuru→Φusuru→ssuruŋの変化過程が考えられる。布巾などで軽く拭くのも、ツスルンといい、雑巾などで縁側の床板

Hosei University Repository

を力をこめて拭くのもツスルンという。例、˥マンタヌ　トゥーシ　ゾー˥キンシ　ッスリティ˥　アサビ˥バ［mantanu　tu:ʃi　dzo:kinʃi　ssuriti　ʔasabiba］（前の方の縁側の床板を雑巾で拭いてから遊びなさいよ）。

ティブ˥ク［tibuku］（名）「手矛」の義か。屋根を葺く際に、茅を押さえるのに用いる直径約3～3.5センチ、長さ約3メートル程の若木や竹。先端（根の所）削って矛状にし、それを茅に突き刺し、シミ˥ナー［ʃimina:］（締縄）で締め結えながら連結していく。屋根葺人は、内側からパルシキ˥・プスが突き出すパル（竹矛）の穴に締縄を通して、タルキに掛けさせ、それをこのティブクに掛けて強く締め、茅を押さえて葺きあげるのである。足で、トントンと踏み固めて締めつけ、葺き進める。葺き手と内側のパルシキ˥プスの呼吸が合わないと上手に葺けないので、掛け声をかけ合いながら葺き進めた。例、シミナー˥ヤ　タルキ˥トゥ　ティブ˥クナ　˥カキティル　シミ˥シキ　ヤー˥ヤ　フクタ［ʃimina:ja　tarukitu　tibukuna　kąkitiru　ʃimiʃi̥ki　ja:ja　Φu̥kuta］（締め縄は垂木と手矛に掛けて締めつけて、屋根は葺いた）。

ティンダ˥ティ［tindati］（名）起工式のこと。吉日を選んで着工する。イチバンザイ˥ク［ʔitʃibandzaiku］（一番大工、棟梁のこと）と家主、ユイプス［jui-pu̥su］（結い人）らが、材木にシミ˥ナー［ʃimina:］（墨縄）で墨線を入れたり、枘穴を掘ったり、枘を作ったりして建築工事を開始すること。例、ウン˥ネヌ　ヤー˥ヤ　ティンダ˥テー　ソー˥レーン［ʔunnenu　ja:ja　tindate:　so:re:ŋ］（その家の家は、起工式はすでにすまされた）。

ティン˥ゾー［tindzo:］（名）天井。ティンゾー˥ヌ　サン［tindzo:nu　saŋ］（天井の桟）。ティンゾー˥イツァ［tindzo:-ʔitsa］（天井板）。ティンゾー˥ヌ　ウラ［tindzo:nu　ʔura］（天井の裏。天井裏のこと）。例、ティン˥ゾー　ヌーリティ˥　ドゥル˥　カキ　ウラ˥シ（天井裏にのぼって、土（砂）を掻きおろしなさい）。古い家では、瓦を葺く際に粘土を捏ねて屋根にのせるが、これが古くなると落ちて天井裏につもるようになる。

トゥイ［tui］（名）樋。屋根を流れる雨水を受けて、水タンクや水甕などに流す半筒形のもの。普通は、直径12～13センチ、長さ約2間ほどの大竹を二つに割ったものを利用した。若い人は共通語の影響で「トゥイ」というが、老人層は、˥ビー［bi:］（樋）という。例、ヤー˥ヌ　ヌキ˥ナー　トゥイ˥　カキ˥ラ　ディ˥ー［ja:nu　nukina:　tui　kąkira　di:］（家の軒に樋を掛けようよ）。

トゥーシ［tu:ʃi］（名）「通し」の義か。縁側、廊下。板張りの縁側。杉板のなかった時代には、フクン［Φu̥kuŋ］（福木）の角材を厚さ約7分の板に挽いて、フンツァ˥イツァ［Φuntsa-itsa］（「踏み板」の義か。床板のこと）を作った。これを、イツァ　バクン［ʔitsa bakuŋ］（板を分く）という。従って縁側の板張の床板は、凹凸があったが、夏場は、この板の間が涼風を呼び、子供らは涼を求めて、このトゥーシに寝たものである。戸を開放したまゝ、トゥーシに寝ると、自然の冷気で熟睡することができた。夏場は掛け布団も無

Hosei University Repository

用であった。潮騒の音を枕元に聞きながら、天然の音楽を楽しむことのできる寝室でもあった。例、トゥーシ˥ナー　ナーパイ　シー˥　ニビベー˥　モー　ター˥ヤ［tu:ʃina: na:pai ʃi: nibibe: mo: ta:ja］（縁側の板の間に身を伸ばして寝ているのは誰か）。トゥーシは、イツァフン˥ツァ［ʔitsaΦuntsa］（板張りの床、「板踏み板」の義か）が普通である。

トゥー˥ジン［tu:dʒiŋ］（名）「灯心」の義。綿糸で織った厚手の布で、灯油に浸して油を浸みこませ、火をともすのに用いるもの。普通は幅約２センチ、厚さ約1.5ミリ程度のもので、これを、ゴブトゥージン［gobutu:dʒiŋ］（五分灯心）といい、大きいものはハチブトゥー˥ジン［hatʃibutu:dʒiŋ］（八分灯心）といった。例、トゥー˥ジン　ンジダー˥ヌンメーマ˥　シミ˥リ［tu:dʒin ʔndʒida:nu ʔmme:ma ʃimiri］（灯心が出すぎているので心し締めなさい）。

トゥー˥ル［tu:ru］（名）ランプ、「灯籠」の義か。八十歳代以上の人が日常的に用いる。昭和三十年代までは電気がなかったので、日常的にトゥールを用いていたが、その頃でも若い人（三十歳代まで）はランプと称していた。今日では電灯が点灯し、トゥー˥ルは文化財と化している。例、ムカ˥セー　トゥー˥ル　˥シケーティル　ホンヌン˥　ユモーッ˥タ［mukase: tu:ru ʃɨke:tiru honnun jumo:tta］（昔は灯籠≪ランプ≫をつけて本も読まれた）。

トゥクガマチ［tʉkugamatʃi］（名）床框。床の間の鴨居と敷居にある横木。クル˥キー［kuruki:］（「黒木」の義、黒檀の木）の若木を使用した。トゥクブチ［tʉkubutʃi］ともいう。一種の装飾品である。例、トゥクガマチ˥　ピカラ˥シ　カザリバドゥ　ヤー˥ユンカイ˥ヤル［tʉkugamatʃi kadzaribadu ja:juŋ kaijaru］（床框を光らして飾ればこそ家も美しくなるというものだ）。

トゥクニ［tʉkuni］（名）仏壇。普通は奥行き３尺、間口６尺の大きさに作る。高さ約80センチの所から段を作り、３段にして、最上段に位牌（イーパイ［ʔi:pai］）を安置し、両側にパナ˥イキ［panaiki］（花活）を置く。その下の段には、コーロ［ko:ro］（香炉）を置く。下段には供物（シキムヌ［ʃɨkimunu］を供える。例、トゥクニヌ˥　ウヤプス˥ン　˥マイナー　ティー˥　ッサイ˥リ［tʉkuninu ʔujapʉsum maina: ti: ssairi］（仏壇の先祖の前に合掌しなさい）。

トゥクブチ［tʉkubutʃi］（名）「床縁」の義。床の間の前端にある装飾用の横木。黒檀の木を使うのを常とした。トゥクガマチ［tʉku-gamatʃi］（床框）に同じ。黒檀がない場合は、キャーンギ［kja:ŋgi］（槇、イヌマキ）などの化粧木を使った。例、トゥクブチヌ˥　クル˥キーシ　サンシン˥　スク˥リ　スコー˥レーヌ　ナールン˥ダー［tʉkubutʃinu kuruki:ʃi sanʃin sʉkuri sʉko:re:nu na:run da:］（床縁の黒檀で三味線を作ってあるが、よく鳴るよ）。

Hosei University Repository

トゥダ˥ナ [tudana]（名）、「戸棚」の義か。オシイレの下半分に引き戸を入れて、神行事、仏事等に用いる酒器や什器類を収納しておく所。サキクビン〔sąki-kubiŋ〕（酒瓶）、サキスッカー［sąkisukka:］（酒急須）、サカシキ［sąkaʃi̯ki］（盃、酒盃の義か）、カン˥ビン［kambiŋ］（燗瓶）、カザリクビン［kadzari-kubiŋ］（「飾瓶」の義か。白磁製の大型燗瓶。錫製のものもある）などを収納、保管しておくのに利用していた。

トゥル˥クビ [turukubi]（名）「取り壁」の義か。茅で戸を作り、取り外し式にした戸。茅を約5センチの厚さにして、竹やススキをあじろに編んだもので挟み、桟をわたして、両側から強く締めて戸の形に仕上げたもの。取りはずし式の戸で、雨戸をひくようなものではない。両手で支え持って、開閉した。例、トゥル˥クビ　スク˥リ　タティ˥リ［turukubi　sु̱kuri　tą̱tiri］（トゥル壁を作って立てなさい）。

トゥズムン [tudzumuŋ]（動）終える。完結する。完了する。トゥズマヌ［tudzumanu］（終えない）、トゥズミティ［tudzumiti］（終えて）、トゥズミン˥ギサン［tudzumiŋgisaŋ］（終えそうだ）、トゥズム˥カー［tudzumuka:］（終えたら）。例、クヌ　シグトゥ˥　トゥズミティル˥メー　フカ˥ヌ　シグトー　ティーカキラリ˥ル［kunu　ʃigutu　tudzumitiru　me:　Φु̱kanu　ʃiguto:　ti:kakirariru］（この仕事を終えてから、他の仕事は手がけられるというものだ）。

トゥマルン [tumaruŋ]（動）泊る。旅先きの宿に宿泊する。鳩間島の人は田地耕作のため、西表島北岸の田小屋に四、五日の泊りがけで耕作した。トゥマラヌ［tumaranu］（泊らない）、トゥマリティ［tumariti］（泊って）、トゥマリ˥プサン［tumaripु̱saŋ］（泊りたい）、例、クヌ　タベー　パイ˥タナー　トゥマラン　ドー˥シ　ピームドゥル　スー［kunu　tabe:　paitana:　tumarando:ʃi　pi:muduru　su:］（今度の旅は南方端≪西表北岸≫に泊らないで、日帰りする）。

トゥルヌ˥・ヤー [turunu-ja:]（名）、「鳥の家」の義。鶏舎のこと。鶏は普通、放し飼いにされていたが、鶏の容姿で、どの家の鶏かが見分けられた。鶏舎のない家の鶏は、庭木や屋敷林の樹上にとまって寝るので、木の枝には鶏糞が溜っていて不潔であった。子供が知らずにその木の下を通ると、タイワン˥ボー［taiwambo:］（頭髪の毛根部に白癬のように発症する皮膚病）に罹ると言われていた。鶏舎は、中が約半間、長さが約一間、高さが約5尺程度の小屋。内部は、二段、三段に竹の棚をかけて作り、止まり木にした。下段の奥には藁で巣を作っておくと、それに産卵した。地面に作った巣は、産卵後、卵を孵化させ、雛を育てるのに用いた。早朝、小屋の戸を開けると鶏は舎外に出て餌を求め、夕刻には自然に小屋に帰って寝た。庭先きで籾摺りをしたり、米搗きをすると、砕米を啄みに鶏が集まってきた。籾を日干しにしたり、豆類を日干しにする際にも、それを啄みに集まるので、鶏を追い払うのに苦労させられた。鶏舎の鶏は、夜中の3時頃から鳴きはじめる。最初の鶏鳴は、イチバン˥・ドゥル［ʔitʃiban-duru］（一番鶏（ドリ））といい、順次、ニーバ˥ン・ドゥ

Hosei University Repository

ル［niːban-duru］（二番鶏（ドリ））、サンバン˥・ドゥル［samban-duru］（三番鶏）といった。島では、一番鶏が鳴いたら、悪霊や魑魅魍魎の類は活動を停止すると信じられていた。子供が夜中に目覚めると、暗闇の恐怖から逃れるために、一番鶏の鳴くのを待ち続けた。一番鶏の鶏鳴を確認すると、やっと安心して寝つくことができた。一番鶏が鳴いた後は夜中に使に出されても、怖いことはなかった。例、トゥルン˥・ヤーナ　トゥルヌ　コー˥マ　˥ナシシケー［turun-jaːna　turunu　koːma　naʃiʃiike:］（鶏舎に鶏が卵を産んである）。

トー˥フパク［toːΦu̯-pa̯ku］（名）「豆腐箱」の義。豆腐を作る際、箱型に入れて水分をきり、固めるのに用いるもの。幅約12センチ、長さ約20センチ、深さ約12センチの木製の箱。この箱の内側に綿布を敷き、煮たった豆腐汁を入れて蓋をし、重石をかけて押し、水分を切って固めるのに用いる。例、トーフ˥パクナ　トー˥フ　シミティ　カタミラン˥ノーレー［toːΦu̯pa̯kuna　toːΦu　ʃimiti　ka̯tamiranno:re:］（豆腐箱に豆腐を入れて固めないか≪そうしてくれよ≫）。

˥ドブ［dobu］（名）汚水の溜っている所。台所の流しの水が溜っている所。排水溝などに下水が溜っている所。屋敷内では西北方などに穴を掘って下水を溜めてある家もあった。例、˥ドブナー　アウバイヌ˥　シディティ　ンカーラヌ˥［dobunaː　ʔaubainu　ʃiditi　ʔŋkaːranu］（ドブに青蠅が発生して手がつけられない）。

ナーブ˥ク［naːbuku］（名）縄箱。漁師が出漁するに際して、釣り針や釣り糸の漁具を必要な分と、その予備を縄箱の中蓋に揃えて、底の方にはマッチ、タバコ等貴重品を入れて持参する箱。大きなナーブ˥クには、縦約50センチ、横約60センチ、深さ約40センチのものがあり、これには衣類まで収納されていた。小さなナーブクは、縦約25センチ、横約20センチ、深さ約12センチ程の小箱であった。これをナーブコー˥マといった。

ナー˥ムス［naːmusu］（名）「長筵」の義。幅３尺、長さ９尺ほどの筵。普通は長さ６尺程度であるが、六畳の座敷に敷くために長くしたもの。三枚続きになっていて、折り畳んで収納する。トゥーシ［tuːʃi］（縁側）などに敷くのは、幅３尺に、長さ９尺程のものがよく使われる。例、˥マンタヌ　˥インナー　ナー˥ムス　シキ˥バ［mantanu　ʔinnaː　naːmusu　ʃi̯kiba］（前方の縁に、長筵を敷きなさいよ）。

ナーラ˥シ［naːraʃi］（名）軒に作業衣類を吊すために作った所。ハギバラー［hagibaraː］の間に横木をわたして、農作業や漁業用の衣類を掛けるのに用いたもの。サン˥ヌパーカドゥ［sannupaː-kadu］（西南の角）や家の東側に作って、網などを干すのにも用いた。例、˥マンタヌ　ナーラ˥シナー　ユグリキン˥　サイシキ［mantana　naːraʃinaː　jugurikin　saiʃi̯ki］（前方のナーラシに汚れた作業着を掛けておきなさい）。

ナカグス˥ク［nakagusu̯ku］（名）「中石垣」の義か。ウブ˥ヤー［ʔubujaː］（母屋）とペーラ˥フチ［peːraΦu̯tʃi］（門、「入り口」の義）の中間にある石垣。目隠し用に積んである。門より内側へ向って右側は上手（東）、左側は下手（西）となる。祝儀の際の客人は上手

Hosei University Repository

より家に入り、親しい人は、普通は下手より出入りした。不祝儀や法事の際も下手より出入りしていたが、今は忘れられている。ピンプン［pimpuŋ］ともいうが、借用語であろう。普通は長さ約4メートル、高さ約2メートル、幅約50センチに積む。両側は石を組んで積み、ナカフクル［nakaΦu̥kuru］（「中袋」の義か。中央部）には小石を詰め、組み石の隙間を埋め、石垣を固めるようにする。ナカグスクの内側の石垣の付け根に、パナギ［panagi］（「花木」の義、クロトン類）を植え、トゥラヌ・ズー［turanu-dzu:］（とらのを）を植えて、シキダチ・ズングニチ［ʃi̥kidatʃi-dzuŋgunitʃi］（朔日・十五日）の朝には床の間の神前や仏壇の仏前に花木を生け、サード［sa:do］（茶湯）を供えた。例、イツァンパイキーヌ　パーヤ　ザートゥクナー　パナゲーヤ　トゥクニナ　イキリ［ʔitsampai-ki:nu　pa:ja　dza:tukuna:　panage:ja　tu̥kunina:　ʔikiri］（榊の葉は床の間に、花木≪クロトン≫は仏壇に活けなさい）。

ナカザ［nakadza］（名）台所の土間。三番座とカマチ［kamatʃi］（竈）の間に設けられた土間のこと。農家では畑から帰って来て着替える間もなく台所作業にとりかからなければならないので、土間の方が便利であった。農家の女は、下駄を履いて、板の間へ上ったり、土間へ下りたりする暇はなかった。例、ッファイグル　ナカザナ　ウタシ　パニポーリ　シラーシ　シケー［ffaiguru　nakadzana　ʔutaʃi　panipo:ri　ʃira:ʃi　ʃi̥ke:］（食べ残した残飯を土間に落して、散乱させて、散らかしてある）。

ナカザ（土間）は、母屋の西側に約1間幅の張り出し（スイヤー［suija:］≪添え出し≫の義か）を作り、板壁を張り、土の竈を作って、三番座の床との間を土間にするのが普通であった。ナガザに塵埃が散乱していると、その家の娘の躾が悪いといわれていた。

ナカバラー［nakabara:］（名）「中柱」の義、大黒柱のこと。イチバンザー［ʔitʃibandza:］（一番座）とニーバンザー［ni:bandza:］（二番座）の境に立つ柱。普通はキャーギ［kja:ŋgi］（イヌマキ、槇）などの最高級の材木を使用することを誇りとした。ドゥスヌ［dusunu］（タイワンオガタマノキ）、イゾイキー［ʔidzoi-ki:］（モクコク）などの大木が使われることもあった。例、ヤーヌ　ナカバラー　ヌーキー　シゥカウタカヤー［ja:nu　nakabara:　nu:ki:　si̥kautakaja:］（家の中柱には、何という木を使ったかねえ）。

ナカフタ［nakaΦu̥ta］（名）「中蓋」の義か。本蓋の下におく芭蕉の葉やクバの葉のこと。おとし蓋の一種か。芋をふかしたり、煮しめものを炊く際に用いた。蒸しものの場合はナカフタをよく用いたものである。例、シミウン　バカス　ピンマー　ナカフタ　イリティル　バカソーッタ　ナー　メー［ʃimium　bakasu　pimma:　nakaΦu̥ta　ʔiritiru　bakaso:tta　na:　me:］（煮しめいもを煮る際にはナカフタを入れて炊かれましたねえ、もう）。

ナカヤドゥ［nakajadu］（名）「中戸」の義か。一番座や二番座の仕切りに立てる板張りの戸。襖の代りに用いられていた。ソージ［so:dʒi］（障子）をたてる家は少なかった。例、

Hosei University Repository

ナカ˥ヤドー　ムール　パンツァシティ˥　ザー　ピスミラン˥ノーレー［nakajado: mu:ru pantsaʃi̥ti pi̥sumiranno:re:］（中戸≪内戸≫みんなをはずして、座敷を広めないか）。

ニーバン˥ザ［ni:bandza］（名）「二番座」の義。戸主夫婦のニビシキニ［nibiʃikini］（寝室、寝所）となる所。普通、この部屋にトゥクニ［tu̥kuni］（仏壇）がしつらえられる。一番座や三番座とは、ナカ˥ヤドゥ［nakajadu］（中戸、板戸）で仕切ってある。法事や仏事に関する行事は、この部屋から西側の部屋を使ってなされるる。トゥクニの下の空間を利用した押入、物置きを、ダン˥トゥク［dantu̥ku］という。

˥ニカイヤー［nikai-ja:］（名）「二階家」の義。二階建のこと。鳩間島には二階建の家はなかった。鰹節工場のバイカン˥・ヤー［baikan-ja:］（「焙乾家」の義）は切妻屋根の構造で、中二階、屋根裏の三段に仕切ってあった。最上段まであげて焙乾したものを˥ピギティ［pigiti］（剝いで、削って）出荷した。例、イサナケー　パラバ˥ル　˥ニカイヤーヤ　ミラ˥リ［ʔisanake:　parabaru　nikai-ja:ja　mirari］（石垣島へ行ったら二階家は見れる）。

ニビパンツァスン［nibipantsasuŋ］（動）ねそびれる。例、ユーキ˥ヌ　シジキティ　キュー˥ヤ　ニビサーリル˥ティ　˥ウムイ　ベータ˥ヌ　プスヌ　オー˥リ　ニビパンツァシナー˥ヌ［ju:kinu　ʃidʒikiti　kju:ja　nibisa:riruti　ʔumui　be:tanu　pu̥sunu　ʔo:ri　nibipantsaʃi　na:nu］（夜更しが続いて、今日は寝ようと思っていたのに、人が来られて、みすみす寝そびれてしまったよ）。

ニンゴー˥ビン［niŋgo:-biŋ］（名）「二合瓶」の義。二合入りの瓶。酒瓶のこと。例、ニンゴー˥ビン　プスッ˥ク　カーニ˥テー　˥ムティ　パララ˥ン　˥ヨー［niŋgo:bim　pu̥sukku　ka:nite:　muti　pararan　jo:］（二合瓶一個だけとは持って行けないよ）。ニンゴー˥・クビン［niŋgo:-kubiŋ］（二合瓶）ともいう。

ヌーヌ・マッファ［nu:nu-maffa］（名）布製の枕。「布枕」の義。布袋に籾殻を入れたり、小豆を入れたりして作った枕。ハイカラな枕として若い男女に好まれたが、一般の家底では木枕が愛用されていた。例、ヌーヌマッファー˥　バカー˥ムンドゥ　シタル　ウイ˥プソー　ソーラン˥セン［nu:numaffa:　baka:-mundu　ʃi̥taru　ʔuipu̥so:　so:ranseŋ］（布枕は若者がしたのであって≪使ったのであって≫老い人はしなかった）。

ヌキ［nuki］（名）「貫き」の義。「貫き柱」のこと。柱と柱を貫き通して連結し、柱を固めるもの。幅11～12センチ。厚さ約3センチ、長さ約1間半の板状の材。瓦葺きの場合、壁板（ゴブ・イツァ［gobu-itsa］≪五分板≫）は、この「ヌキ」（貫き板）に釘を打ちつけて作った。例、ヤー˥ヌ　ヌキ　イリティ˥　ッサビ˥　ウティティ　シミ˥リ［ja:nu　nuki　ʔiriti　ssabi　ʔutiti　ʃimiri］（家の貫きを入れて、楔を打って締めなさい）。

ヌキ・ヤー［nuki-ja:］（名）「貫き屋」の義。アナ˥プリヤー［ʔanapuri-ja:］（穴掘り家）の対。角材に貫き穴を掘ったり、枘穴や枘を作って連結し、家を組み立てる方式で建築する

Hosei University Repository

家のこと。例、ワッ˥テヌ　プソー˥　ヌキヤー˥　スク˥ローツタティ　˥ミー　ツォー˥［wattenu　pu̥so:　nukija:　su̥kuro:ttati　mi:　tso:］（君の家の人は、貫き家を作られたそうだねえ。でしょう？）。

ヌシ˥トゥル［nuʃi̥turu］（名）語源不明。「乗せ取り」の義か。タキフンツァ˥［tḁki Φuntsa］を編む際、ユカム˥チ［jukamutʃi］（大曳）の下から竹を掛けて縄で締め、フン˥ツァ［Φuntsa］（床）が持ち上がらないようにしたもの。タキフンツァ（竹床）とヌシトゥルを要所要所で強く締めておくことが必要である。例、タキフンツァーヤ　ヌシ˥トゥルナ　˥シナ　˥カキティ　˥フミ　ヨー［tḁki Φuntsa:ja　nuʃi̥turuna　ʃina　kḁkiti　Φumi　jo:］（竹床はヌシトゥルに綱をかけて編みなさいよ）。

パイ［pai］（名）灰、カマチヌ・パイ［kamatʃinu-pai］（竈の灰）、ウールパイ［ʔu:rupai］（石灰）、アチ˥パイ［ʔatʃipai］（熱い灰）などがある。カラパイ［karapai］（乾燥した灰）ともいう。例、カラパイヌドゥ˥　カジン˥　トゥバサリティ˥　ミー˥ヌ　˥ナカーペー˥リ　ミツ˥ム　ナリ　ベ˥ー［karapainudu　kadʒin　tubasariti　mi:nu　naka:　pe:ri　mitsumu　nari　be:］（灰が風に飛ばされて目の中に入って目潰しになっている）。

˥バウ［bau］（名）「棒」の義。①木や竹の荷い棒のこと。②棒踊に用いる木製の武具。棒。③棒踊り。普通は˥カシンキー［kaʃiŋki:］（オキナワウラジロガシ）の若木で作っていた。てんびん棒や荷物運搬用の杁（おうこ）などの総称。豊年祭の棒踊りに対してもいう。例、パトゥマ˥ヌ　バウ˥ワー　イッケナ˥　ウムッ˥サン［pḁtumanu　bauwa:　ʔikkena　ʔumussaŋ］（鳩間の棒踊りは非常におもしろい）。

˥バウ　ウトゥン［bau　ʔutuŋ］（句）「棒を打つ」の義。「棒踊りをする」の意。豊年祭には奉納踊りとして、棒踊りが演じられていた。西村と東村に分れて競演した。西村では、サク˥ボー［sḁkubo:］、ルクサク˥・ボー［rukusaku-bo:］（六尺棒）、ナギナタ［naginata］（長刀）などが演じられた。東村の棒踊りは一般的に力強く、激しい動きが特徴で男性的であるのに対し、西村のそれは動きが柔かで、型を重視するものであった。

バキ˥チ［bakitʃi］（名）ばけつ。bucket の転訛したもの。アルミや鉄板などで作った水桶。普通は１斗入りで、円形。半円形の柄がついて、それに紐をつけて天秤棒で担ぐ。水を運ぶのに用いる。四角の１斗入り石油罐を利用したものは、バキチとはいわない。これは˥ガンガンタング［gaŋgaŋtaŋgu］という。例、バキ˥チナ　ミジ　マーシ˥クー［bakitʃina　midʒi　ma:ʃiku:］（バケツに水を入れて運んできなさい）。

ハギバラー［hagibara:］（名）「脛柱」の義か。軒下の柱のこと。ヌキヤー［nukija:］（貫き家）は、茅葺きでも瓦葺きでも、南側と東側に半間ほど軒を出すのが普通であった。その軒を支える柱をハギバラーという。ハギバラーを「脛柱」とすると、これは建築史の一面を照らし出す語となるであろう。竪穴式住居の屋根はテント型で、直接地面に落ちていたとされているが、これに、「脛」がつくと、切妻屋根の構造が成立するように思われる。

Hosei University Repository

パク [pa̯ku] (名) 箱。箱の総称。主として、杉板を利用して箱を作ることが多かった。杉板は本土より輸入された。ナーブ˥ク [na:buku] (縄箱)、ジブ˥ク [dʒibuku] (重箱) モミパク [momipaku] (籾箱) などがある。例、イサンケー˥ラ　シギイツァ　カイ˥キーティ　パク˥　スク˥ラ　ディ˥ー [ʔisaŋke:ra ʃigiitsa kaiki:ti pa̯ku su̯kura di:] (石垣島より杉板を買ってきて箱を作ろうよ)。

パク˥ジミ [pa̯kudʒimi] (名) 箱詰め。箱の中に物を詰めこむこと。大事なもの。貴重なものは箱に詰めて保管したり、輸送したりした。例、カン˥ネヌ　プソー　ヤーウツ˥リ　スン˥ティ　シー˥　ニーム˥チ　˥ナビ　˥カマ　マカ˥ルドングン　˥ドーレー　パク˥ジミ　シー˥　ス　コー˥　レー [kannenu pu̯so: ja:utsuri sunti ʃi: ni:mutʃi nabi kama makarudoŋgun do:re: pakudʒimi ʃi: su̯ko:re:] (あの家の人は、家移り≪引っ越し≫するといって、荷物、鍋、釜、お碗などを箱詰めにしておいてあるよ)。

パク・マッファ [pa̯ku-maffa] (名) 箱枕。板で箱形の枕に作ったもの。縦約12センチ、横約18センチ、高さ約7センチの箱を作って枕としたもの。軽くて扱いやすいので老人たちに重宝された。例、パク・マッファー˥　ヨー　カニフンマー　ピッ˥チン　シゥカーンドー˥シ　スクル˥タ [pa̯kumaffa: jo: kaniΦum pittʃin si̯ka:ndo:ʃi su̯kuruta] (箱枕はねえ、鉄釘を一本も使わないで作ったものだ)。

パコー˥マ [pa̯ko:ma] (名) 小箱。小さな箱。コーブ˥ク [ko:buku] (香箱) やジン˥パク [dʒimpa̯ku] (銭箱) などは、小さな箱であった。例、ウブ˥パコーラ　パコー˥マー　ンベーマ˥ナー　˥バキ　イリリ˥バ [ʔubupa̯ko:ra pa̯ko:ma: ʔmbe:mana: baki ʔiririba] (大きな箱から小さな箱へ、少しずつ分けて入れなさいよ)。

ハシ˥ゴ [ha̯ʃigo] (名) 梯子。二本の棰の間に横木を渡して、それを踏み登って、高い所へ登る道具。普通は、幅約40センチ、長さ約4メートルの大きさに作る。使用する際にユクンツァ˥メー [jukuntsame:] (床下) より出して軒にかけ、屋根になかけて屋根葺きなどに使用した。例、アー˥ネーラ　ハシ˥ゴ　カリ˥クー [ʔa:ne:ra haʃigo kariku:] (東隣の家から梯子を借りてきなさい)。

パダ˥ムス [padamusu] (名)「肌筵」の義か。就寝の際に畳の上に敷く筵。上質の備後産の藺で編んだ莫蓙。直接肌に接触する筵であることから命名されたものであろう。普通は幅3尺、長さ6尺の筵であるが、長さ9尺で、二枚続きのものもある。6畳敷の筵は特に長いので、ナー˥ムス [na:musu] (長筵) という。例、パダ˥ムス　タン˥ガ　シク˥カー　˥ミサン [padamusu taŋga ʃi̯kuka: misaŋ] (肌筵だけ敷げはよい)。

ハチバン˥セン [ha̯tʃibanseŋ]「八番線」の義か。直径約7ミリ程度の針金。ワイヤーに用いる針金。長さ約30センチ程に切り、先端部を研いで銛に使った。それを3メートルほどの竹につけて、魚突き用の銛とした。例、ハチバン˥セン　˥キシティ　フチ˥　トゥイティ　ユイ˥　シキ˥ルカー　˥ユクン　ナリ˥スヨー [hatʃibanseŋ ki̯ʃiti Φu̯tʃi tuiti

Hosei University Repository

jui ʃi̯kiruka: jukun narisujo:] (八番線を切って、先端部（口）を研いで柄をつけると、銛になるよ)。

ハツリ [hą̯tsuri] (名) 樹木をはつること。山で材木を伐り、運び出した後、斧で軽く斜めに切りつけて、次に本格的に削り落して角材に仕上げていく。このように少しずつ削っていくことをいう。左足を丸太にかけ、右足で体重を支えながら、ヤマブーヿヌ [jamabu:nu] (山斧) で木の右側から切りこんでいき、10センチ間隔で斧を打ち込むと削りやすい。これを繰り返して角材に仕上げる。

ハツルン [hą̯tsuruŋ] (動) 山出しの材木を斧で削る。ハツラヌヿ [hą̯tsuranu] (削らない)、ハツヿリティ [hatsuriti] (削って)、ハツリヿプサン [hą̯tsuri-pusaŋ] (削りたい)、大工用語で、おそらく、家屋建築の技術が導入されたときに定着した語であろう。例、クヌキーヿヌ ピダリンヿカタ ンメーマヿ ハツヿリ ミーヿ [kunu ki:nu pidariŋkata ʔmme:ma hą̯tsuri mi:] (この木の左側の方を少し削ってごらん)。

ハナヿゴザ [hanagodza] (名) 花莫蓙。莫蓙の表に花柄のプリントのある筵。ビーヿグ [bi:gu] (備後藺) を細く裂いて、細い麻糸などで織りあげた筵。肌ざわりがよく、夏場は、この筵を敷いて、その上に横になると涼感があり、喜ばれたものである。畳が古くなると、花莫蓙を敷いて、畳の表がえの代りにした。例、タタミヌヿ フルヿミ ブンダヿ ハナヿゴザ シキヿバ [tą̯taminu Φurumi bunda hanagodza ʃi̯kiba] (畳が古くなっているので花莫蓙を敷きなさいよ)。

ヿパラー [para:] (名)「柱」の義。総称。一般称。ナカヿバラー [nakabara:] (「中柱」の義、大黒柱のこと)、ヿムヤーバラー [muja:bara:] (「母屋柱」の義。家の内部に立つ柱)、ハギバラー [hagibara:] (「脚柱」の義か。軒に立つ柱)。シティハギ [ʃi̯ti-hagi] (軒から更につき出した屋根の軒柱) などがある。例、パラーヿヌ ヿミー ピッヿキ [para:nu mi: pikki] (柱の枘穴をあけなさい)。例、ヤーヿヌ ヿパラ キジヿバ [ja:nu para: kidʒiba] (家の柱にする材木を削れよ)。

パラーヿヌ・アナ [para:nu-ʔana] (名)「柱の穴」の義。枘 (ほぞ) のこと。ヌキヤー [nukija:] (貫き家) を作る際、柱に穴を掘って柱と梁、桁材に連結する。その枘穴のこと。枘のことを、マラ [mara] ともいう。例、パラーヿヌ・アナ ピッキプスヿヌ タラーンバ テーヿナイ シーッフォーヿリ [para:nu-ana pikkipu̯su tara:mba te:nai ʃi:ffo:ri] (柱の枘穴をあける人手が足りないので、手伝をして下さい)。

バラフヿタジナ [baraΦu̯tadʒina] (名)「藁綱」の義。稲藁で綯う綱。綱の中で最も利用度が高い。ヤーフキヿジナ [ja:Φukidʒina] (家葺き綱) もバラフヿタジナであるし、日常生活のあらゆる面で、物を縛ったり、荷を運搬したりするのに用いる。昭和40年頃までは、稲作も行なわれていたので、稲藁は豊富にあった。例、バラフヿタジナ ヿナイティ カースンヿ [baraΦu̯tadʒinadʒina naiti ka:suŋ] (藁綱を綯って売る)。

Hosei University Repository

バラフ˥タポーキ [baraΦu̯tapo:ki]（名）稲藁箒。座敷用に作った箒で、稲藁の芯を抜いて、それを直径1センチほどに束ね、その束を扇形に編みあげて作ったもの。編みあげる縄は、アダナ˥シ・ジナ [ʔadanaʃi-dʒina] を用いた。ユー˥ル [ju:ru]（「より糸」の義か。細い縄のこと）の一種である。例、バラフ˥タ・ポーキシ　イチバン˥ザー　ポー˥キ [baraΦu̯tapo:kiʃi　ʔitʃibandza:　po:ki]（藁箒で一番座を掃け）。

˥パル [paru]（名）「針」の義か。竹製の矛。竹の先端を鋭利に削り、穴をあけて綱を通すことができるようにしたもの。縫い針の形状を示すことから命名されたものであろう。茅葺き屋根を葺く際、内側に居るパルシキ˥プス [paruʃi̯ki-pu̯su]（針突き人）が竹製のパルを屋根の上へ突き出して、ヤーフキ˥・プス [ja:Φu̯ki-pu̯su]（屋根葺き人）からシミ˥ナー [ʃimina:]（締め縄）をパル˥ヌ・ミー [parunu-mi:]（針の目≪穴≫）に貫いて貫い、それを引いてタル˥キ [taruki]（垂木）に掛け、再びパル [paru] を屋根の上へ突き出して、シミナーを屋根葺き人に届けるのに用いる道具。例、˥パル　スク˥　ピンマー　˥ユー　アイ˥ジ　セー˥ティ　シカン˥カー　ナラン˥ダー [paru su̯ku　pimma:　ju:　ʔaidʒi　se:ti　ʃi̯kaŋka:　naranda:]（家葺きの竹針を突く際は、よく合図をしながら突きささないといけないよ）。

パルシキ˥・プス [paruʃi̯ki-pu̯su]（名）「針突き人」の義。茅葺き屋根を葺く際、内側にいて、˥パル [paru]（竹製の矛）を屋根の上に突き刺し、パル˥ヌ・ミー [parunu-mi:]（矛の穴）に締め縄を貫いてもらい、引き出して縄をタル˥キ（垂木）に掛けて再び屋根の上の屋根葺き人へもどす役の人。勘の鈍い人がこの役を受けもつと、屋根葺きは非常に危険で、作業もはかどらないといわれている。

パル˥ヌ・ミー [parunu-mi:]（名）「針の目」の義。屋根葺き矛の穴のこと。この穴に、シミ˥ナー [ʃimina:]（締め縄）を通して引き抜き、タルキに掛けて屋根葺き人の所へ突きかえすのに用いる。縫い針の穴にも同様にいう。例、パル˥ヌ・ミーナ　シミ˥ナー　ヌキティ˥　ピキシキ˥バ [parunu-mi:na　ʃimina:　nukiti　pi̯kiʃikiba]（「針の穴」≪屋根葺き矛の穴≫に締め縄を貫き通して、引っぱりなさいよ）。

ハン˥ダイ [handai]（名）飯台。新しく共通語より借用された語。普通は、幅約70センチ、長さ約1メートルほどの飯台に、約30センチほどの高さの脚が付いていた。飯台の中央には大皿に御数を盛り、イモの煮たものなども竹かごに盛って飯台の中央に置き、各自欲しいものを取って食べた。御飯と御汁だけは各自の前に配膳され、カティ˥ムヌ [katimunu]（かて物、お数）は共通の皿から取って食べた。

˥ピー [pi:]（名）火。「明り」の意はない。「明り」は、ガル [garu] という。˥ピー　ケーシ [pi:　ke:ʃi]（火を消しなさい）˥ピー　タシキ [pi:　taʃi̯ki]（火を焚きつけなさい）。ピー　ヌクミ [pi:　nukumi]（火にあたって体を温めなさい）。ピー˥ヌ　ムイルン [pi:nu muiruŋ]（火が燃える）。アガピー [ʔagapi:]（真赤な火）。

Hosei University Repository

˥ピー［pi:］（名）「火事」のこと。原義は「火」である。昔は火事が出ると、ピードーピードー（火事だ!!火事だ!!）といって大声をあげて村中にふれまわった。人々は手に手に桶を持って集まり、浜に下りて海水を汲み、それを手わたしで運び、水をかけて消火した。戦後45年間で火事が起きたのは二度だけである。例、パトゥ˥マナテー　ナン˥ゾーピー˥ヤ　ンジラン˥セン［patumanate:　nandzo:　pi:ja　ʔndʒiranseŋ］（鳩間では火事はあまり出なかった）。

˥ビー［bi:］（名）樋。屋根に降る雨水を受けて水タンクに天水を通すためにかけた竹の半筒状のもの。直径約10センチの大竹の筒を半分に割ったものも利用した。それを支えるために軒から出した支柱を、˥ティー［ti:］（「手」の義か。）という。例、カジヌ˥　フクカー　ナーラシ˥ヌ　˥ビー　パンツァシ˥ヨー［kadʒinu　Φu̥kuka:　na:raʃinu　bi:　pantsaʃijo:］（台風が吹いたら軒先の樋をはずしなさいねえ）。

˥ビー［bi:］（名）藺草。畳の表を作るのに用いる。沖縄本島産の藺草で作った畳の表や本土産のものを輸入していた。西表で栽培された藺草は、サー˥ラ［sa:ra］といって、それで作った筵、サーラ˥ムス［sa:ra-musu］は三番座や炊事場の縁側などに敷いた。ビーグ˥ムス［bi:gu-musu］（備後表で作った筵）は最高級の筵として重宝された。例、パイタ˥ナー　ビー˥ヤ　イバンシェン［paitana:　bi:ja　ʔibanʃeŋ］（西表島では藺草は植えなかった）。

ピー˥パサン［pi:pḁsaŋ］（名）火箸。「火挟み」の義か。二本の鉄線を長さ約20センチほどに切って、頭部を円環で連結したもの。竈の中から、ウキル［ʔukiru］（燠火）を挟み出して火鉢に移すのに用いられた。例、ピー˥パサンシ　カマチフチヌ˥　ウキル˥　パサ˥ミクー［pi:pasanʃi　kamatʃiΦu̥tʃinu　ʔukiru　pḁsamiku:］（「火挟み」火箸で竈の燠火を挟んでもってきなさい）。

ピサ˥ビ［pisabi］（名）「火錆」の義か。鍋底に付着する煤。「竈黒」と同じ。ナビ˥ヌ　ピサビ［nabinu　pisabi］（鍋の煤）。鍋底は、薪を燃やして炊飯するために、煤がたくさん付着する。それは熱効率を妨げるので、時々軽石などで擦って落したものである。例、ナビ˥ヌ　スクヌ˥　ピサ˥ビ　カラ˥イシシ　˥ッシ　ウタ˥シ［nabinu　su̥kunu　pi̥sabi　karaiʃiʃi　ʃʃi　ʔutaʃi］（鍋の底の煤を軽石で擦って落しなさい）。

ビダーシキビリ［bida:ʃi̥kibiri］（名）べたっと坐ること。特に女性が床の上に、または地面にべたっと尻をついて坐ること。このように坐ると、次の動作がとりにくいので、働き者の農家の女性の嫌う坐り方である。この坐り方は、怠け者のシンボルであったので、農家の娘たちは親からこの坐り方をきつく窘められた。例、ビダーシキビリ　スー　ッファー˥　スブットゥ［bida:ʃi̥kibiri　su:　ffa:　subuttu］（ビダーシキ坐りをする子は怠け者だ）。

ピダリ˥ジナ［pidaridʒina］（名）左縄、「左綱」の義。左綯いにする縄。左縄は悪霊を祓う力があると信じられている。神事を行なう所では、左縄を綯って注連縄にし、それを張り

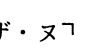
Hosei University Repository

めぐらして神聖な場所を確保した。例、パトゥ˥マナテー　ヨー˥　ピダリ˥ジナー　ヌキ˥ムヌティ　アザリブー˥［pa̧tumanate:　jo:　pidaridʒina:　nukimunuti　ʔadzaribu:］（鳩間ではねえ、左縄は、悪霊祓いになるといわれている）。

ビチ˥ル［bitʃiru］（名）屋敷の東側の庭の一角に、約一坪ほどの面積を聖域として石垣で囲い、信仰している所。シトゥッ˥チ［ʃi̧tuttʃi］（そてつ）や、イツァン˥パイキー［ʔitsampai-ki:］（榊）、パナ˥ギ［panagi］（「花木」の義か。クロトン）などを植えてあり、山石が据えつけてある。˥ウブシケー［ʔubuʃi̧ke:］（大城家）、ヨー˥カヤー［jo:kaja:］（西原家）、クシケー［kuʃi̧ke:］（小底家）のビチルは有名である。ヨー˥カヤーのビチ˥ルについては、「昔、ウイヌ˥ウガン［ʔuinu-ʔugaŋ］（友利御嶽）でユーニンガイ［ju:niŋgai］をすませると、サカサ［sa̧kasa］（ツカサ。坐女、神女）たち、カン˥プス［kampu̧su］（神人、ティジリビ）たちがヨーカヤーのビチルに集って神遊びをしてアマイヨーッ˥タ（歓えられた）、三日三晩、神遊びをされた」という口碑が残っている。そこからウイヌ˥ウガンへ通じる神の道が通じていて、セヂ高い所であるといわれている。

ピバチ［pibatʃi］（名）火鉢。灰を入れて、炭火をおこし暖をとるのに用いる陶製の器。広口の甕状の器。一般的には直径約25センチ、深さ約20センチ程度の広口の壺型をした器であった。青磁製のものも輸入されていた。旧暦の１～２月頃に用いる程度であった。木製のものは、縦約50センチ、横約70センチ程の箱に30センチ四方の灰を入れる部分を作って炭火をおこせるようにしたものである。

ピビザヌ˥・ヤー［pibidzanu-ja:］（名）山羊小屋。家の裏、または北西部の隅に、２坪ほどの小屋を作って山羊を飼育した。山羊汁は蓬を入れて炊き、冷え症に効くと言って食した。各家庭では２～３頭の山羊を飼育していた。畑の芋かずらや桑の葉などを刈りこんで飼料として与えた。山羊小屋から出る下肥は畚で担いで畑に入れた。例、ピビザ・ヌ˥　ッサカリ˥クー［pibidzanu　ssa　kariku:］（山羊の草を刈りてきなさい）。

ヒラクギ［çirakugi］（名）「平釘」の義。ティンマ［timma］（伝馬船）を造る際に、板と板を接ぎ合わせるのに用いる釘。幅約１センチ、厚さ約３ミリ、長さ約12センチの  型をした釘。この釘を打ちこむ際には、マキワラ［makiwara］（杉の皮の繊維を十分に乾燥させたもの）をまきつけて打った。例、ティンマ˥ナ　シュカウ　フンマー˥　ヒラクギ˥ティ　アズ［timmana　si̧kau　Φumma:　çirakugiti　ʔadzu］（天馬船に使う釘は平釘という）。

ヒラ・ヤー［çira-ja:］（名）平家。一階建ての家のこと。鳩間島には二階建の家はない。瓦葺きや茅葺きの一階建ての家の総称。ヌキヤー（貫き家）は一般に寄せ棟造りであった。ユーピサ・ヤー［ju:pi̧sa-ja:］（四つの「平（ひら）」（屋根）のある家、寄せ棟造り）やフタピサヤー［Φu̧tapi̧sa-ja:］（二つの「平（ひら）」のある家、切り妻屋根造りの家）ともいう。パトゥ˥マナー　ヒラヤー　タンガ˥ル　アル［pa̧tumana:　çiraja:　taŋgaru　ʔaru］（鳩間には平

Hosei University Repository

家だけがある<平家しかない>)。

ビリダイ [biridai] (名)「座り台」の義。椅子のこと。学校教育の普及によって、背もたれのあるものに「椅子」といい、それ以外の、物を載せたり飾ったりするに用いる器具を、˥ダイ [dai] という傾向がある。老年層は「椅子」をビリダイという。例、ビリダイ　サンギ˥・キー　ビリバ˥　ミサムヌ [biridai　saŋgi-ki:　biriba　misamunu] (椅子≪座り台≫を引っぱってきて座ればよいのに)。

ビン˥ダライ [bindarai] (名)「びんた (鬢) 洗い」の義か。洗面器のこと。直径約25センチ、深さ約10センチほどの板製の桶。戦後、金属製の洗面器や、プラスチック製の洗面器が出まわるようになった。例、ビンダライ˥ヌ　ミジ˥シ　ウム˥ティ　˥シミティ　ウヌ˥　ヌカルシ　ティー˥・パン　アライ [bindarai-nu　midʒiʃi　ʔumuti　ʃimiti　ʔunu　nukaruʃi　ti:-pan　ʔarai] (洗面器の水で面(オモテ)≪顔≫を洗って、その残りで手足を洗いなさい)。

フー˥カラジナ [Φu:karadʒina] (名) 棕梠縄。棕梠の幹頂部の枝の分出した所に、黒色の強い繊維がからみついている。その繊維をとって綯った綱がフー˥カラジナである。雨や風に強く、茅葺き屋根の甍を締める際にこの綱を用いる。また、この綱を3本かけ合わせて、イダフニ (板舟) のアンカーロープに利用したりした。牛の鼻綱にもこれを用いた。例、フー˥カラジナ　˥ヌイバ [Φu:karadʒina　nuiba] (フーカラ綱を綯いなさいよ)。

フー˥タイ [Φu:tai] (名) 桁材の一種。屋根の勾配を考えて、湾曲した大木を桁材に利用したもの。フクン [Φu̯kuŋ] (福木) やドゥス˥ヌ [dusunu] (モクレン科、タイワンオガタマノキ) などがよく利用されていた。例、クヌ˥　マガ˥レー　シゥカ˥バラーナ　アティティ　フー˥タイ　シー˥ヨー [kunu　magare:　sīkabara:na　ʔatiti　Φu:tai　ʃi:jo:] (この曲った木は、つか柱に合わせてフータイにしなさいね)。

フーン [Φu:ŋ] (他動) ①閉じる。しめる。戸をしめる。②「目を閉じる」には用いない。˥ミー　ッサウン [mi:　ssauŋ] (目を閉じる) のようにいう。ホーヌ [ho:nu] (しめない。戸をしめない)。フイティ [Φuiti] (戸をしめて)、フイ˥プサン [Φui-pu̯saŋ] (戸をしめたい)、フータン [Φu:taŋ] (戸をしめた)。例、アミ˥ヌ　フイ　ウチ˥アミ　スーバ　˥ヤドゥ　フイ [ʔaminu　Φui　ʔutʃiami　su:ba　jadu　Φui] (雨が降って、うちこむので、戸をしめなさい)。

フクイ [Φu̯kui] (名) ほこり (埃)。細かな塵。砂塵。肉眼で見えないような塵埃。フクイ˥　カブン [Φu̯kui　kabuŋ] (ほこりをかぶる) 例、˥アミーン　ホー˥ムティ　カラフキスンダ˥　フクイヌ˥　トゥビ˥キー　˥ミー　アキララヌ˥ [ʔami:n　ho:muti　karaΦukisunda　Φu̯kuinu　tubiki:　mi:　ʔakiraranu] (雨も降らないで、から吹きするので、ほこりが飛んできて、目を開けることができない)。

Hosei University Repository

フクジ［Φu̯kudʒi］（名）塵、ごみ。主として木の葉などの塵をいう。島では枯れ葉などのフクジを集めて堆肥にし、畑に入れた。例，タイフー˥ヌ　フク˥ター　ミナカ˥ヌ　キーヌ˥パー　ムール　アイ˥　ウティティ　フク˥ジ　˥ナリ　ベ˥ー［tai Φu:nu　Φu̯kuta:　minakanu　ki:nupa:　mu:ru　ʔaiutiti　Φu̯kudʒi　nari　be:］（台風が吹いたので、庭の木の葉がみんな落ちて塵になっている）

フスマ［Φu̯suma］（名）襖。フスマ˥ヌ・サン［Φu̯sumanu-saŋ］（襖の桟。木の骨組み）に新聞紙を張り、その上に障子紙を張って仕上げていた。フスマヌ˥・サン（襖の桟）に対して、障子の場合は、ソージヌ˥・プニ［so:dʒinu-puni］（障子の骨）ともソージヌ˥サン［so:dʒinu-saŋ］ともいっていた。例，フスマヌ˥　ヤレーントン　カビ˥シ　クー˥シ［Φu̯sumanu　jare:ntoŋ　kabiʃi　ku:ʃi］（襖の破れたところを紙で補修しなさい）。

プスマニビ［pu̯sumanibi］（名）昼寝。「昼間寝」の義。夏の盛りの、マープスマ［ma:pu̯suma］（真昼間）には、暑くて畑仕事が不可能であるから、老人たちの中には、ヨーコイ［jo:koi］（「夕陰」の義か。午後3時頃）になるまで、風通しのよい木の下や家の縁側などで、よく昼寝をする人がいた。例，˥ドゥク　プスマニビ　スー˥　カー　クンキブラーリ　シース［duku　pu̯sumanibi　su:ka:　kuŋkibura:ri　ʃi:su］（あんまり昼寝をするとふらふらするよ）

フタ［Φu̯ta］（名）蓋。ナビ˥ヌフタ［nabinu-Φu̯ta］（鍋の蓋）、カミ˥ヌフタ［kaminu-Φu̯ta］（甕の蓋）、パクヌフタ［pa̯kunuΦu̯ta］（箱の蓋）等がある。˥ウン［ʔuŋ］（いも）をふかす際に、いもの上に芭蕉の葉などを覆いかぶせて、その上から本蓋を被せるが、その本蓋の下に置くものを、ナカ˥フタ［nakaΦu̯ta］（中蓋）という。例，ウン˥マー　ナカ˥フタ　イルバル　ネーシヤッ˥サ［ʔumma:　nakaΦu̯ta　ʔirubaru　ne:ʃijassa］（いもは中蓋を入れた方が煮やすい）

フチ˥マルン［Φu̯tʃimaruŋ］（動、自）燻る。燃料が湿って、燃えないで煙がふき出る。煙だけがもうもうと出る。フチマラ˥ヌ［Φu̯tʃimaranu］（燻らない）、フチ˥マリティ［Φu̯tʃimariti］（燻って）、フチ˥マルカー［Φu̯tʃimaraka:］（燻ると）。例，クヌ˥　タム˥ノーイコーラ　モーサバン˥　フチ˥マリティ　ムイラヌ˥［kunu　tamuno:　ʔiko:ra　mo:saban　Φu̯tʃimariti　muiranu］（この薪はいくら燃しても燻って燃えない）

フトゥミカザ［Φu̯tumikadza］（名）部屋の中が湿気と高温のために放つ臭気。畳などが古くなり、湿気を含むようになって、夏場になるとフトゥミカザを放つようになる。「火（ほ）とめき香」の音韻変化した形か。例、ッフ˥ヤー　˥ナリティ　ヤドゥ˥フジ　シー˥　シケーティ　アミ˥ヌ　フー˥ター　フトゥミカザ　シース［ffuja:　nariti　jadu Φudʒi　ʃi:　ʃi̯ke:ti　ʔaminu　Φu:ta　Φu̯tumikadza　ʃi:su（古い家になって、戸をしめきってあるので、雨が降るとフトゥミカザがする）

フミダイ［Φumidai］（名）「踏み台」の義。高い所にあるものを取る際に、台の上に立って

Hosei University Repository

取ったり、作業をしたりするが、その場合の足場となる台をいう。足継ぎ。共通語からの借用語。例，タキ┐ヌ　ピコー┐ンダー　フミダイ┐ナー　ヌーリ┐　タティバ［tąkinu pi̯ko:nda　Φumidaina:　nu:ri　tątiba］（身長が低いので、踏み台に登って立ちなさいよ）

フヤ［Φuja］（名）「火屋」の義。ランプの火をおおうガラス製の円筒。火を覆う部分が最も大きく、煤のつく部分は最も細くなっている。瓢箪型をしたガラス製の円筒。子供たちは、小さな手を入れて塵紙などで煤を拭いた。例、┐ランプヌ　フヤヌ┐　ピサ┐ビ　ッスリ┐　ウタ┐シ［rampunu　Φujanu　pi̯sabi　ssuri　ʔutaʃi］（ランプの火屋の煤を拭いて落としなさい）

フルマイー┐ル［Φurumai:ru］（名）「車錐」の義か。錐の柄の下に重り（錘）をつけ、錐の柄の中に横棒を貫き通し、その両端から縄を錐の柄の先端部に通して結え、縄を巻いて下へ押すと錐が回転する仕掛けとなっているもの。錘が惰力をつける役割を果たす。例、フルマイー┐ルシ　ピッ┐クカー　ティー┐ユン　ブガラ┐ヌ［Φurumai:ruʃi　pikkuka:　ti:jum　bugaranu］（車錐で穴をあけると、手を疲れない）

ブン［buŋ］（動）居る。～ている。ブラーヌ［bura:nu］（居ない）、ブリティ［buriti］（居て）、ブー┐カー［bu:ka:］（いたら）ベー┐カー［be:ka:］（いたら）、例、クヌ┐　ヤーナタール　ブー┐カヤー、アーイ┐　ターン┐　ブラーヌ┐［kunu　ja:na　ta:ru　bu:kaja:、ʔa:i　ta:m　bura:nu］（この家に誰がいるのかねえ。いや、誰もいないよ）。トーキョー┐ナ　ドゥシヌ　ブン［to:kjo:na　duʃinu　buŋ］（東京に友人がいる）

フン［Φuŋ］（名）釘。「釘」の総称。カニフン［kaniΦuŋ］（金釘、鉄釘）、タキフン［tąkiΦuŋ］（竹釘）、キー┐フン［ki:Φuŋ］（木釘）などがある。「釘　久岐、鉄桟也」（『和名抄』）。「鐕　岐利久岐、無レ蓋釘也。栓　岐久岐、木釘也」（『和名抄』）とある。例、ヤドゥ┐ヌ　パガ┐リ　ナーン┐バ　フン　カイ┐キ　ウタン┐ノーレー［jadunu　pagari　na:mba　Φuŋ　kaiki:　ʔutanno:re:］（戸が剝がれてしまったので釘を買ってきて打たないか。≪打ってくれ≫）

フン┐ドゥー［Φundu:］（名）木釘の一種。杉板でサバニを作る際、板と板の接合部分をタキフン（竹釘）を打ちこんで接ぎ合わせ、竹釘を補強するために嵌めこむ▷◁型の釘。幅約3.5センチ、長さ約６センチ、厚さ約1.5センチのイヌ槇で作った釘。一種の鎹（カスガイ）の機能を果たす釘。例、タキフンマー　ヨー┐タンティン　フン┐ドゥー　イル┐カー　┐イダフネー　ウーカ┐ヌ［tąkiΦumma:　jo:tantin　Φundu:　ʔiruka:　ʔidaΦune:　ʔu:kanu］（竹釘は弱くても、フンドゥーを入れると、イダフニ≪板舟≫は動かない。≪びくともしない≫）

フンナー┐マ［Φunna:ma］（名）「小釘」の義。［-na:ma］の美称の指小辞（diminutive）。語尾が撥音［n］で終る場合は、［n］を重ねて［pan］（足）→［panna:ma］（小さな足）、語尾が母音［i］で終る場合は、［Φuni］（舟）→［Φune:ma］（小舟）、語尾が母音［u］で

Hosei University Repository

終る語は、[pąku]（箱）→［pąko:ma］（小箱）、語尾が母音［a］で終る語は、[ʃima]（島）→［ʃima:ma］（小島）のように形態変化を示す。

ペーラ˥・フチ［pe:ra-Φu̯tʃi］（名）「入り口」の義。門のこと。門は、門前の路面より2～3段上げて作られていた。最低一段は上げて作ることになっていた。門の両側の石積は、大きな石を削って形を整えたものを使っていた。葬列が門前を通過する場合は、竹竿をX型に交叉させて立て、悪霊の侵入を防ぐ習慣が終戦後まであった。また旧盆（ソーラン［so:raŋ]）には、13日の夕方になると、祖霊を迎えるために、門の内側に藁束に燠を入れて煙をたてる習俗があり、島では今も行なわれている。最近では線香を立てる家もあるようである。祖霊は、この煙に乗って下りて来られると信じられている。例、ウキナー˥・プソー　ペーラフチ˥バ　˥ゾーティ　アゾール˥ヌ　ベー˥シマ・プソー　ペーラフチ˥ヌ　˥フカンタバ　˥ゾーティ　アゾー˥ル［ʔukina:-pu̯so: pe:ra-Φu̯tʃiba dzo:ti ʔadzo:runu be:ʃima-puso: pe:raΦu̯tʃinu Φu̯kantaba dzo:ti ʔadzo:ru］（沖縄の人は門をゾーといわれるが、我が島人は、門の外側（道路）を、ゾーというのだ）。

ペーリ˥・フチ［pe:ri-Φu̯tʃi］（名）「入り方、入った時」の義。熟睡して、他人が家の中に入ったことを知らない場合にいう。「フチ」［Φu̯tʃi］は、「口、やり方、方法」などを表す。例、ニビシキティ˥　イチヌマドゥ˥ル　ムドゥ˥リ　クー˥タユー　ウリヌ　ペーリ˥・フチ　ッサン˥　ツォー［nibiʃi̯kiti ʔitʃinu maduru muduri ku:taju: ʔurinu pe:riΦu̯tʃi ssan tso:］（眠りこけて、いつの間に戻って来たのか　あれ（彼）の入り方を知らないそうだ）

ポー˥キ［po:ki］（名）箒。タキポーキ［tąki-po:ki］（竹箒）、バラフ˥タポーキ［baraΦu̯ta-po:ki］（藁箒）、フー˥カラポーキ［Φu:kara-po:ki］（シュロ箒）などがある。竹箒は庭を掃くもの、バラフ˥タポーキは藁の芯で作った室内用の箒である。直径1センチほどに束ねた藁の芯を扇形に編みあげてつくり、片手に持って、屈みながら掃く。上座の箒と下座の箒を別々に作って利用した。タキポーキは西表島の北岸の田地の近くの山からポー˥キダキ［po:kidaki］（箒竹）を伐ってきて、六七本束ねて作ったものが最も簡単なもの。筆状の形をしており、子供にも手軽に作れた。後に石垣から輸入された新式の箒は、30センチほどの竹の枝を平たく結えて、それに約1メートルほどの柄をつけたものであった。ナカ˥ザポーキ［nakadza-po:ki］は、台所の土間を掃くために作った、ソテツの葉を四五枚合わせて結えた箒。

ポー˥クン［po:kuŋ］（動）掃く。ポーカ˥ヌ［po:kanu］（掃かない）、ポー˥キティ［po:ki̯ti］（掃いて）、ポーキ˥プサン［po:kipu̯saŋ］（掃きたい）、ポー˥クカー［po:ku̯ka:］（掃いたら）。例、シトゥム˥テー　ミナ˥カ　ポー˥キティ　ガッ˥コー　˥パリ［ʃi̯tumute: minaka po:ki̯ti gakko: pari］（朝は庭を掃いてから、学校へ行きなさい）。朝、昼は外側へ向けて掃くが、夜は先ず3回内側に掃いてから室外へ掃き出す習慣がある。

Hosei University Repository

ンーナヤシキ [ʔnːna-jaʃi̥ki̥] (名) 空き屋敷。人の住むんでいない屋敷。人家のない屋敷。ンーナ・カク [ʔnːna-kḁku̥] (空き屋敷) ともいう。例、マルケーティー┐ナ　シマ┐ナーギー　ミッタ┐ヌ　ンーナ　ヤシキヌ　ゴー┐ラー　┐ナリティ　サボーリブタ┐ [marukeːtina simanaː giːmittanu ʔnːnajaʃi̥kinu goːraːnariti saboːri buta] (久々に、島に行ってみたが、空き屋敷が増えて、さびれていたよ)

ロー┐スク [roːsu̥ku] (名) 蠟燭。綿のより糸を芯にして、蠟を直径約2センチの円柱状に固めたもの。普通はほとんど用いなかった。お盆のときには仏壇に提灯をさげ、それに蠟燭をともして祖霊を迎え、もてなした。例、ロー┐スコー　チョー┐チンナ　イリティ┐トゥクニ┐ナ　サイ┐リ [roːsu̥koː tʃoːtʃinnaːʔiriti tu̥kunina sairi] (蠟燭は提灯に入れて、仏壇につるしなさい)

ルクサク┐・ボー [rukusaku-boː] 「六尺棒」の義。西村の棒踊名称。西村の棒踊りの代表的なもので、六尺の棒を持った一組の勇壮な男たちによって演ぜられる。例、インヌムラヌ┐　ルクサクボー┐ヤ　ガマ┐ク　イリティ┐　ウトゥンダー　イッケン┐　ウムッ┐サン [ʔinnumuranu rukusaku-boːja gamaku ʔiriti ʔutundaː ʔikken ʔumussaŋ] (西村の六尺棒は、ガマクを入れて打つので、非常におもしろい)

リョーバーヌキル [rjoːbaːnukiru] (名) 「両歯鋸」の義か。サイクヌキ┐ル (細工用の鋸) の一種。鋸の両方に歯のついたもので、一方がヨコビキ [jokobiki]、他方がタテビ┐キ [tatebiki] (縦びき) となっている。タテビキは木材の木目にそって鋸をひくもの。ヨコギキは輪切にするように鋸を使うこと。例、リョーバー・ヌキル┐シ　┐イツァー　┐キシティ　シゥカウタ [rjoːbaːnukiruʃi ʔitsaː ki̥ʃiti si̥kauta] (両歯鋸で板を切って使った)。

ランプ [rampu] (名) 「ランプ」のこと。「lamp (洋灯)」の転。人によっては、ダンプ [dampu」ということもある。ゴブ┐ランプ [goburampu] (五分ランプ)、ハチブ┐ランプ [hḁtʃiburampu] (八分ランプ) 等がある。灯心の大きさを示すもので、それが明度を示すこともある。例、ゴブ┐ランポー　ッファー┐ヌ　ハチブ┐ランプ　シキ┐リ [gobu-rampoː ffaːnu hatʃiburampu ʃi̥kiri] (五分ランプは暗いから、八分ランプをつけなさい)

ユチル [jutʃiru] (名) えつり (桟)。屋敷の垂木の上に、ユチルダキ [jutʃirudaki] (えつり竹) を並べて、クー┐ジ [kuːdʒi] (とう蔓もどき) の皮で編みあげたもの。竹を根と末の部分を交互にヤラザイ [jaradzai] (交差させ) つつ編みあげる。瓦葺きの場合は、竹と竹の間隔が1ミリ程度になるよう、密に編み、茅葺きの場合は、1センチ程度の間隔をあけてユチルを編む。屋根葺きの下地としたもの。瓦葺きの場合は、その上に土を水で捏ねて乗せ、その上に瓦を並べて固定して葺いていく。「取置蘆葺(えつり)<哀都利(えつり)>者、此家長御心之平地」(顕宗前紀)。「枌　屋乃衣豆利(ヤノエツリ)」(『新撰字鏡享和本』)、「桟　瓦乃衣都利(えつり)～」(『和名

Hosei University Repository

抄』）とある。例、ユチルフミシンカ˥ヌ　タラーンバ　テー˥ナイ　シーッフィーリ［jutʃiruΦumi-ʃiŋkanu　taraːmba　teːnai　ʃiːffiːri］（えつりを編む人手が足りないので、手伝ってくれ）。「アーパーレー」には、「やー　たましだり　ゆちるばしーやーば　すくり　あんでぃすー」（ああ、玉簾をえつりにして、家を造ってあるという）と歌われている。「玉簾」は、「玉のような立派な簾」の意。この場合、茅葺きの家を造ることを前提としているので、ユチルを粗く編んだものをさすと考えられる。

ユコー［jukoː］（名）裏座の総称。イチバン・ウラ˥ザ［ʔitʃiban-uradza］（一番裏座）、ニーバン・ウラ˥ザ［niːban-uradza］（二番裏座）を総称していうことば。一番裏座は、青年期に達した息子たちが利用したり、年頃の娘たちが利用した。二番裏座は物置きに利用されたり、˥シラ［ʃira］（産室）に利用されたりした。例、ユコー˥ナー　ノーンコーレ　カザミ　シケー［jukoːnaː　noːŋkoːreː　kadzami　ʃi̥keː］（裏座にいろんなものを隠してある）。

ユクンツア˥メー［jukuntsameː］（名）床下。「床下・目」の義か。「-メー」は「～の中、間、奥まった空間」の意。普通は「-ミー」［-miː］（～の中）という。床下には竿や櫂、銛などを収納しておくことが多い。例、ユクンツァ˥メーナ　˥サウラ　˥ヤク　˥ユクン　カナパイン˥ドーレ　フジナキ˥　シケー［jukuntsameːna saura jaku jukuŋ kanapaindoːre Φudʒinaki　ʃi̥keː］（床下に竿から櫂、銛、鍬などをおしこんでおいてある）

ユカム˥チ［jukamutʃi］（名）「床持ち」の義か。　床板を張る際に、それを支える梁の一種。イツァフン˥ツァ［ʔitsaΦuntsa］（板床）は、このユカム˥チに　˥サン［saŋ］（桟）をわたして釘を打つ。タキフンツァ［tḁkiΦuntsa］（竹床）の場合は、ユカムチにわたした　˥サン［saŋ］（桟）に竹をかけて編み、床竹がユカムチからあくれぬよう、ヌシ˥トゥル［nuʃi̥turu］（ユカムチの下から掛けた竹）を入れて、締めつけながら編みあげていく。

ユー˥フル［juːΦuru］（名）風呂。鳩間島では風呂のある家は二、三軒しかなかった。普通は海に入って、˥オンダー［ʔondaː］（海水浴）をして体の汚れを落し、井戸水をかぶって海水を洗い流すことで入浴にかえていた。例、パトゥ˥マナテー　ユー˥フルティ　スモーペー˥リ　ミラン˥セン［pḁtumanateː juːΦuruti sumoː peːri miranseŋ］（鳩間では、風呂というのは入ってみなかった）

˥ヤルン［jaruŋ］（動）破る。衣類や紙類のように、うすいものを破る意。ヤラ˥ヌ［jaranu］（破らない）,˥ヤリティ［jariti］（破って）、˥ヤルカー［jarukaː］（破ると）。例、˥アイニ　ピキスク˥カー　ヤリ˥スンダ　ピキスクナ［ʔaini pi̥kisu̥kukaː jarisunda pi̥kisukuna］（あんなに引っぱると破れるから、引っぱるな）

ヤマヌキ˥ル［jamanukiru］（名）山鋸。伐採用鋸。幅約10センチ、長さ約60センチの鋸。山中での伐採作業に便利な、小型の鋸で、よく切れるものを持参した。山に入る前にヤシ˥ル［jaʃiru］（鑢）で鋸の歯をたて、板で作ったケースに入れて持参した。例、ヤマヌキ˥

Hosei University Repository

ロー　ヤマ¬ー　ペー¬ル　¬マイナー　ヤシ¬ルシ　パー　タティ¬シタ［jamanukiro: jama:　pe:ru　maina:　jaʃiruʃi　pa:　tatiʃita］（山鋸は山へ入る前に鑢で歯をたてた）

ヤブ¬ルン［jaburuŋ］（動）①破る。紙や布を裂く。②機械をこわす。器機類の機能をこわす。③人間の気持、性質等を異常にする。ヤブラヌ［jaburanu］（破らない）、ヤブリティ［jaburiti］（破って）、ヤブリン¬ギサン［jaburiŋgisaŋ］（破りそう）、ヤブ¬ルカー［jaburuka:］（破ったら）。例、キカイ¬ヤ　ヤブ¬リティ　ウーカ¬ヌ［kikaija　jaburiti ʔu:kanu］（機械はこわれて動かない）

ヤシ¬キ［jaʃiki］（名）屋敷。ウブ・ヤシ¬キ［ʔubu-jaʃiki］（大きな屋敷）、ヤシケー¬マ［jaʃike:ma］（小さな屋敷）、¬サンカク・ヤシキ［saŋkaku-jaʃiki］（三角屋敷、このヤシキはフン¬シ（風水）がよくないといわれている）、ヤーヤシ¬キ［ja:-jaʃiki］（家屋敷、財産）などの語がある。例、ヤーヤシ¬キーン　アラ¬シ　マイフナー¬　ドー［ja:-jaʃiki:n　ʔaraʃi　maiΦuna:　do:］（家屋敷も持つことができて、立派な男だ）

ヤキバイ［jakibai］（名）ススキの原野を焼きはらって枯らしたススキ。これを刈りとって燃料とした。ススキの原野は焼きはらっても、後から新芽が出てくる。焼畑開墾をする際は、先ずススキの原野を焼きはらい、ユシ¬キムトゥ［jaʃikimutu］（すすきの根っこ）をコーシティ［ko:ʃiti］（掘りおこして）、畑を耕した。例、ヤキバイ¬　スリキー　モーシ¬［jakibai　suriki:　mo:ʃi］（ヤキバイを刈りてきて燃しなさい）。

ヤー¬マ［ja:ma］（名）小屋。-マ［–ma］は美称辞。ウシヌ　ヤー¬マ［ʔuʃinu　ja:ma］（牛小屋）、ピビザン　ヤー¬マ［pibidzaɲ　ja:ma］（山羊小屋）、トゥルン　ヤー¬マ［turuɲ ja:ma］（鶏舎）などがある。

例、ヤー¬ヌ　¬シンタナー　ピビザン　ヤー¬マ　スク¬リティ　ピビザ¬　シゥカナウ¬タ［ja:nu　ʃintana:　pibidzaɲ　ja:ma　sukuriti　pibidza　sikanauta］（母屋の後に山羊小屋を作って山羊を飼った）

ヤーフキ¬・プス［ja:Φuki-pusu］（名）「家葺き人」の義。屋根葺き職人。屋根葺き担当の人の意。島の大人（男）は誰でも屋根を葺くことはできるが、新築の際は部落民総出で当った。いわゆる¬バコー［bako:］（共同作業）であったから、若い力のある青壮年の人たちが進んでその任に当たった。長老たちは地上から作業を眺めては細かな助言を与えつつ進行させた。茅を屋根まで投げ上げるのも若い人の仕事であった。

ヤーバカ¬リ［ja:bakari］（名）「家分かれ」の義。本家から二男・三男などが分家すること。例、ジナンマー¬　ニービキ　スー¬カー　イチンバー¬キン　ヤー¬ナ　シキララ¬ンダー　ヤーバカ¬リ　シミス¬ヨー［dʒinamma:　ni:biki　su:ka:　ʔitʃimba:kiɲ　ja:na ʃikiraranda:　ja:bakari　ʃimisujo:］（二男は結婚したら、いつまでも家におけないから、分家させるよ）

ヤー¬ヌ・ピサ［ja:nu-pisa］（名）「家の平」の義。屋根のこと。ユーピサ・ヤー［ju:pisa-

Hosei University Repository

ja:] (「四平家」の義、寄せ棟の家)、フタピサヤー [Φu̯tapi̯sa-ja:] (「二平家」の義。切妻屋根) などがある。マンタヌ・ピサ [mantanu-pi̯sa] (前の平)、シンタヌ・ピサ [ʃintanu-pi̯sa] (後の平)、アンタヌピサ [ʔantanu-pi̯sa] (東の平)、インタヌ・ピサ [ʔintanu-pi̯sa] (西の平) などがある。

例、˥イノーカジヌ˥フキティ　ヤー˥ヌ　マンタピサヌ　カー˥ラ　ウコー˥シ　トゥバシ˥・パリ　ナー˥ヌ [ʔinoːkadʒinu Φu̯kiti jaːnu manta-pi̯sanu kaːra ʔukoːʃi tubaʃi-pari naːnu] (竜巻が吹いて、家の前平の瓦をおこして飛ばしていってしまった)。

ヤー˥ヌ・カク [jaːnu-ka̯ku] (名)「家の囲い」の義。屋敷のこと。ンーナ・カク [ʔnːna-ka̯ku] (名) は「空(ムナ)家敷」の義。人の住まない家敷のこと。ンナヤシキ [ʔnːna-jaʃi̯ki] (空家敷) ともいう。シンタ・カク [ʃinta-ka̯ku] (後の家敷)、マンタ・カク [manta-ka̯ku] (前の家敷) のようにいう。例、ヤー˥ヌ・カク˥ナー　ヤラブ˥　イビルモー　˥アラヌ [jaːnu-ka̯kunaː jarabu ʔibirumoː ʔaranu] (家敷内にヤラブの木を植えるものではない)。

ヤー˥ヌ・カキ [jaːnu-ka̯ki] (連語) 家の垣根。分家筋で、新しく家を構えた人などが屋敷の囲いとして竹垣や木の柵を作ったもの。板垣で囲う人もいたが、古い家はすべて石垣で囲ってあった。例、ヤー˥ヌ・カキ˥　イツァシ　スク˥リシケーメ [jaː-nu-ka̯ki ʔitsaʃi su̯kuri-ʃi̯keːme] (屋敷の垣根を板で作ってあるよ。もう)。

ヤーザイ˥ク [jaːdzaiku] (名)「家大工」の義。「細工」の転訛したもの。家を造る大工のこと。例、˥アブジェー　ヤーザイ˥ク　シー　オーッ˥タ　˥ケンヌ　サイクダング˥ヌ　マナー˥キ　アン [ʔabudʒeː jaːdzaiku ʃiːoːtta kennu saiku-daŋgunu manaːki ʔaŋ] (おじいさんが家大工をしておられた時の大工道具が今まである)

ヤーウツ˥リ [jaːutsuri] (名) 家移り。引越。

例、ミーヤーン　スク˥ローレーンティ　シティテー˥　イチル　ヤーウツ˥リ　ソール˥ワ [miː-jaːn su̯kuroːreːnti ʃi̯titeː ʔitʃiru jaːutsuri soːruwa] (新しい家も造られたというのに、して、いつ引越しなさいますか)。

˥ヤー [jaː] (名) 家。カー˥ラ・ヤー [kaːra-jaː] (「瓦家」の義、瓦葺きの家)、˥ガヤ・ヤー [gaja-jaː] (「茅家」の義、茅葺きの家)、ヌキ・ヤー [nuki-jaː] (「貫き家」の義、柱や桁材、梁などに枘や枘穴を作って連結し、楔を打ち込んで固める工法で作った家)。アナ˥プリヤー [ʔanapuri-jaː] (「穴掘り家」の義。掘建て小屋)、ヤー˥マ [jaːma] (小屋)、キー・˥ヤー [kiː-jaː] (木材乾燥用の小屋)、アラ・ヤー [ʔara-jaː] (新築した家。「新家」の義)、ッフ˥・ヤー [ffu-jaː] (「古家」の義、建築して長い年月のたった家)。ヒラヤー [çira-jaː] (「平家」の義。二階建てに対する一階建ての家のこと)。ヤー˥・キナイ [jaː-kinai] は「家庭」の意。

例、ワー˥　メー　ヤー˥ユン　スク˥リ　イッケナ˥　マイフナー˥　ドー [waː meː jaː-

Hosei University Repository

jun sʉkuri ʔikkena maiΦunaː doː]（貴方は、もう家も新築して、大変立派な男だ、働き者だよ）

モミパク [momipaku]（名）籾箱。もみを入れる大きな箱。幅約3尺に長さ約6尺、高さ約5尺ほどの木製の箱で、普通は裏座に置いていた。いったん脱穀した籾を一日ほど夏の太陽に干して、籾箱に移して保管した。これから必要に応じて籾擢りをし、搗き臼で精米した。例、˥キュー ˥プセー モメー˥ モミパク˥ナー イリ˥バ [kjuː pʉseː momeː momipakuna ʔiriba]（今日干した籾は、籾箱に入れなさいよ）

モースン [moːsuŋ]（動・他）燃やす。モーサヌ [moːsanu]（燃やさない）、モーシティ [moːʃʉti]（燃やして）、モーシ˥プサン [moːʃipʉsaŋ]（燃やしたい）、モーシン˥ギサン [moːʃiŋgisaŋ]（燃やしそうだ）。

例、˥ウナー ポッツァーリベ˥ー カビン˥キシ アツァ˥ミティ モーシ˥バ [ʔunaː pottsaːri-beː kabiŋkiʃi ʔatsamiti moːʃiba]（そこに散らかっている紙きれを集めて燃やしなさいよ）

メー˥ヌ・ウチ [meːnu-utʃi]（名）「メー」は、一定の区域。一定の広さのある地区。転じて、「屋敷」の意となる。敷地。空き地の意。古謡語。「しるうちぬ めーうち やーば すくり あんてぃす、以下略」のように用いられる「アーパーレ」（新室寿歌）参照。「メーヌ・ウチ」で「屋敷の内」、「敷地の内」、「一定の空き地の内」の意となる。

˥ムヤーバラー [mujaːbaraː]（名）「母屋柱」の義。ハギバラー [hagibaraː]（脛柱）の内側に立つ柱。この柱は、ヌキヤー [nuki-jaː]（貫き家）の柱に対して言う。アナ˥プリヤー [ʔanapuri-jaː]（穴掘り家。掘建て小屋）の柱には言わない。普通は、フクンキー [Φʉkuŋkiː]（福木）を四寸角、五寸角の角材にして用いた。例、ヤマ˥ー ペー˥ル アーシ˥ ムヤーバラー プスムトゥ˥ナーンザ˥シ クー˥タ [jamaː peːru ʔaːʃi mujaːbaraː pʉsumutunaː ʔndzaʃi kuːta]（山に入るたびに母屋柱を一本ずつ出してきた）

ムニアギ [muniagi]（名）「棟上げ」の義。吉日を選んで棟上げをする。˥ムヤーバラー（母屋柱）を立て、ナカ˥バラー（大黒柱）を立てて、˥キタ [kita]（桁材）をかけ、棟木を上げる。ンニギー [ʔnnigiː]（棟上）には「天宮賜福柴微鑾駕」と墨書し、ピル [piru]（にんにくの種子）と塩を包んでそれに吊す。棟上げ式は、潮の満ち時に合わせて行なう。四角（よすみ）の˥ムヤーバラーの上には紅白の餅を供え、ナカ˥バラーの上にも紅白の餅を供えて祈願する。祈願が終ると、家主と大工の棟梁が、屋根の上から餅まきをする。子供たちや村人たちは、その餅を拾うためにたくさん集まって来る。例、バン˥テヌ ウブ˥ヤー ムニアギ ソーッ˥タバス イッ˥トゥ ムチ ポーロッー˥タン ダー˥ [bantenu ʔubujaː muniagi soːtta basu ʔittu mutʃi poːroːttan daː]（私の家の母屋の棟上をされたとき、一斗の餅を撒かれたよ）

ムチアー˥スン [mutʃiaːsuŋ]（動）漆喰をつく。ムチアーサ˥ヌ [mutʃiaːsanu]（漆喰を搗か

Hosei University Repository

ない)、ムチアー˥シティ [mutʃiaʃi̥ti] (漆喰を搗いて)、ムチアーシ˥プス [mutʃia:ʃi-pu̥su] (漆喰をつく人)、ムチアー˥スピン [mutʃia:su-piŋ] (漆喰をつくとき)、ムチアー˥スカー [mutʃi-a:su̥ka:] (漆喰をつくと)、ムチアー˥シ [mutʃia:ʃi] (漆喰をつけ)、ムチアー˥セー [mutʃia:se:] (漆喰つきは)。

ムチアー˥シ [mutʃia:ʃi] (名)「もち合わせ」の義か。漆喰を搗いて捏ねること。ムチシッ˥キ [mutʃiʃikki] (漆喰つき) ともいう。

例、ムチアーシ˥ヌ　アタロー　バン˥タン　ナリ˥スヨー　ムチッファーシル˥　ナラン˥タル [mutʃia:ʃinu ʔataro: bantan narisujo: mutʃiffa:ʃiru narantaru] (漆喰搗きぐらいは　僕らも出来るよ。漆喰塗りが出来ないんであって)

ムチ [mutʃi] (名) 漆喰。「もち (餅)」の義。粘着力があるところから、ムチと名づけられたのであろう。海中の枝珊瑚を採取して焼き、これを粉末にし、藁などを切って加え、水で捏ねあわせたもの。粉末状のものを、ウールパイ [ʔu:rupai] (石灰) という。ムチヌーリ・プス [mutʃinu:ri-pu̥su] (左官屋) は、特にいなかったが、島人は各自で自家の左官の仕事もこなしていた。鳩間島で左官を専業としたのは小浜真栄氏、鳩間昇氏らが最初であろう。例、カー˥ラシ　˥ヤー　フクタンティン˥　ムチ˥　ッファーサン˥カー　タイ˥フーナー　カー˥ラ　パガリ˥スッォー [ka:raʃi ja: Φu̥kutantim mutʃiffa:saŋka: tai Φu:na: ka:ra pagarisu] (瓦で家を葺いても漆喰を喰わさないと≪塗らないと≫、台風で瓦は剝ぎとられるよ)

ムサ [musa] (名) 荒波。台風が接近して風が強くなると、波頭がたち、白波がたつようになる。漁師は波頭に白波がたつようになると出漁しない。ムサ˥　ウク˥ルン [musa ʔukuruŋ] (ムサがおこる、白波がたつ)、ムサ　ズー˥ワン [musa dzu:waŋ] (ムサが強い) などという。例、キュー˥ヤ　ムサヌ˥　ウク˥リティ　イガメー˥　ンジララ˥ヌ [kju:ja musanu ʔukuriti ʔigame: ʔndʒiraranu] (今日はムサがおこっていてイカ漁には出られない)。

ムイルン [muiruŋ] (動、自) 燃える。ムイラヌ [muiranu] (燃えない)、ムイティ [muiti] (燃えて)、ムイン˥ギサン [muiŋgisaŋ] (燃えそうだ)、ムイル˥カー [muiruka:] (燃えたら)、ムー˥カー [mu:ka:] (燃えたら) ともいう。例、キー˥ヌ　ムイルン [ki:nu muiruŋ] (木が燃える)、ゾッフィタイムノー　ピッ˥チン　ムイラヌ [dzoffitamuno: pittʃim muiranu] (濡れた薪はちっとも燃えない)

ミルクヌ・オン˥ギ [mirukunu-oŋgi] (名)「弥勤神の扇」の義。豊年祭や結願祭のゾーラキ [dzo:raki] (踊り、余興) の中で踊られる「弥勤踊り」の弥勤神が持つ扇。軍配団扇の形に似る。例、インヌムラヌ˥　ミルコー˥　ミルクヌ・オンギ˥バ　˥ムテーティ　ブドゥルソー˥ル [ʔinnumuranu miruko: mirukunu ʔoŋgiba mute:ti buduru so:ru] (西村のミルク神はミルク扇を持って踊りをされる)

Hosei University Repository

ミナ┐カ [minaka]（名）庭。母屋の前の空間。穀物を干したり、仕事をしたりする所。稲の脱穀や米搗きをしたり、イガ [ʔiga]（烏賊）をシダ┐ル [ʃidaru]（ススキで編んだすだれ）の上に置いて干すのに利用した。イー┐シ [ʔiːʃi]（つのまた）なども庭で干して乾燥させた。アンタヌ・ミナ┐カ [ʔantanu-minaka]（家の東側の庭）、マンタ・ミナ┐カ [manta-minaka]（家の前の庭）などというが、後や西側にはあまり言わない。家の後方は、普通は菜園に利用され、西側には鶏舎や畜舎が建てられたので、庭としての空間がとれなかったからであろう。例、カジフキ┐ナー　キーヌパー┐ヌ　┐ウティティ　ミナ┐カ　シラー┐シ　シケーバ　ミナ┐カ　ポー┐キ [kadʒiΦu̥kina　kiːnu-paːnu　ʔutiti　minaka　ʃiraːʃi　ʃi̥keːba　minaka　poːki]（「風吹き≪台風≫で木の葉が落ちて庭を散らかしてあるので、庭をはきなさい）

ミチェー┐マ [mitʃeːma]（名）路地。狭い通路。グマ・ミチェー┐マ [guma-mitʃeːma]（「小さい・小道」の義。人（ひと）一人通ることができるような小路。畑の畔道など）はミチェー┐マより小さい路をさす。例、ウブ┐マイ・ミチェーラ　パタキ┐ヌ　┐アザダーチ　ヤラーバー┐キ　ミチェーマ┐ヌ　トゥー┐リ　ブン [ʔubumai　mitʃeːra　pḁtakinu　ʔadzadaːtʃi　jaraːbaːki　mitʃeːmanu　tuːri　buŋ]（大前道から畑の畔にそって屋良まで小路が通っている）

ミズ┐ヤ [midzuja]（名）「水屋」の義。茶器や食器類を入れて置くもの。台所のある三番座の一角に置かれる。型には大小さまざまあるが、普通は奥行約45センチ、幅約80センチ、高さ約120センチ程度のものがよく利用されていた。例、ミズヤ┐ン　ナカ┐ナー　ッフ┐サタ　イリ┐シケーバ　ンザ┐シ　ミー┐ [midzujan　nakanaː　ffusḁta　ʔiriʃi̥keːba　ʔndzaʃi　miː]（水屋の中に黒砂糖を入れてあるので、出してごらん）。借用語。

ミジン┐ダナ [midʒindana]（名）「水棚」の義。台所の流しのこと。食器類を洗って水切りのために伏せておく所。炊事場の近くに、約１メートルの高さに、幅約60センチ、長さ約80センチの長方形の棚をかけ、簀をかけたもの。例、ミジン┐ダナナ　マカ┐ル　アラシティティ┐　ウスンフカシ┐　シキ┐リバ [midʒindanana　makaru　ʔaraʃi̥titi　ʔusunΦu̥kaʃi　ʃi̥kiriba]（流しに、お碗を洗って伏せておきなさいよ）

ミジクブ┐サー [midʒikubusaː]（名）素焼きの鉢。直径約30センチ、深さ約15センチほどの女性用小水入れ。女性は、夜間の小用は、土間に置いてあるミジクブサーでたして、翌朝便所に流した。戦後は若い女性は使わなくなり、病人が使用するようになった。例、バカー┐モー　バカヤ┐ティ　シー┐　ミジクブ┐サーナー　シバ┐ル　サンセン [bakaːmoː　bakajati　ʃiː　midʒikubusaːna:　ʃibaru　sanseŋ]（若い人は、恥かしいといってミジクブサーでは小用をたさなかった）

ミーガー┐ラ [miːgaːra]（名）雌瓦。屋根のえつり（桟）に粘土を乗せ、その上にミーガーラを二枚ずつ重ねて敷き固定する。その瓦のこと。雌瓦は台形をなし、ゆるく湾曲してい

Hosei University Repository

る。軒のカーラシキの上から葺き始め、棟の方へと葺きあげていく。雌瓦と雌瓦の接合部分に粘土を盛り雄瓦を被せて葺く。接ぎ目には、ムチ［mutʃi］（漆喰）を塗って固定し、赤瓦と白色の漆喰のコントラストを示す屋根に葺きあげる。例、ミーガー┐ラー　ニンマイ┐ナー　アー┐シティ　ッサンタ┐ナー　シキティ┐　フク［mi:ga:ra:　nimmaina:　ʔa:ʃi̥ti　ssantana:　ʃi̥kiti　Φu̥ku］（雌瓦は、二枚ずつ合わせて、下に敷いて葺く）

マルカナ［marukana］（名）丸鉋。曲面を削るために用いる鉋。ウー┐キ［ʔu:ki］（桶）やミジタン┐グ［midʒitaŋgu］（水担桶）の板の曲面を削ったり、舟（┐イダフニ［ʔidaΦuni］（板舟））の底面を削ったりするのに用いる鉋。例、マルカナ┐シ　ウーキ┐ヌ　┐スバ　キジ┐バ［marukanaʃi　ʔu:kinu　suba　ʃi̥kiba］（丸鉋で桶の側面を鉋かけしなさい）。

マッ┐ファ［maffa］（名）枕。枕の総称。キーマッ┐ファ［ki:maffa］（木枕）、ヌーヌマッファ［nu:numaffa］（布枕）、パクマッファ［pḁkumaffa］（箱枕）などがある。ティーマッ┐ファ［ti:maffa］（母親が子供を寝かす際に、母の腕を枕にして寝かすことをいう。「手枕」の義）。「しきたへの麻久良（マクラ）さらずて」（『万』-809）、「枕　方久良（まくら）、承レ頭木也」（『和名抄』）。makura→makkwa→maffaのように音頭変化を起こしたものであろう。

マキワラ［makiwara］（名）杉の皮の繊維を十分に乾燥させて、船の板の接合部分にさしこんで水もれを防ぐのに用いるもの。また、平釘を打つ際にも、平釘の頭部に巻きつけて打ちこむのに用いる。例、マキワラバ┐　ヒラクギヌ┐　スブ┐ルナ　マキティ┐　ウトゥカームリラ┐ヌ［makiwaraba　çirakuginu　suburuna　makiti　ʔutuka:　muriranu］（マキワラを平釘の頭に巻いて打つともれない。水もれしない）

マイグス┐ク［mai-gusu̥ku］（名）「前の石垣」の義。家の前面（南側）の石垣。┐シンタ・グス┐ク［ʃinta-gusu̥ku］（後の石垣）、インタグス┐ク［ʔinta-gusu̥ku］（西側の石垣）。アンタ・グス┐ク［ʔanta-gusu̥ku］（東側の石垣）などがある。マイグス┐クは高く、頑丈に積むのが一般であった。例、マイグス┐コー　タカータカー┐シ　シモーッ┐タ［maigusu̥ko:　tḁka:tḁka:ʃi　ʃimo:tta］（前方の石垣は高く積まれた）

マーリ┐ザ［ma:ridza］（名）甍止めのティブ┐ク［tibuku］（手矛）。甍を固定するためカキ┐ナー［kḁkina:］（掛け縄）を掛けて引き締めるのに用いる。直径約3センチ、長さ約3メートル程のティブ:クを棟の両側から斜めに突き刺してあるもの。例、カキナー┐ヤマーリ┐ザナ　┐カキティ　シミ┐リ［kḁkina:ja　ma:ridzana　kḁkiti　ʃimiri］（掛け縄は、マーリザに掛けて締めなさい）

マーシ・ヤドゥ［ma:ʃi-jadu］（名）「回わし屋戸」の義。戸の片方の桟に蝶番をつけて、それを戸口の柱に付けて、押したり、引いたりして開閉する戸。開き戸。ドア形式の戸。例、マーシ・ヤドー┐　ドゥク　グチ┐ホーニ　アキフイ　スー┐カー　ヤブリ┐ス［ma:ʃi-jado:　duku　gutʃiho:ni　ʔaki-Φui　su:ka　jaburisu］（開き戸は≪回わし屋戸≫、あんまり、むてっぽうに開閉すると、破れてしまうよ）

Hosei University Repository

マーシヌキル [maːʃi-nukiru]（名）「回わし鋸」の義か。桶の底や┐イダフニ [ʔidaΦuni]（板舟、サバニ）の底の板を接合するために、幅の小さい鋸を入れてひきながら、接合部分を密着させ、水もれをとめるようにするための鋸。例、タング┐ヌ　スクヌ┐　┐イツァー　マーシヌキル┐シ　ピキティ　アー┐シ [taŋgunu sʉkunu ʔitsaː maːʃinukiruʃi pʉkiti ʔaːʃi]（担桶の底の板は回わし鋸を入れて引きながら合わせなさい）

マーキ [maːki]（名）「真木」の義か。樹木の幹や枝を切って薪としたもの。木の薪。タム┐ヌ [tamunu]（薪）となる樹木のこと。西表島の北岸のタータバ┐ル（田地）の近くの山から、田仕事の合間に木を伐り出して鳩間島へ運び、それを約40センチの長さに切って、斧で割り、竈の上のタム┐ヌダナ [tamunudana]（薪棚）にあげて乾燥させ、燃料とした。一時期、それを束にして石垣へ売り出したこともあったが、石油におされて続かなくなった。

マー・ガヤー [maː-gajaː]（名）「真茅」の義か。鍋蓋や、フィ┐バ [Φuiba]（茅で編んだ穀物入れ）などを編むのに用いる長い茅。約150センチ程の長さに成長する。この茅を根っこの方から刈り取って二、三日陰干しにし、軟くなった頃に、直径約１センチの太さに束ねてて、マーニの皮やクージの皮で巻き締めながら鍋蓋やフィバを編みあげていく。
例、マーガヤー┐　スリクー [maːgajaː suriku:]（真茅を刈り取って来なさい）